



# ローバースカウトハンドブック

## Rover Scout Handbook



公益財団法人

**ボーイスカウト日本連盟**

SCOUT ASSOCIATION OF JAPAN

## はじめに

---

### 「ローバースカウトの活動って、一体何？」

これまで国内の多くのローバースカウトが疑問に思ってきたように思う。その割に、ベーデン・パウエル卿の『ローバリング・ツウ・サクセス（以下：RtoS）』を読まずにローバー年代を卒業してしまうことも多いように感じる。

本書は『RtoS』を読んだうえで、現在の日本のスカウティング全般で参考になるよう執筆した日本のローバースカウトのためのハンドブックである。その意味では、スカウティングにおけるローバースカウトの「哲学」的な部分はほぼすべて『RtoS』によるものと思っている。

昭和22年（1947年）のボーイスカウト日本連盟設立以降、ローバースカウトは存在していたが、日本連盟の施策は安定したものではなかった。昭和42年（1967年）に『RtoS』が翻訳され、その翻訳時のメモとして、機関誌『スカウティング』誌に中村知氏による「英国ローバーの研究」が掲載されたことでローバースカウトがイギリスでの発足当初から様々な試行が繰り返されてきたことがうかがえる。

また、平成7年（1995年）は、日本連盟で『ローバースカウトハンドブック』の初版が発行され、その時代のローバリングの「考え方」を一定の形にできたことは、大きな成果だと考えられる。台湾のScouts of Chinaでは、この日本の『ローバースカウトハンドブック』を翻訳し、装丁まで一緒の中国語版を発行している。スカウトライブラリーで見ることができるのでぜひ確認してほしい。

その一方で、ローバースカウト自身による議論が続けられていた。1989年に大島で行われた第2回ローバーシンポジウムにおいて、全国規模のローバー年代のネットワークが必要だ、という結論に達し、平成3年（1991年）には北海道で、平成7年（1995年）には愛知、平成9年（1997年）には兵庫で、平成13年（2001年）には愛知で、平成17年（2005年）には山梨でローバースカウトの全国大会である「ムート」を開催した。

これらの大会開催の原動力となったのは、全国ローバース会議（Rovers National Conference：RNC）の設立と言って過言ではないだろう。これは、平成元年（1989年）に大島で開催されたシンポジウムの参加者から有志で作上げたものであり、その活動を日本連盟が認める形で平成7年（1995年）にローバース会議を設置し、予算をつけて会議旅費を支給し、ローバースカウト運動への追い風となった。

全国ローバース会議は平成16年（2004年）にその任務を終了し、平成17年（2005年）に設立された教育本部ユース特別委員会が、日本のスカウト運動におけるユースの定義について検討している。

当時、東京都三鷹市にあったボーイスカウト会館で行われた平成23年度（2011年）ユースフォーラムでは、参加したローバースカウト諸君の議論の中から、「ローバースカウトの全国的な組織の必要性」が議論された。その議論を踏まえ、当時の日本連盟コミッショナーの英断により、同年10月に「ローバースカウト全国組織設立準備委員会」が設置され、平成24年（2012年）5月にオリンピック記念青少年総合センター（NYC）で行われた平成24年度ボーイスカウト日本連盟全国大会で「全国ローバースカウト会議「Rover scout Council of Japan（以下：RCJ）」の設立総会が行われた。

RCJ設立までもそうだったが、RCJの当初の運営は相当ドタバタしたものであった。当初運営委員の任期は1年間であったが、自団・所属県連盟等での活動など様々な理由から任期後半になると会議を進めることが困難になることが数年続いた。

当時の日本連盟コミッショナーは、RCJ設立準備の様子を確認し、平成24年（2012年）の後半から「ローバースカウト部門あり方検討タスクチーム」を立ち上げた。

平成25年度（2013年）中にこのタスクチームの議論の結果を答申書としてスカウト教育推進会議に提出したが、すでにRCJの運用が始まっていることもあり、深い議論もされず注目を得ることもできなかった。

その後も平成31年度（2019年）までタスクチームは形を変えて議論を続けており、一定の期間を経た成果として、このハンドブックの発行に至っている。実は、すでに平成26年度（2014年）には一度出版に向けた形を整えることができていたが、様々な議論の中で埋もれてしまった経緯がある。

本書の執筆者たちの多くは、それぞれ自分たちのローバーリングを経て集められたメンバーだが、すでにローバースカウトではない。

これらの経緯と執筆者の思いが含まれたこのハンドブックの内容を要約すると

1. ローバースカウト部門のねらいは「ローバースカウトの教育は、自らの有為の生涯を築き、社会に奉仕する精神と体力を養う」ことであることを改めて確認し、スカウト教育法に示された8つの要素をベースにして、ローバースカウト活動の目標を再定義する。
2. ローバースカウト活動の目標は、自らの「活動の目標」であり、ベンチャースカウト部門以下に設けられているような「指導上の目標」ではない。
3. 日本のローバースカウト年代は、社会人としてのスキル「道具を相互作用的に用いる」「異質な人々の集団で相互に関わりあう」「自律的に行動する」の3つを習得すべく、成人指導者とのやり取りや、野外を通じた様々な活動を通じて成長することで、より良き社会人として生涯をすごしていかねばならない。
4. ローバースカウトの活動は、アドバイザーの支援のもと、隊や活動グループでスカウトが自ら定めた自治のルールにより目標を定めて運営、実施される。
5. ローバースカウトの自主性・自律性を担保するものとして、これまでも明文化による自治規則としての「憲章」を各ローバースカウトのグループ（団、地区、県連盟など）ごとに制定することと規程に記載されている。これに加え、そのグループの基本的な「情報」を引き継いでいくため、毎年継続的にローバースカウトのグループによるローバーセミナーを実施する。
6. スカウト個人の興味・関心にそって「ローバーコミュニティ（活動グループ）」を組織し、活動の多様化を進めていく。複数の団・地区・県連盟にわたる活動については、主たる組織が責任を有することとする。
7. 隊やコミュニティには、スカウトからの推薦に基づきアドバイザーを置く。アドバイザーはローバースカウトに対して適切なアドバイスができるよう、英国エディンバラ公国際アワードのアワードリーダーの資格取得や、ウッドバッジ研修所の指定されたコースを受講するなど、研鑽に努めなければならない。
8. ローバースカウトの年齢が18歳以上であることから、ローバースカウトが直面する「就職」や「社会人としての自覚」を促すことに繋がる機会をボーイスカウト組織が提供することは、ローバースカウトにとって有益である。

9. ローバースカウトは「研究」部門として、①自らを見つめ直す研究、②個人として深く物事を探求する研究だけでなく、③仲間と共にチームで研究をすすめることが効率的で効果的である。ローバースカウトを「放置する時代」から、アドバイザーほかボーイスカウト運動全体としてローバースカウトに「関与する時代」へと変化していく必要がある。そのためには、常にローバースカウト部門におけるチーム（自治）のありかたを「研究」することが必要であり、そのローバースカウトに直面するアドバイザーも、ローバースカウトとのコミュニケーション方法を「研究」し続けなければならない。
10. ローバースカウトの多くはビーバースカウトやカブスカウトなど年少部門から加盟して以来、「ボーイスカウト運動のエキス」を身につけてきた。その経験を後輩に伝えていくために、ローバースカウトから日本連盟の諸施策の評価を受けることがもっとも効率的で効果的な形となるはずである。
11. ローバースカウトが全国的な事業を展開する際の手続きが不明瞭であるため、ローバースカウトの発案による事業実行に必要な要件やスケジュールなどの手続き方法を整備し、規格化することが望まれる。
12. ローバースカウトの合同活動では、「主となる」団、地区、県連盟を定め、「活動の責任を誰がとるのか」をしっかりと議論し、安全管理を行う必要がある。
13. ローバースカウトは自団を持たないまま活動すると「レンタル指導者・事業参加者」を増やすだけになり、その後の指導者などの活動を期待できない。根本的な課題は、ローバースカウトに関する各種の連絡未達の問題であるため、ローバースカウトの連絡ルートを確立することで、より多くの機会を提供することができる。
14. ローバースカウトが集う「全国ローバースカウト会議」は日本連盟コミッショナー直轄の組織とすることが期待される。一つの委員会直下の組織とするよりもコミッショナー管轄とした方が、動きやすい対応になるはずである。
15. 日本連盟のブロック制度を活用し、各県連盟のローバースカウトがブロック単位での活動する機会を支援することで、ローバースカウトの活動がより活発になることが求められる。

現在、スカウト教育推進会議のメンバーとして、RCJ議長が青年代表として議論に参加している以上、今のローバースカウトたちが考えていることをきちんとまとめて内外に主張することもできるようになったものの、いつか「大人」がローバースカウトの可能性を奪うこともあり得なくはない。

ローバースカウト年代は、ハンドブックとして在り方を示すことが難しいほど変化の激しい年代であるため、出版されてから数年もすれば状況が変化している部分も多い。本書は20年以上前の初版に続く第2版であり、根本にある想いや考え方など変わらない部分は踏襲したものの「未成品」であると思う。必要な資料の追加や改訂については数年おきにはローバースカウトの手で検討を重ねてほしい。

目の前にある扉を開くのはローバースカウトであり、その大きな可能性を信じて！

2020年9月

日本連盟プログラム委員会

# 目次

はじめに

1. どのように始まったのか（ローバー活動の歴史）	1
（1）ローバーリング・ツウ・サクセス	1
（2）英国から世界への広まり	2
（3）日本における動き	3
（4）ローバースカウト自身による新しい流れの構築	3
（5）直近のローバースカウト部門の見直しに関する取り組み	5
2. ローバースカウト活動の現状と、社会から求められているもの	8
ローバースカウト年代を取り巻く社会的現状	8
社会から必要とされる人材へ	14
OECDにおける「キー・コンピテンシー」	14
社会人基礎力	16
社会人として新卒採用を行う各企業の意識	18
ローバースカウト年代を取り巻く社会的状況と求められる能力	20
ローバースカウト活動の実状	21
（1）ローバー隊の種別	21
①地域ローバー隊	21
②大学ローバー隊	21
③職域ローバー隊	21
（2）都市と地方におけるローバー隊	22
（3）全国ローバースカウト会議（RCJ）	23
（4）実際の活動事例	23
①ブロック単位の活動の運営	23
②全国事業・県連事業の運営	24
③県連盟ローバー組織の運営	25
3. ローバースカウト部門とは？	26
ローバースカウト部門とは何でしょう？	26
4. なぜ、ローバースカウト活動をするのでしょうか	28
ローバースカウト教育（目的）	29
ローバースカウト活動における「スカウト教育法」の適用	29
5. ローバースカウト活動を仲間と共に行うことの重要性	32
ローバースカウト部門のチーム・システムの特徴	33
ローバースカウト部門のチーム・システムの要素	34
ローバースカウトのコミュニティ	34
ローバースカウトのコミュニティにおける集会	36
ローバースカウト会議（ローバース会議）	36
ローバースカウト・チームのリーダー	37
ローバースカウト・コミュニティのアドバイザー	37



6. ローバースカウト部門におけるシンボルの活用	38
シンボルとしてのローバリングは青年の期待とニーズを満たす	38
自分のアイデンティティを見つけ出し、自立していく	38
世界を知る	38
役に立つと認められ、社会に貢献する	39
人生の旅路における良い航路を選択する	39
ローバースカウトのシンボルの活用は健全で、真実で、未来を指向するものです	39
自分のカヌーは自分で漕げ	40
7. ローバースカウトと高度な野外活動	41
自然と環境、スカウト教育法	42
環境教育と教育的目的	43
8. ローバースカウト教育の目的と、個人の成長	45
個人の成長	45
個人の成長における3つのステージ	45
個人の持つ課題、個人の活動計画、個人のタイムライン	46
9. ローバースカウトを支援する成人	50
ローバースカウトと成人の支援	51
アドバイザー ～チーム支援とローバースカウトのコミュニティのファシリテート～	51
メンター ～個々のローバースカウトを支援する～	52
対等な協力関係	52
ローバースカウト・アドバイザーとローバースカウト・メンターに対する責任	54
ローバースカウトのアドバイザーまたはメンターになる人の要件	56
プログラムとトレーニング開発者との密接な関係	58
ローバースカウト？ それともリーダー？	59
ローバースカウトにもたらず、成人の支援とは	61
10. ローバースカウト部門の活動	62
活動の4つの分野	62
推奨プログラム	64
11. 制服と記章類	68
ローバースカウトの服装	68
ローバースカウトの記章	69

## 1. どのように始まったのか（ローバー活動の歴史）

「ローバースカウトの活動が何か」を指し示す前に、ローバー活動の歴史を振り返ってみたい。

### (1) ローバーリング・ツウ・サクセス

ボーイスカウト運動の創始者であるベーデン・パウエル卿は1922年に『ローバーリング・ツウ・サクセス』を出版し、これは「若者が男らしさを身につける手引」としてスカウト運動に参加している年長の少年たちや、若い指導者に青年としての生き方、将来進むべき方向を示した。

1907年にブラウンシー島での実験キャンプから始まったボーイスカウト運動は、いわゆるボーイ、つまり少年のための活動であった。当時はまだ、今日ほど社会的成熟度が低年齢層に及んでいる時代ではなかったにしろ、少年という一般的な用語は16～17歳までであり、それ以上の年齢の者は職についたり、家を離れたりして、親元を出て独立していく年齢層であった。

スカウト活動に参加して、その教育を受けた青年たちが、社会に出ようとしているときに、どのように行動したらよいのかを示すことは、ボーイスカウト運動にとって見過ごすことのできない責任であった。とくに、社会に出れば甘えや無責任さは許されない。そのための備えとしては、自分を強くきたえておくこと、人の意見に流されて自分の考えを捨てないこと、社会には様々な誘惑があるからそれに陥らないこと、そして何よりも、良き伴侶を得ることが当時の社会では理想的な人生の道筋であったといえる。

創始者は青年たちに対して、実社会で起こる様々な困難を「大海原」に例え、その中を自分の力だけで乗りきっていく雄々しい姿を「自分のカヌーは自分で漕げ」と励ましたのである。そして、経験者である年輩者の立場から予想される困難を知らせ、直面したときに、全力をあげてどのように乗り切っていくかを教えたのである。

理論家、独創的な思想家というより、体験的、実践主義的な理想家として人生を築き上げてきた創始者は、多くの本を読み、自分の体験や実践から得た信念をもって、青年たちに自ら挑戦し行動することを呼びかけている。世界のあらゆる地域に出かけ、広い視野と自然や人間の生き方を自分の目で見て、崇高な目的を体得し、公平な考えを持って人生に立ち向かうことを奨めている。当時にあっては、広い世界へ出かける人たちは、冒険家であり、開拓者であり、探検家であり、船乗りであり、貿易商人であった。これらの人たちへの憧れや彼らの体験を通して築かれてきた知識や技能をもとに、青年たちに高い理想と強い体、高潔な人格を築くように励まし、その手段として様々な活動を提示したのであった。

『ローバーリング・ツウ・サクセス』は、「成功への遍歴」と日本語訳されている。真の成功とは、幸福であると創始者は語っているが、これは決して創始者が本に書いてあることだけをすれば、幸福になるといっているのではない。創始者はローバーリング（Rovering）とは「目的もなくさまよう」ことではないと明言しているが、この年代の青少年はその行動が「さまよえる人」のように見えながら、その基本となる考え方が性格を築きあげることに、幸福への道を歩めるといっている。「このさまよえる人の活動（Rovering）」は遍歴（広く諸国をめぐる回ること）を通して「青年としての生き方」を築きあげることであり、あくまでも活動が重要なのである。「成功への」は目的ではなく、活動した結果ついてくるものである。成功を目的と考えると、自由な活動に規制がかかり、独創性や積極性を育むことが制限される。成功を活動の結果ついてくるものと考えれば、その活動は明るく愉快で充実したものとなる。

「行動することによって学ぶ」という信念のもとに、青年の時代にはどのようにしたらよいか、評価をどのようにしたらよいかなど「青年に人生の幸せを与える」この書から創始者の意図を汲むことができよう。われわれのローバーリングも、このことを基本に据えて取り組まねばならない。

## (2) 英国から世界への広まり

イギリスでローバーリングが展開はされていったものの、それは運動内の期待に反して、組織的にもプログラム面においてもボーイ部門やカブ部門のような大きな着実な進歩を印すことができなかった。このことは一つに、少年と青年との間の大きな変化にボーイスカウトのプログラムが適応できなかったからといえる。

このためローバー部門が確立されないままに、ボーイ部門とローバー部門の間にあたるシニア部門が先に発表され、生まれていった。ベーデン・パウエル卿（以下：B-P）はこの構想には賛成ではなかった。少年が成長をしたからといって、単なるボーイ部門の延長での教育方式では年長の少年や青年期に達した若者を訓練することは、ボーイスカウト、シニアスカウト両部門にとって良い結果をもたらさないと考えたからだ。これではボーイ部門が弱体化すると共に、シニア部門はボーイ部門で育ちきった少年の成長の芽をかえって摘んでしまうことを恐れたのであった。このようなことから、B-P生存中には構想はあったものの、世間に公表されずに、このシニアスカウト方式はB-Pの死後、第2次世界大戦終結後の1950年代に公式に発表されたのであった。

イギリスで発表された方式は当然のことながら、世界中のボーイスカウト活動を行っていた国々の関心と呼び、各国でも様々な対応がなされていった。この部門の対象となる15歳以上の少年の環境が大きく変化し、高等教育への要求も高まっていく中で、この方式はボーイスカウト運動にその年代の少年を留めておきたいという願いに発するものではあったが、少年たちを引き付けるに足る十分なインパクトに欠け、また指導者として適任者を得ることも難しく、いずれの国にも十分な発展をみることはなかった。各国にはローバースカウトを残すか、シニアスカウトをその方向に変えていくのかの選択を迫られることになった。

このような中で世界のローバーの大会であるローバームートが開かれ、討論と野外活動を通じて交流と親睦をはかり、ボーイスカウト活動に参加した者たちの親交を深める機会を求めていった。1950年代から開かれていたローバームートの記録を見ると、1931年にスイスのカンデルステッヒ（現在はカンダージュテークと表記）で20か国から3,300人が参加して開かれて以来、第2次世界大戦中を除き4年ごとに開かれていたが、1961年に第7回がオーストラリアのメルボルンで15か国、1,000人弱の参加者で開かれた後は、4年ごとに「ローバームート」年を設定して、地域的な行事として開かれるようになった。この「ローバームート」年の事業は多くの地域でのローバームート参加を可能にしたが、ローバースカウト部門を持つ国が少なくなってきたことから、地域行事は難しくなったが、1990年に第8回世界ムートがオーストラリアのメルボルンで開かれるというように世界的な大会に復活した。以後回数を重ね、2013年にカナダで第14回世界スカウトムート、2017年にはアイスランドで第15回世界スカウトムートが開催され、2021年には第16回世界スカウトムートの開催がアイスランドで予定されている。

世界ローバームートといわれる大会とは別に各国でもローバームートは開かれていた。青年たちが集い、話しあい奉仕活動を行っていたが、それは親睦が主な目的であって人と人との交流によって広い世界を知ること、人間性を豊かにするもので、決して訓練というものではなかった。

世界的に見て、ローバー部門はシニア部門との関係、成人指導者との関係などその成長をどのように援助していくか結論がえられずに今日に至ったといえる。その結果として、シニア部門をベンチャー部門に、ローバー部門を廃止するか、成人部門の青年部のような位置づけをしてきたといえる。



### (3) 日本における動き

日本のローバースカウト活動は『ローバーリング・ツウ・サクセス』を通して始まっていた。青年の年齢に達したスカウト経験者がこの本を読み、「青年教範」として人生のガイドラインを学び、自己研鑽と集合訓練を行っていった。それは、組織化されたものというより、散在する個人的な活動といったようなものであった。

これが実質的な活動となっていたのは、1960年代に入ってローバーリング・ツウ・サクセスが新訳され、中村知氏によるイギリスのローバースカウト活動の紹介が『スカウティング』誌にシリーズで掲載されたことによる。また、この頃から日本の団制度も確立し、スカウト経験者がローバースカウト年代に達したという背景もあったといえよう。

また当時の日本のボーイスカウト運動は、戦後のアメリカの影響から脱する時期であり、原点を求める欲求からイギリスのボーイスカウト運動の研究が盛んになり、バック・ツウ・ギルウェルのかけ声と唱和するようにイギリス方式の活動が広まっていった。ローバースカウト活動についても、『ローバーリング・ツウ・サクセス』以外に活動の手引となるものがなかったので、イギリスでのローバースカウト活動は多くの示唆を与える素晴らしい人間教育の進め方として研究が進められ浸透していった。イギリスの社会と日本の社会の相違はあるものの、当時はまだ社会のニーズ、とくに青少年教育内におけるニーズに大きな相違は見られなかったことから、日本のスカウト運動はひたすら、イギリスのローバースカウト研究から多くのことを学びとり、今後の進むべき指針として受け入れていった。

同時に、日本のスカウト運動の中にイギリスで行われている方式が定義され、開発の努力も行われていた。イギリスの騎士道に対する武士道、キリスト教の生き方に対する修験道を提案することも行われた。キャンプや自然を教場とするボーイスカウト教育のあり方から、野外活動を通じた人間形成を中心に置いてローバースカウト教育のあり方が求められた。

「青年の道は青年に見い出させよ」「青年の抱負を青年に聞こう」ということも、ローバースカウトやローバースカウトの集会を通して行われてきた。

1970年代に入って、世界の流れから10年近く遅れてはいるが、ローバースカウト部門のあり方が進歩委員会において本格的に研究、調査、検討が進められ出した。1970年代においては、シニア（現在のベンチャー）・ローバー委員会が特別委員会として設置され、「ローバースカウトは成人の部門として位置づけられるべきものであり、青年スカウトとしての教育プログラムは考えられない」という将来の方向性を示した。しかし、これに対する反対の意見が、特に日本の教育制度のもとでは大学卒業までは親の経済的保護下にあり、社会的にも一人前とは認められないので、自己研鑽へのプログラムを提示すべきであるとの立場から、進歩制度により明確な記章等を設置する案が出されたりした。とくに、ローバースカウト部門が大学のサークル活動の一環として大学ローバースカウトを認めたことから、この意見に共鳴する者も多く見られた。

1980年前半の進歩委員会は、ローバースカウト部門におけるプログラムを明示する必要性は認めながら、ローバースカウト本来の自己修養は他人に認められることではなく、社会的な成長へのステップとして社会に認められることを考えるべきとのことから、運動内で記章取得をめざすことは考えないことを確認した。そしてただひたすら進歩の促進をはかるという片寄った傾向が生まれないうためにも、ローバースカウト進歩記章あるいはアワードは認めない方向を再確認し、あわせてローバースカウト活動が野外活動と奉仕を目的とすることを具体的に提示できるために、個人または隊の活動例を示すことにした。

言い換えれば、現行のローバー規程に定められた大枠の中で、活発なローバー活動が展開できるよう細かな規程を設けず、活動の手引きを示すことにしたのである。

### (4) ローバースカウト自身による新しい流れの構築

その一方で、ローバースカウト自身による議論が続けられていた。1989年に大島（東京都大島町）で行われた第2回ローバーシンポジウムにおいて「全国規模のローバー年代のネットワークが必要だ」という結論に達し、ここから日々「ネットワーク作り」という活動が始まった。つまり、ローバーといっても登録はしているが、何をしたらいいのか分からない

い、というローバーが非常にたくさんおり、それは情報が無いからできないのだ、何をしてもいいのかわからないのだ、という考え方から、情報を伝えるネットワークを構築しようとする取り組みにつながった。

そのネットワークを作ろうとするベクトルは、1991年に日本連盟山中野営場（2017年8月閉場）で行われたローバームート、1993年に北海道で行われたローバームート、1995年に愛知で行われたコ・ムート、1997年に兵庫で行われたローバームート、これらの大会の目的の中にネットワークを構築するという意図も含めて大会が継続されることとなった。

イベント実施という形でのムーブメントの中で、大きな転機が起こった。それは、1993年に日本連盟が全国ローバース会議を設置したことである。ローバース会議以前には、ローバースカウト全国代表者会議（通称RNC）というものがあり、1989年の大島で開催されたシンポジウムの参加者の中から有志で作った団体であった。これは全くの有志だけで日本全国、北海道から九州までをカバーし、スカウトの自腹でミーティングを開催して情報交換をする組織だったものが、後に日本連盟より予算が付けられ交通費を出すという形で、ローバース会議ができた。このことは、ローバーのムーブメントにとって一つの追い風になった。

日本連盟は、1993年の世界スカウト会議で採択された「意思決定への青少年加盟員の参画に関する方針」を実現すべく、全国のローバースカウト年代の代表という理由で、ローバース会議の議長を中央審議会（現在のスカウト教育推進会議にあたるような会議体）の議員に選出した。それ以降も1997年にはプログラム委員会にローバースカウトが2人、野営・行事委員会には1人のローバースカウトが一員となる、当時においては画期的な取り組みが続々となされた。

中央審議会にローバースカウトを議員として迎え入れたのは、1993年、バンコクで行われた世界スカウト会議において、「意思決定への青少年加盟員の参画に関する方針」（決議 2/93号）を採択したことによるものである。この決議では、スカウト運動の目的を達成するという観点から、青少年加盟員を意思決定に参画させるように促した。当時、ローバース会議というものを設けた理由も、この決議によるものなのかもしれない。

しかしながらその一方で議員や委員として受け入れられてはいるものの、まだまだ中身が伴っていない状況であった。県や地区でのローバーコミュニティができたり消えたり、全くないところには全くないという状況で、ローバース会議が全国をすべてカバーして情報を流したり吸い上げたりすることができる状況にはまだほど遠い状況であった。例えば、ローバース会議であるとかローバームートの実行委員会であるとか、こういった場に来るアクティブな活動をするローバースカウトたちは決して秀でたエリートという訳ではなかった。どちらかという、個性的な癖のある、アクの強いローバースカウトが多かったのである。

「ローバームートにおいてネットワーク作りを」という動きがそろそろ薄らいできた頃に、もっと違う方向性を考えよう、という話し合いがローバースカウトの間に出てきた。例えば、国際貢献や、日本の社会に何か働きかけ、貢献をしたらどうかといったものである。1995年のコ・ムートでは骨髄バンクのことを取り上げ、実際に骨髄を移植してもらったローバーから参加者へ説明をしたり、1997年のローバームートでは選択プログラムの中に、神戸の仮設住宅を訪問するツアーが組まれたり、それからジャンボリー等ではおなじみの“地球開発村”をローバームートで行ったりもした。この動きが派生し、バングラデシュ派遣、CJKプロジェクト、ウガンダ派遣などが行われている。

ローバース会議の設立と、1997年に開催されたローバームートを契機に、各地で県連盟・地区レベルでのローバーコミュニティが生まれた。その形は有形・無形それぞれあり、有形のコミュニティでこの当時から現在までも続いているものは、1997年6月に設立された愛知ローバース会議である。無形の例でいえば、ローバームートの同窓会的要素の「懇親会」のようなものである。これらは傾向として、ローバース会議メンバーの出身県連盟や都市部に集中して作られていた。具体的には、札幌、東京、愛知、奈良、京都、兵庫、福岡などである。こういった形で都市部の人口が集中している所に、ローバーのコミュニティができた。逆に、都市部以外では、進学や就職のために、ローバースカウト年代の人たちは都

市部へ流出してしまうため、団にローバーがいないとか、登録はしていても都市部にいて戻ってはこられない、といった状況であった。

このように、ローバース会議やローバースムートが色々な場面でローバースカウト部門のプログラムに刺激を与えてきた。しかしながら、2002年を契機に、ローバース会議の意義が継承できずに存続についての是非が問われた。

## (5) 直近のローバースカウト部門の見直しに関する取り組み

2005年、日本連盟はローバース会議の答申に基づき、教育本部にユース特別委員会を設置した。この委員会では青少年の適切な意思決定への参画の向上を目的とした特別委員会で、2007年度までの任期で設置された。主な成果としては「日本のスカウト運動におけるユースとは、すなわち若い成人、18歳から25歳までの加盟員男女」として定義した。これはのちに、ローバースカウトの年齢を教育規程において、ベンチャースカウトのプログラムを20歳未満から18歳（に達する日以後の最初の3月31日）までとしたことにつながる。

また2007年には、教育規程の「重複登録」について、従来は大学ローバースカウト隊や地区ローバースカウト隊のみであったものに「進学や就職などによる住居の移転先地域にある団のローバースカウト隊」を追加させた。これにより、東京連盟は「スカウト里親制度」を実現させ、現在も運用が続いており、進学により上京したローバースカウトが、東京においても活躍できる足がかりができた。

2011年、平成23年度ユースフォーラムにおいて、同年2月にブラジルで開催された世界ユースフォーラム内でも重要とされた青年参画、およびローバースカウト活動の活性化に向けた具体的なアクションプランが示され、ローバースカウト全国組織設立準備委員会が設けられた。この委員会によって、2012年に東京で開催された全国大会のプログラムにおいて、全国ローバースカウト会議（Rover Scout Council of Japan 略称：RCJ）設立総会が行われた。RCJは会議体で運営され、毎年5月の日本連盟全国大会に合わせて総会を開催する。年1回の総会だけでは具体的な検討が進まないため、総会において運営委員が選出され、運営委員で構成される運営委員会では、日本連盟からの旅費支給や支援を受けながらローバースカウトへの情報提供や活動活性化を奨励する活動、日本連盟への提言や事業参画を行っている。

そして、2013年に開催された平成25年度ユースフォーラムでは、RCJ運営委員会を通じた活動の広報／周知／蓄積を目的としたデータベースの提案や、様々な活動の形態についての分析が行われた。また、2015年に開催されたフォーラムは、名称を「RCJフォーラム」と改め、参加者が期間中に採択文を作成・共有して持ち帰るフォーラムではなく「参加者自身が現状を振り返り、今後の人生について考え実行に移していこう」という新しいフォーラムの在り方を提示した。

このRCJフォーラム2015からニーズが出された「ローバースカウトの全国大会」が、翌年の「RCJクエスト2016 in 高萩」の開催へとつながっていくのである。RCJクエストでは、日本連盟が茨城県高萩市に新設する野営場を開拓するプログラムを中心に行われ、様々な環境で活動するローバースカウトが北海道から沖縄まで約120人集い、プログラムを繰り広げた。

今後、フォーラムと全国大会が交互に隔年開催されることをRCJでは望んでおり、ローバースカウトの活動の幅が広がる機会として、自主性にあふれたものになっていくことが期待される。

## <ローバー部門の歴史>

1954年	日本連盟において現在のローバー部門にあたる「青年隊」がスタート
1956年	第1回日本ジャンボリーが長野県軽井沢で開催
1958年	団制度を開始 ローバースカウトキャンプを実施
1960年	第1回ローバームートが那須日光で開催
1961年	第2回青年スカウト合同野営
1963年	第3回青年スカウト合同野営
1964年	第4回青年スカウト合同野営
1965年	第5回青年スカウト合同野営
1967年	第6回青年スカウト合同野営
1968年	第7回青年スカウト合同野営
1969年	第8回ローバームート
1970年	東京都三鷹市にボーイスカウト会館を設立
1971年	第13回世界ジャンボリーが静岡県朝霧高原にて開催 第23回世界スカウト会議が東京プリンスホテルにて開催
1972年	沖縄返還（沖縄のスカウト運動、日本連盟に正式移行） 日本連盟結成50周年記念事業 第9回ローバームート
1973年	第1回日本アグーナリー（国際障がいスカウトキャンプ大会）が開催
1984年	第1回シニアスカウト大会が開催
1985年	日本連盟において「ローバースカウト活動の進め方」として中間答申が出されたが1つの形として認められるには至らなかった
1988年	「おきて」が12か条から8か条へ改正
1989年	第2回ローバーシンポジウムが東京都大島で開催 → <b>ローバースカウト全国代表者会議が発足</b>
1990年	10月、日本連盟進歩委員会のシニア・ローバー委員会の答申でローバー部門への進歩制度（アワード）の導入を検討
1991年	3月、日本連盟進歩委員会から中央審議会への答申にて、ローバー部門への進歩制度は、成人域に達するため教育を受ける部門とは違い進歩制度は不要との結論
1991年	<b>ローバームート'91</b> が日本連盟 山中野営場にて開催
1993年	<b>ローバームート'93</b> が北海道国営滝野すずらん丘陵公園内青少年山の家にて開催
1994年	日本連盟プログラム委員会のもとに、ローバース会議が設立
1995年	全部門に女子の加入を認める <b>日本K0-MOOT '95</b> が愛知連盟 新城吉川野営場にて開催 日本連盟よりローバースカウトハンドブック初版が発行
1997年	<b>ローバームート'97</b> が兵庫県兎和野高原にて開催
1998年	日本連盟でローバー部門における国際貢献活動の一環としてアジア太平洋地域提携プロジェクト「バングラデシュ派遣」がスタート （1995年より事前調査派遣を実施）
1999年	シニア部門からベンチャー部門へプログラム完全移行
2001年	<b>ローバームート2001</b> が愛知連盟 新城吉川野営場にて開催
2005年	<b>スカウトムート2005</b> が日本連盟 山中野営場にて開催 当時の「スカウト運動推進委員会」からの提言を受けて、ユース特別委員会、プログラム委員会においてローバー部門について検討（約6年間にわたり協議）
2007年	世界スカウト運動創始100周年、イギリスで第21回世界スカウトジャンボリーが開催
2010年	ボーイスカウト日本連盟が財団法人から公益財団法人へ移行 CSV（APR Committee NSO Visit）において「ローバー部門は奉仕のみにならず、5つの開発側面（身体、社会、感情、精神、宗教）を満たすため、その目的

	を明確化するローバープログラムは、例えば、B P 章といった進歩計画を含むべきである」との提言を受ける
2011年	ボーイスカウト会館が東京都文京区へ移転 プログラム委員会により「R S 年代の全国組織 設立準備委員会（委員 9 人。プログラム委員、県連盟コミッショナー代表のほか、R S 年代委員として平成 2 2 年度ユースフォーラムの正副議長及び実行委員からの選抜委員で構成）」が設置され、具体的な協議と検証作業を行い、過去 7 年間にわたる協議の集大成として「ローバー年代における全国組織設立のための基本実施要項」を定め、機関承認
2012年	5 月、日本連盟に <b>全国ローバースカウト会議(RCJ)</b> が発足
2013年	1 2 月、日本連盟で <b>ローバー部門に国際ユースアワードの導入を開始</b>
2014年	R C J における県代表の機能を活性化すべく、S N S（サイボウズ）の導入を開始
2015年	第 2 3 回世界スカウトジャンボリーが日本（山口県）で開催 <b>R C J フォーラム2015</b> を静岡県富士宮市にて開催 → 参加者が期間中に採択文を作成・共有して持ち帰るフォーラムではなく「参加者自身が現状を振り返り、今後の人生について考え実行に移していこう」という新しいフォーラムの在り方を提示 → 再び、ローバーの全国大会の開催ニーズが生まれる 長中期計画検討タスクチームにて、ローバースカウト部門を「研究部門」と定義 → スカウト運動を経験した「青年」として、自らの活動を研究・展開するとともに「運動への奉仕」として後輩たちの指導・育成の手法を研究する部門
2016年	<b>R C J Quest2016 in 高萩</b> を茨城県高萩市にて開催 → 2 0 0 5 年のスカウトムート開催以来、1 1 年ぶりのローバースカウトの全国規模の野営大会が開催される
2017年	<b>R C J フォーラム2017</b> を大阪府貝塚市にて開催
2018年	<b>R C J Re:Quest2018 in 高萩</b> を茨城県高萩市にて開催
2019年	R C J フォーラム2019を大阪府貝塚市にて開催予定も、大型台風接近のため中止
2020年	<b>R C J フォーラム2020</b> をオンラインにて開催 → 前年度の大型台風接近による中止を受け改めて開催を計画するも新型コロナウイルス感染拡大防止措置として対面での開催から変更
2021年	R C J 野営大会2021（仮称）を開催予定



## 2. ローバースカウト活動の現状と、社会から求められているもの

ここでは、ローバースカウト活動の必要性について、ローバースカウト年代の社会的現状とローバースカウト活動の実状から検討します。

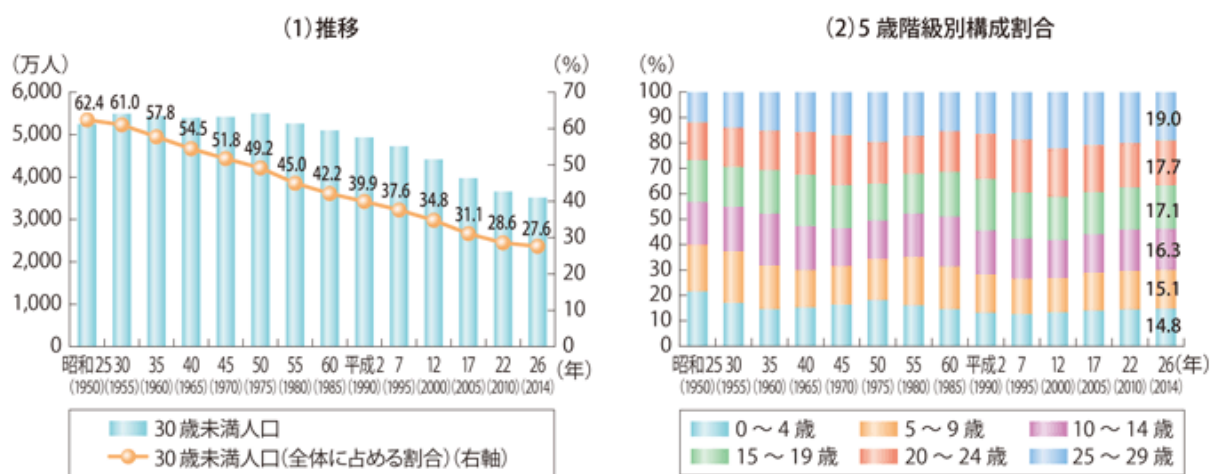
### ローバースカウト年代を取り巻く社会的現状

18歳から25歳までのローバースカウト年代を含めた30歳未満に関しては、内閣府による『子供・若者白書』により毎年、統計調査が行われています<sup>1</sup>。ここでは、主に『子供・若者白書』を中心に、ローバースカウト年代の全国的な傾向を確認します。

### 人口から見たローバースカウト年代

『子供・若者白書』によると、30歳未満の人口は、昭和50（1975）年以降、ほぼ一貫して減少しています。総人口に占める割合も、昭和49（1974）年に初めて50%を下回り、その後も低下を続けています。なお、昭和50（1975）年生まれば第2次ベビーブーマーであり、現在45歳前後の年齢となっています。

第1-1-1図 30歳未満人口



(出典) 総務省「国勢調査」「人口推計（各年10月1日現在）」  
(注) 昭和45年以前の数値には沖縄県は含まれない。

図1 30歳未満人口の推移（子供・若者白書（平成27年版））

また、国勢調査による総人口とローバースカウト年代人口（18歳～25歳）を比較すると、国内総人口が増えているにもかかわらず30歳未満人口は減っているため、ローバースカウト年代人口は平成7年度をピークに減少していることがわかります。

<sup>1</sup> 内閣府「子供・若者白書」について

<https://www8.cao.go.jp/youth/suisin/hakusho.html>

『子供・若者白書』は、子ども・若者育成支援推進法（平成21年法律71号）第6条の規定に基づき毎年国会に提出することとされている年次報告書で、昭和31年から作成している青少年白書と通算して作成されている。

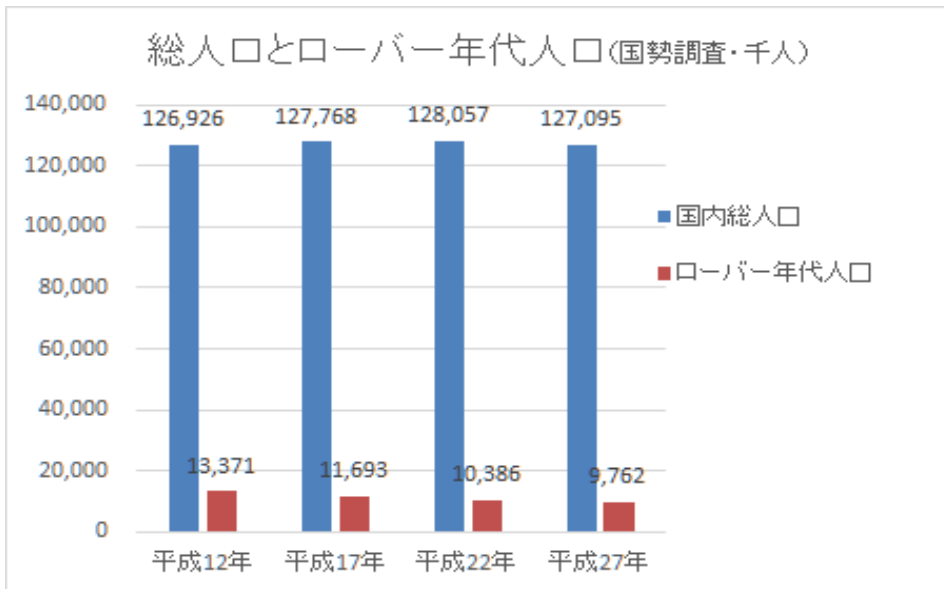


図 2 総人口とローバー年代人口の比較 (国勢調査より)

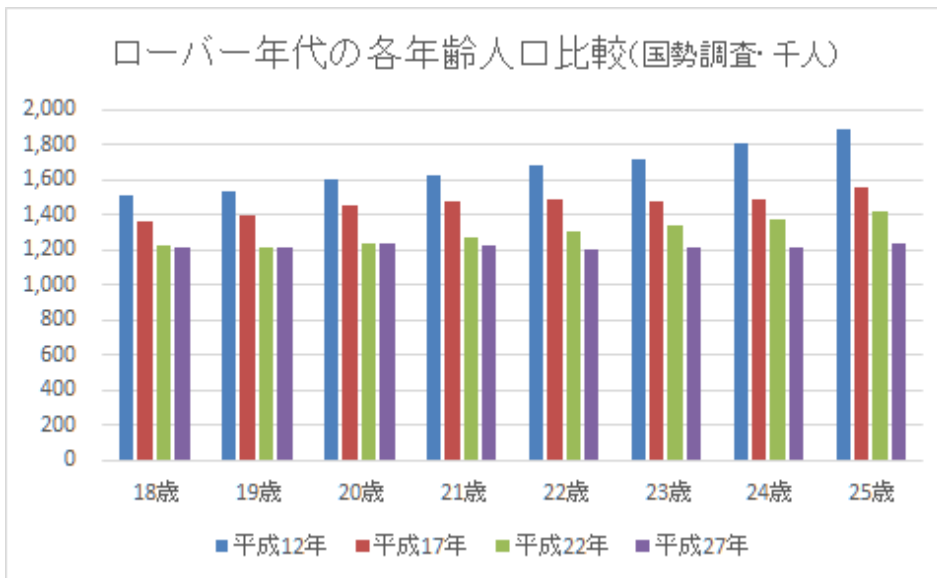
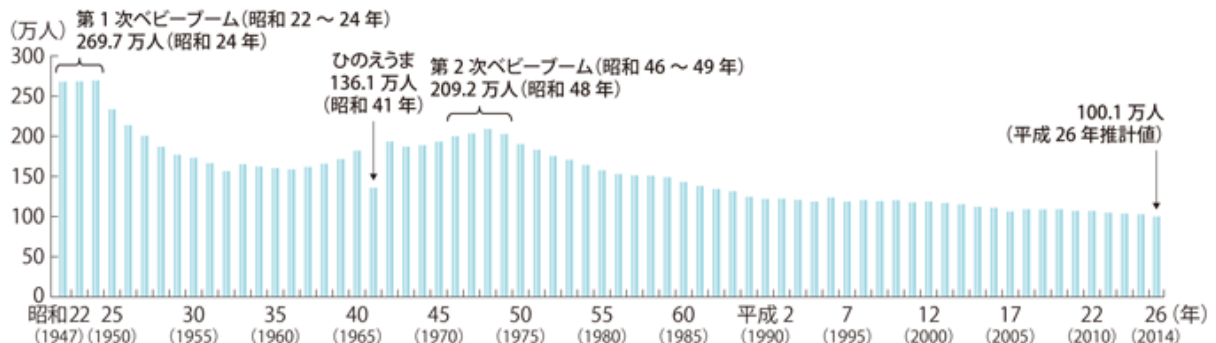


図 3 ローバースカウト年代の各年齢人口比較 (国勢調査より)

第1-1-4図 出生数



(出典) 厚生労働省「人口動態統計」

(注) 1. 昭和47年以前の数値には沖縄県は含まれない。  
2. 平成25年までは確定数、平成26年は推計数。

図 4 出生数(子供・若者白書(平成27年版))

30歳未満人口がピークとなったのが昭和50(1975)年で、この年に生まれた子供は平成7(1995)年に25歳を迎えて、ローバースカウト年代の人口増加のピークとな

っている。これらの統計を見ると、ローバースカウト年代の人口は今後も減り続けることが明確である<sup>2</sup>。

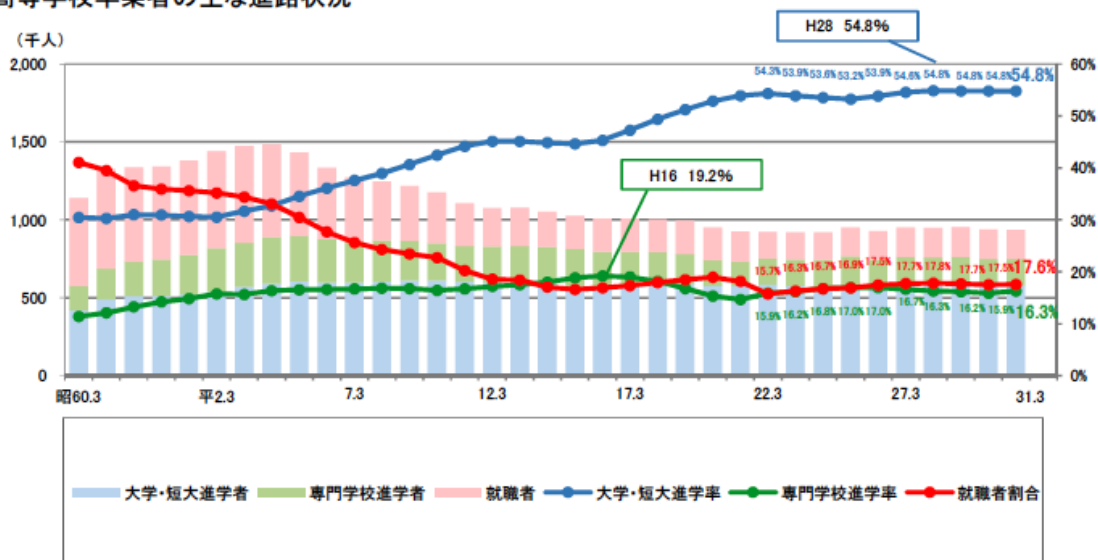
## 学校教育におけるローバースカウト年代の立場

令和元（2019）年12月25日に公表された令和元年度学校基本調査<sup>3</sup>によると、全日制・定時制の高等学校卒業生（中等教育学校後期課程を含む）については、大学・短期大学進学率（過年度卒を含む）は前年度と同率で54.8%（うち、大学（学部）50.0%）、専門学校進学率は16.3%（前年度より0.4ポイント上昇）となっています。卒業生に占める就職者の割合は前年度より0.1ポイント上昇し17.6%（うち、正規の職員等17.5%）です。

高等教育機関への進学率（過年度卒を含む）は82.8%（前年度より1.3ポイント上昇）で過去最高となっています。

その中でも、大学・短期大学進学率（過年度を含む）は58.1%（前年度より0.2ポイント上昇）で過去最高、大学（学部）進学率（過年度卒を含む）は53.7%（前年度より0.4ポイント上昇）で過去最高となっています。

図2 高等学校卒業生の主な進路状況



(注) 1 図中の枠囲いは、最高値である。(以下、同じ)  
2 就職者割合の最高値は、昭和36年3月の64.0%。

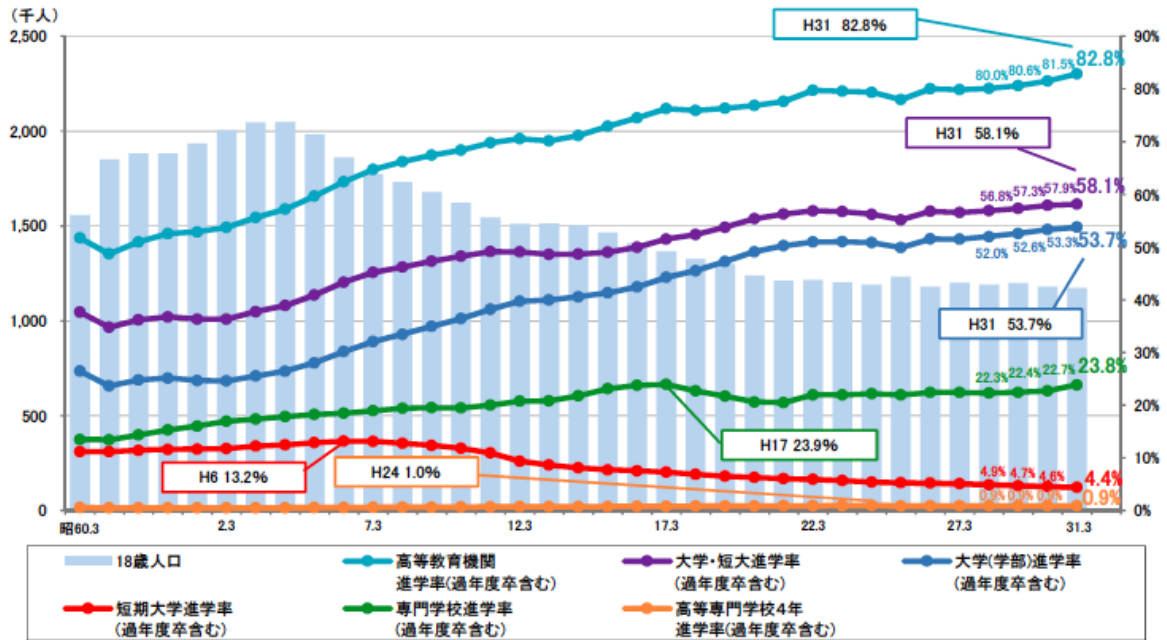
図 5 高等学校卒業後の状況（令和元年度学校基本調査（確定値）の公表について）<sup>4</sup>

<sup>2</sup> 当然のことながら、同じ理由で、ベンチャースカウト年代、ボーイスカウト年代、カブスカウト年代、ビバースカウト年代の人口も減り続ける。出生数の減少が止まったとしても、その世代がビバースカウトになるのは7年後となる。

<sup>3</sup> 文部科学省「令和元年度学校基本調査（確定値）の公表について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt\\_chousa01-000003400\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_1.pdf)

<sup>4</sup> 引用元データに「「就職者」には大学・短大、専門学校等に進学した者のうち就職している者を含む。」という注記がある。

図3 高等教育機関への進学率(過年度卒を含む)

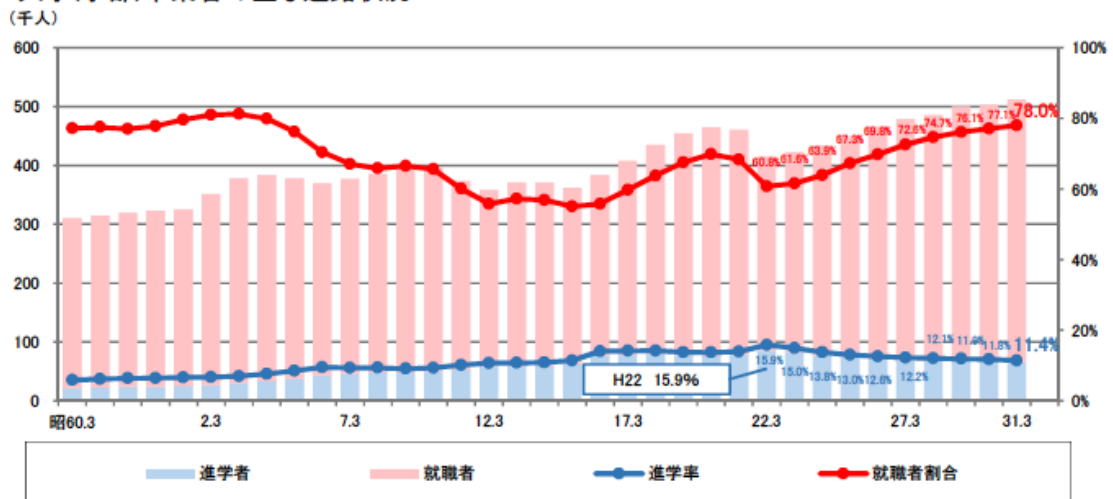


- (注) 1 高等教育機関進学率(過年度卒を含む) =  $\frac{\text{大学・短期大学入学者, 高等専門学校4年在学者及び専門学校入学者}}{\text{18歳人口(3年前の中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者)}}$
- 2 大学(学部)進学率(過年度卒を含む) =  $\frac{\text{大学(学部)の入学者}}{\text{18歳人口(3年前の中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者)}}$

図 6 高等教育機関への進学率(過年度卒を含む)(令和元年度学校基本調査(確定値)の公表について)

大学(学部)卒業生について、大学院等への進学率は平成22年度をピークに9年連続低下し11.4%(前年度より0.4ポイント低下)。就職率は、平成22年度に急激に低下したが、その後9年連続で上昇し、78.0%(前年度より0.9ポイント上昇)。このうち正規の職員等は75.3%(前年度より1.2ポイント上昇)。一時的な仕事に就いたものの割合は前年度より低下し1.4%(前年度より0.1ポイント低下)。

図4 大学(学部)卒業生の主な進路状況



(注) 就職者割合の最高値は、昭和37年3月の86.6%。

図 7 大学(学部)卒業生の主な進路状況(令和元年度学校基本調査(確定値)の公表について)

## 学生から社会人へ

平成23（2011）年の離職率<sup>5</sup>（事業所規模5人以上の事業所）は、19歳以下が37.7%、20～24歳が25.2%、25～29歳が18.9%となっています。過去5年では緩やかな低下傾向にありますが、労働者の全体の離職率を常に上回っており、若年層ほど離職率は高くなっています。

新規学卒就職者の就職後3年以内の離職率は、平成21（2009）年3月卒業者で、中学校卒業者が64.2%、高校卒業者が35.7%、大学卒業者<sup>6</sup>が28.8%となっている。

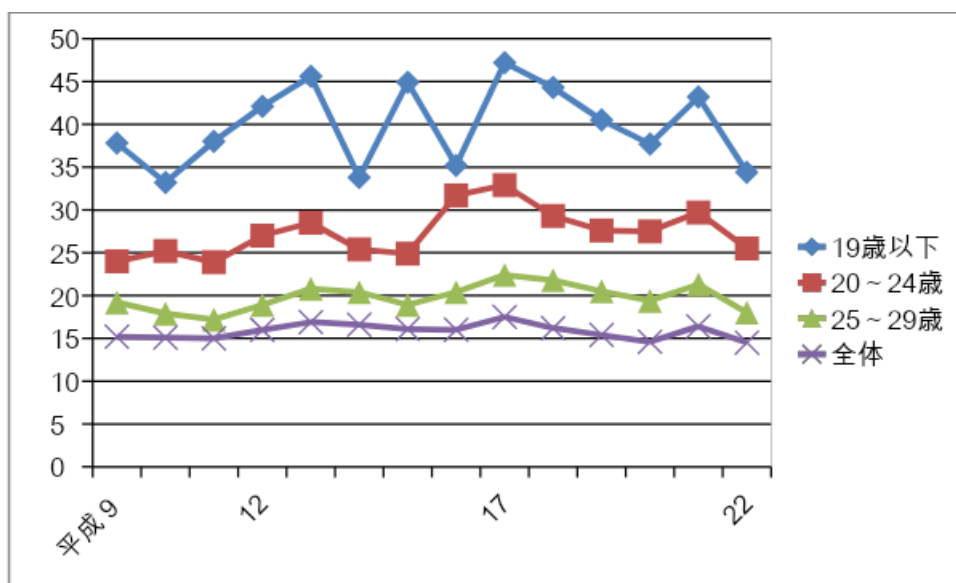


図8 年代別3年以内離職率（厚生労働省雇用動向調査）

平成30（2018）年1年間の入職率と離職率を年齢階級別にみると、男女ともに19歳以下が最も高く、男で20～24歳から45～49歳まで、女で20～24歳から50～54歳までは年齢階級が上がるとともに低下しています。また、男女ともに20～24歳以下では離職率よりも入職率が高く、25～29歳から50～54歳までの各年齢階級で入職率と離職率はほぼ同率、55～59歳以降の各年齢階級で離職超過となり、60～64歳以降で離職超過幅が大きくなります。

これらをローバースカウト年代に置き換えてみると、ちょうどローバースカウト年代は入職者も離職者も多いことから独り立ちをする生活としては不安定である可能性が高いと考えられます。ローバースカウトの活動を進めていくなかでも、就職やキャリア、仕事に関することを常に意識する必要があるということが伺えます。

<sup>5</sup> 常用労働者のうち、事業所を退職・解雇された者の割合。他企業への出向者・出向復帰者を含み、同一企業内の他事業所への転出者を除く。

<sup>6</sup> ローバースカウト年代の終了年となる25歳は、浪人・留年をせずに大学を卒業した者が就職して3年目ということになる。



図4-1 年齢階級別入職率・離職率（平成30年・男）

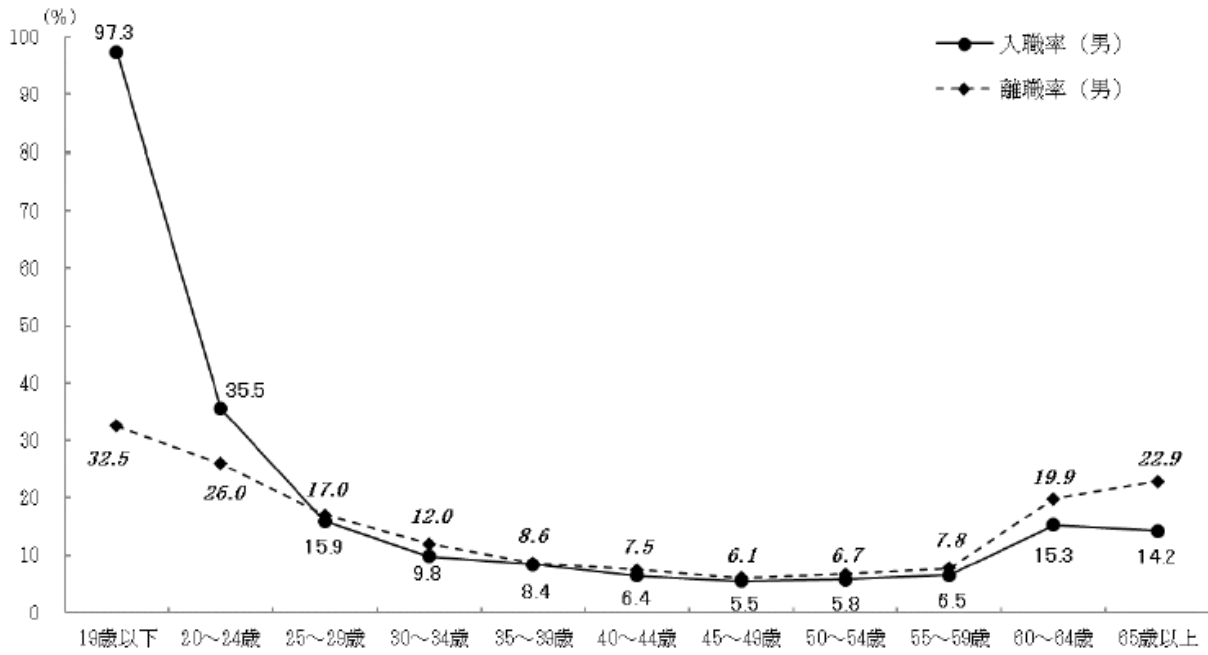


図9 男性年齢階級別入職率・離職率（平成30年厚生労働省雇用動向調査）

図4-2 年齢階級別入職率・離職率（平成30年・女）

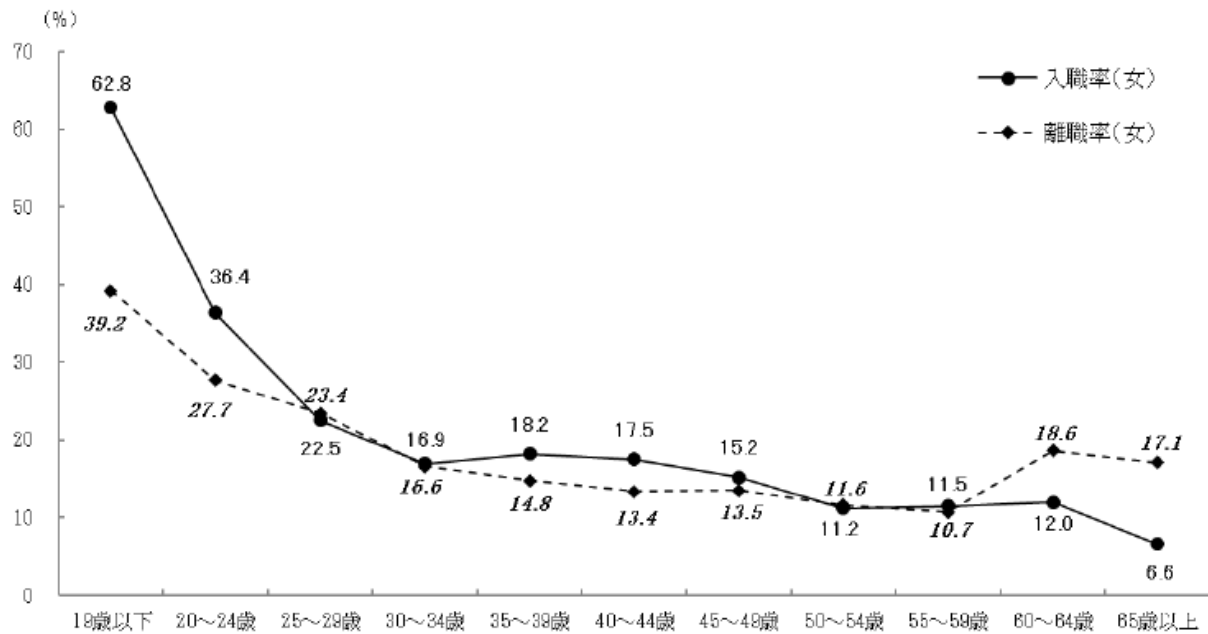


図10 女性年齢階級別入職率・離職率（平成30年厚生労働省雇用動向調査）

## 社会から必要とされる人材へ

学生から社会人へとその立場を変えていく世代となるローバースカウト年代に求められているものは何でしょうか。特に「社会」という視点から確認する必要があると思われます。ここでは、いくつかの調査の中から、ローバースカウト年代に期待されている「能力」について確認していきます。

## OECDにおける「キー・コンピテンシー」

教育の成果と影響に関する情報への関心が高まり、経済協力開発機構（以下：OECD）において「キー・コンピテンシー」の特定と分析に伴うコンセプトを各国共通にする必要性が求められました。OECDは1997年末に、プログラム「コンピテンシーの定義と選択」（The Definition and Selection of KEY COMPETENCIES : DeSeCo）の策定に着手し、2003年に最終報告を出しています。この報告がPISA調査<sup>7</sup>の概念枠組みの基本となっています。

### キー・コンピテンシーの定義

「キー・コンピテンシー」とは、日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシー<sup>8</sup>をすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で特に、①人生の成功や社会の発展にとって有益、②様々な文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、③特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されています。そして、個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略であるとしています。

### キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー

キー・コンピテンシーは、次の3つのカテゴリーに別れています。

- 1 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）
- 2 多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）
- 3 自律的に行動する能力（個人の自律性と主体性）

この3つのキー・コンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性である。深く考えることには、目の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはまることのできる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え、行動する力が含まれる。

<sup>7</sup> 国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）」<http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/>

PISA調査は15歳を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーに関する調査を3年おきに行っている。

また、成人に対してはOECD国際成人力調査（PIAAC : Programme for the International Assessment of Adult Competencies）がある。下記URLで日本の結果の詳細が解説されている。

OECD 国際成人力調査結果の概要

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/data/0thers/\\_icsFiles/afieldfile/2013/11/07/1287165\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/0thers/_icsFiles/afieldfile/2013/11/07/1287165_1.pdf)

<sup>8</sup> コンピテンシーについて、三省堂大辞林第3版では「〔能力・資格・適性の意〕企業の人事評価で、業績優秀者の行動の様式や特性。」と説明されている。〔松下、2011〕が詳しい。この論文は以下のURLで閲覧が可能である。

<http://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2011/09/pdf/039-049.pdf>

そして、その背景には「変化」「複雑性」「相互依存」に特徴付けられる世界への対応の必要性があげられる。具体的には、以下の3つである。

- 1 テクノロジーが急速かつ継続的に変化しており、これを使いこなすためには、一回習得すれば終わりというのではなく、変化への適応力が必要。
- 2 社会は個人間の相互依存を深めつつ、より複雑化・個別化していることから、自らとは異なる文化等をもった他者との接触が増大。
- 3 グローバリズムは新しい形の相互依存を創出。人間の行動は、個人の属する地域や国をはるかに超える、例えば経済競争や環境問題に左右される。

キー・コンピテンシーの具体的な内容は、次のとおりである。

## 1 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力

### ○言語、シンボル、テキストを活用する能力

- ・様々な状況において、話したり書いたりする言語のスキルや数学的なスキル等を効果的に活用する力。【PISA調査・読解力、数学的リテラシー】

### ○知識や情報を活用する能力

- ・情報それ自体の本質について、例えば、その技術的なよりどころや社会的・文化的な文脈などを考慮して、批判的に深く考えることができる力。【PISA調査・科学的リテラシー】
- ・他人の意見や選択肢の理解、自らの意見の形成、意思決定、確実な情報に基づいた責任ある行動を可能とする基盤。

### ○テクノロジーを活用する能力

- ・個人が日々の生活においてテクノロジーが新しい方法で活用できることに気付くことが第一。
- ・テクノロジーには、遠隔地間の協働、情報へのアクセス、他人との双方向のやりとりなど新たな可能性。そのためには、E-mailの送信など単なるインターネットの活用スキル以上の力が必要。

## 2 多様な集団における人間関係形成能力

### ○他人と円滑に人間関係を構築する能力

- ・個人が知人や同僚、顧客などと個人的な関係を作り出し、維持し、発展させる力。
- ・具体的には、「共感する力」、「感情を効果的にコントロールする力」。

### ○協調する能力

- ・協調に当たっては、各個人が一定の能力を持っていることが必要。グループへの貢献と個々人の価値とのバランスを図ることができる力が不可欠。また、リーダーシップを共有し、他人を助けることができることも必須。

### ○利害の対立を御し、解決する能力

- ・利害の対立に建設的にアプローチするには対立を否定するのではなく、それを御するプロセスを認識すること。他者の利益や双方が一定の利益を得るための解決方法への深い理解が必要。

## 3 自立的に行動する能力

自立とは孤独のことではなく、むしろ周囲の環境や社会的な動き、自らが果たし果たそうとしている役割を認識すること。

### ○大局的に行動する能力

- ・自らの行動や決定を、自身が置かれている立場、自身の行動の影響等を理解したうえで行える力。【PISA調査・問題解決能力】

### ○人生設計や個人の計画を作り実行する能力

- ・人生の意義を見失いがちな変化し続ける環境のなかで、自らの人生に一定のストーリーを作るとともに意味や目的を与える力。

### ○権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力

- ・成文のルールを知り、建設的な議論のうえ、調整したり対案を示したりする力。
- ・自分自身の権利などを表明するためのみの力ではなく、家庭、社会、職場、取引などで適切な選択をすることができる。

## 社会人基礎力

---

「社会人基礎力」とは、経済産業省が提唱する「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」をあらわす概念<sup>9</sup>です。

経済産業省が平成21年に行った「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査」では、社会人として身につけておいてほしい能力に関して学生、企業それぞれに質問をしています。図11は「自分が既に身につけていると思う能力は？（対学生）」「学生が既に身につけていると思う能力は？（対企業）」という質問に対する回答です。

また、図12は「自分に不足していると思う能力は？（対学生）」「学生に不足していると思う能力は？（対企業）」という質問に対する回答です。それぞれギャップが目立つ項目について図11、図12に「check」を記載しました。「粘り強さ」「チームワーク力」「主体性」「コミュニケーション力」の項目に対して、学生は「十分できている」と認識しているが、企業側は「まだまだ足りない」と言う認識を示しています。また、「ビジネスマナー」「語学力」「業界の知識」「PCスキル」の項目に関して、学生は「まだまだ足りない」と認識しているが、企業側は「十分できている(またはこれからでよい)」と言う認識を示しています。

---

<sup>9</sup> 「about社会人基礎力」

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/about.htm>

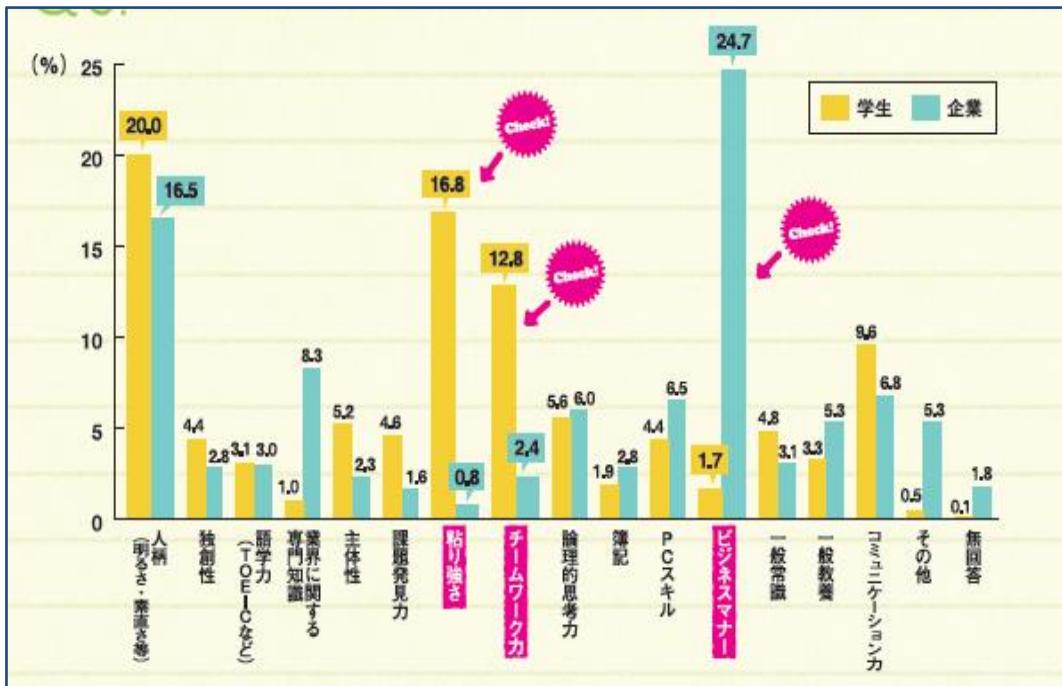


図 1 1 身につけておいてほしい能力水準  
 (大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査)

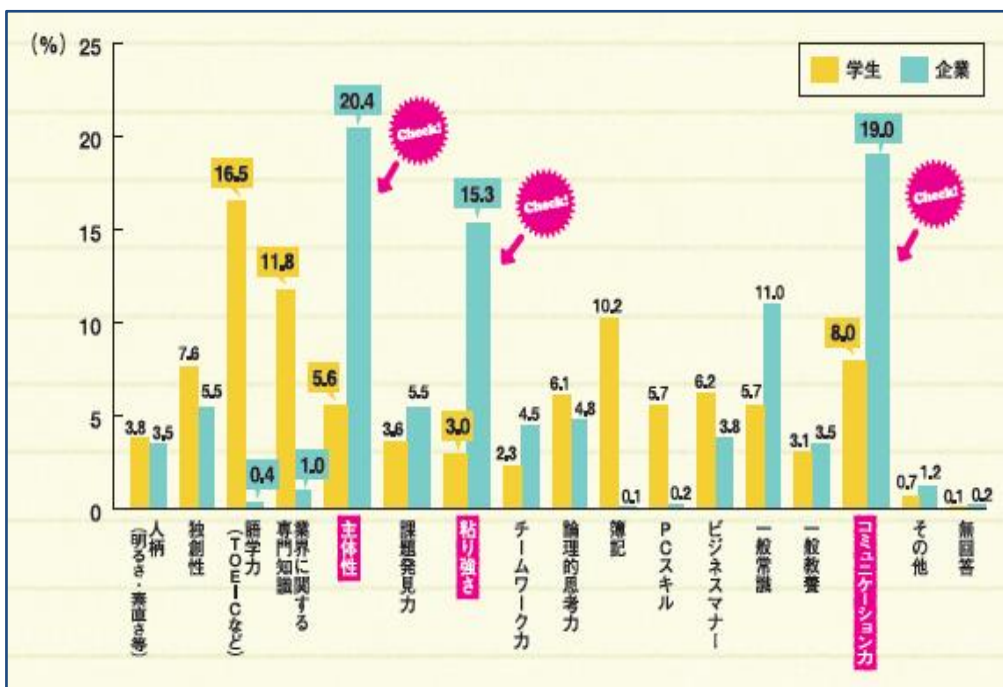



図 1 2 不足していると考える能力水準  
 (大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査)

これらの調査結果から、経済産業省では「社会人基礎力」として「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を定め、各企業へのPRを進めるとともに、大学における「社会人基礎力」の採用を進めています。

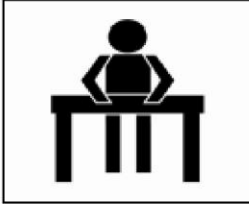


**前に踏み出す力(アクション)**      ～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～



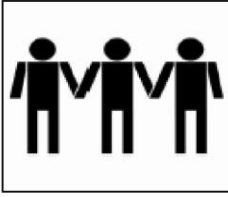
<b>主体性</b>
物事に進んで取り組む力
<b>働きかけ力</b>
他人に働きかけ巻き込む力
<b>実行力</b>
目的を設定し確実に行動する力

**考え抜く力(シンキング)**      ～疑問を持ち、考え抜く力～



<b>課題発見力</b>
現状を分析し目的や課題を明らかにする力
<b>計画力</b>
課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
<b>創造力</b>
新しい価値を生み出す力

**チームで働く力(チームワーク)**      ～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～



<b>発信力</b>	自分の意見をわかりやすく伝える力
<b>傾聴力</b>	相手の意見を丁寧に聴く力
<b>柔軟性</b>	意見の違いや立場の違いを理解する力
<b>状況把握力</b>	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
<b>規律性</b>	社会のルールや人との約束を守る力
<b>ストレスコントロール力</b>	ストレスの発生源に対応する力

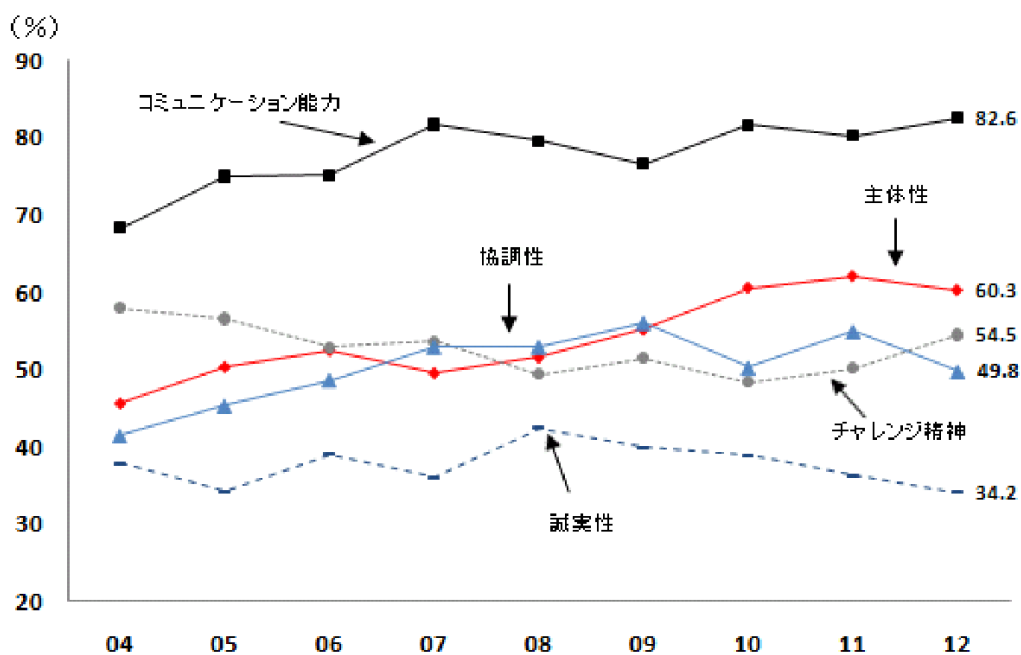
## 社会人として新卒採用を行う各企業の意識

一般社団法人日本経済団体連合会では、2012年7月30日に「新卒採用（2012年4月入社対象）に関するアンケート」の調査結果の概要を公表しています<sup>10</sup>。

このなかでアンケートに回答した各企業が採用選考時に重視する要素を聞いていますが、企業が選考にあたって重視した点を24項目から5つ回答する設問で「コミュニケーション能力」が9年連続で第1位となりました。これに加え「チャレンジ精神」が対前年4.3ポイント増の3位で「協調性」と順位が入れ替わったものの、上位5つの項目自体には変化はなかったとしています。ここで言う上位5項目は「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」です。また「柔軟性」が対前年5.9ポイント増と最大の上げ幅で9位となった一方、「専門性」は8.7ポイント減の12位と順位を落としたと調査結果を報告しました。

<sup>10</sup> 一般社団法人日本経済団体連合会「新卒採用（2012年4月入社対象）に関するアンケート調査結果の概要」

[http://www.keidanren.or.jp/policy/2012/058\\_gaiyo.pdf](http://www.keidanren.or.jp/policy/2012/058_gaiyo.pdf)



また、Benesse教育研究開発センター高等教育研究所では、2013年6月に「企業人の大学新卒採用・育成に関する意識調査<sup>11</sup>」で、埼玉・千葉・東京・神奈川・岐阜・愛知・三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山の各都府県に勤務地があり、かつ大学新卒を定期的に採用している民間企業に勤める25歳～44歳の企業人男女2,060人に対し、インターネットによる調査を行っています。

この調査では、ローバースカウト年代を終了した、いわば企業における「ローバースカウト年代の先輩」に当たる立場の企業人の意見を取りまとめており、採用時に必要な力として企業人が重視する順に「誠実さ・責任感」「コミュニケーションの力」「チャレンジ精神・粘り強さ」「主体性」「専門性・知識欲」「協調性・チームワーク」の6分野に集約できる姿勢・資質を明らかにしています。また、その「誠実さ・責任感」の中でも最も根本的に求められる姿勢・資質は「約束した期限までに仕事を完了する。万一できない場合は、期限の前に理由を伝える」ことであり、企業人全体の同意度も50%となっていました。

<sup>11</sup> Benesse教育研究開発センター高等教育研究所では2013年6月に「企業人の大学新卒採用・育成に関する意識調査」データ集

[http://berd.benesse.jp/berd/koutou/activity/pdf/02\\_kouen/2013/20130602-2.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/koutou/activity/pdf/02_kouen/2013/20130602-2.pdf)

## ローバースカウト年代を取り巻く社会的状況と求められる能力

以上のような調査結果から、ローバースカウト年代を取り巻く社会的状況と求められる能力として、次のようなことが確認できました。

- ローバースカウトとなる世代の青年は、今後しばらくは減り続ける。
- ほとんどが高等学校に進学する。
- 高校卒業後、7割が大学・短大・専門学校などに進学する。
- ローバースカウト年代の間に3割程度が離職し、再就職する。
- OECD標準として「キー・コンピテンシー」が明示され、この「キー・コンピテンシー」がPISA調査の基本となっている。
- 「キー・コンピテンシー」とは「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」「多様な集団における人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」である。
- 「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」が求められている。
- 企業は採用時、「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」を求めている。
- 企業人は「誠実さ・責任感」「コミュニケーションの力」「チャレンジ精神・粘り強さ」「主体性」「専門性・知識欲」「協調性・チームワーク」を採用時に必要な力として重視している。



## ローバースカウト活動の実状

---

社会で求められている現状を把握したうえで、今度は日本のローバースカウト活動の実情について確認しましょう。

### (1) ローバー隊の種別

---

日本連盟に加盟登録されたローバースカウト隊は、令和元年度末（2020年3月）の登録状況によると、全国に1,258隊あるうち、地域・地区・その他が1,228隊（約97%）、大学ローバー30隊（約3%）、職域ローバー0隊（0%）となっています。つまり、地域のローバースカウトが圧倒的に多いということが分かります。また、大都市圏においては大学を母体としたローバー隊が多いことも特徴として挙げられますが、これらの種別に目を向けてみると、それぞれのローバー隊は様々な個性と課題を持っています。

#### ①地域ローバー隊

---

ローバースカウト同士での活動が基本となるため、多くの地域団はローバー隊を設置し、ビーバーからローバーまでの一貫教育の最終部門として活動が実現できるようになっています。しかし、多くの団では、ローバースカウト同士が自ら独自の活動を行うことよりも他部門の隊指導者としてサポートすることに重きを置かなければならず重複登録していることが多いのが現状です。

これは各団の指導者不足という要因が、ローバースカウト年代を指導者予備軍としなければならないために、ローバー独自のプログラムの展開ができないことを示しています。従って、ローバー活動に専念するよりも、他部門の隊奉仕活動に追われてローバー年代に期待されるスカウトとしての技能・知識・資質の研鑽ができていく状況が共通の悩みとなっています。

また、団指導者、隊指導者そしてローバースカウト自身すらローバー活動への理解が不十分であることも見逃せない点でもあります。さらに、ローバースカウト年代は大学や就職で居住地を離れることも多く、そのために人数が不足したり登録はしているが日常の活動に参画できないなど、隊活動が行えないことも現状として挙げられます。

#### ②大学ローバー隊

---

大学ローバー隊には、ベンチャー部門までのスカウト活動を経験したことがないままに大学における体育会・文化会の一つとして参加するもの、スカウティングにおける野外活動の面に関心をもって参加するもの、時には探検部、ワンダーフォーゲル部およびボーイスカウト研究会的なサークル活動として組織される傾向が見られます。

これに関連して、上級生と下級生の確固とした上下関係（時として長所として作用することもある）が存在したり、特異な階級社会となったり、卒業と同時にスカウティングから離れてしまう人も多いようです。

大学ローバーは、大学教育の組織に組み込まれ、大学での教育や生活に大きな関わりがあるため、大学関係者（教職員）の中から団指導者やアドバイザーを得ることが望まれています。

#### ③職域ローバー隊

---

職域ローバー隊は、活動内容について企業側の理解と方針に依存しなければなりません。スカウト活動が企業にとって有効と認められない限り設立も活動も困難となります。

経済動向が職域ローバー隊の活動に直接影響を与えているという状況もあります。



それぞれの種別のローバー隊には、このような状況が認識されますが、スカウティングの魅力は、いずれもローバー年代の青年の自主的な行動によって彼らの年代にふさわしい知的、体力的、精神的な面での幅広いニーズに対応した活動を求める欲求を程度の差こそあれ満たしていると考えられます。

また、ローバースカウトにしてみれば、スカウティングの理念に情熱をかきたてられ、自身に内包している可能性を、活動を通して伸ばし、彼らの人間的な成長を助け、持てる力を実際に役立てていけると考えられます。

野外活動と奉仕の仲間であるローバースカウトには、スカウト行事の多くが彼らの活躍に依存されていることから、ローバーのプログラムに明確な指針が打ち出しにくくなっているとも考えられます。しかし、別の見方をすれば、単一のプログラムが存在しない現状がローバースカウト活動の本来の姿ともいえます。

## (2) 都市と地方におけるローバー隊

日本のローバースカウト活動でもう一つ顕著な点は、都市部と地方との相違が挙げられます。

都市においては、この年代の青年たちは大学や専門学校などの高等教育を受けたり、就職をして都市に移住しています。就職をすると、スカウト活動をしたり、そもそも団に所属することが困難な場合があるが、大学へ進学した青年たちは、大学によっては大学ローバー隊が形成されており、活動ができます。このときには、大学内やその地域、職域における一種のクラブ活動として、他の趣味や運動のクラブと同様の扱いを受けることから、ややもすればスカウト運動の特色や独自性が薄れて、単なるアウトドア活動クラブとして参加者を集めるという結果になりやすいです。また、独自の活動を優先し、グループでの活動を行えないローバースカウトも多くなってきていることは、注視すべき部分でもあります。

このような大学ローバー隊に、スカウト経験者が入隊することで、経験者から未経験者に対して、ボーイスカウト運動がどのように社会に役立っているかをアピールすることができます。アピールを認識してもらえるかどうかで、日本のボーイスカウト運動がこれから広がりを見込めるかどうか、将来性を垣間見ることができます。そして、アピールする本人にとっても、社会に出るうえで、価値観を共有することの厳しさをあらかじめ体験し、今後の活動に生かすことができるという点で、大学ローバースカウト隊に、スカウト経験者が加わることは教育的効果の面で絶大です。

これに対し、地方都市やその周辺の団においては、ローバー隊を形成するスカウトの数が少なく、規定に示された標準の組織として登録する人数に達しない場合も多々あります。このような場合は、「地区ローバー隊」または団内に「暫定的ローバー隊」を組織して活動することになります。また、ローバー隊として登録できる人数は確保されているとしても、この年代は大学や就職等によって団の所在地から離れるローバースカウトが多く、原隊に留まって常時活動する者が少数になってしまうことも生じています。

そのような場合は、自己訓練と自己啓発をする個人プログラムを自ら計画して実施することによって活動を継続することになると思われませんが、アドバイザーや他のローバースカウトの協力を得にくいことから、単独で自己訓練と自己啓発のためのプログラムを立案して実行することは不可能なことが多いです。また、そのような状況におかれたローバースカウトにとって、他のローバースカウトとの活動を行うことは事実上できないのが通例なのだと思います。

ローバースカウト年代は、自分たちの活動を展開するために、自分の置かれた環境や状況を見極めて、少しでも良い状況をつくり出すために仲間づくりをし、仲間呼び掛けていく積極的姿勢が要求される年代でもあります。彼らの意欲と青年の特徴である積極性を生かしたスカウティングの実践の場を導き出すことが必要です。



### (3) 全国ローバースカウト会議 (RCJ)

---

全国ローバースカウト会議 (Rover Scout Council of Japan 略称: RCJ) とは、18歳から25歳までのローバースカウトまたは指導者を対象とした会議体です。主に日本連盟に対してローバー年代による提言や、日本全国のRCJ構成員へ情報発信を行います。情報交換の場の提供や提言活動などを通して、全国のローバースカウト活動を活性化させ、ひいては日本のボーイスカウト運動の発展に寄与することが目的です。

年1回開催されるRCJ総会でRCJ運営委員が選出され、その運営委員で編成されるRCJ運営委員会が組織の運営を行っています。全国のローバースカウトの意見はRCJ県代表を通じてRCJ運営委員会へ伝えられ、RCJ議長を通じて日本連盟教育推進会議へ届けられます。これにより日本のボーイスカウト運動における青年参画が更に進むことが期待されています。

### (4) 実際の活動事例

---

ここでは、全国のローバースカウト個人やローバースカウトの集団によって展開されている活動をいくつか紹介します。様々な規模・種類の活動を「何をやったのか」「なぜやったのか」「どのようにやったのか」という観点から知ることで、皆さんがこれからローバースカウト活動に取り組むうえでの参考にしてみましょう。

#### ①ブロック単位の活動の運営

---

2019年度RCJ中部ブロックイベント実行委員長

新田 寛和 さん (石川県連盟 野々市第1団)

##### 1. 何をやったのか

一泊二日の舎営を実施しました。52人の参加者と9人の実行委員で、計61人が中部ブロックから集まりました。

1日目は技能大会と称し、班ごとにコンパスゲーム、ロープワーク、キムスゲーム、測量に挑戦しました。キムスゲームは物の数を約60個に設定するなど、遊び心も入れて楽しみました。夜には自由参加の交流会で談笑しました。

2日目は活動報告会と称し、発表者が自分たちの活動について紹介する場を持ちました。発表を受けて、ブロックや個人としてどんなことをやりたいか考える「グループ談論」という時間を持ちました。これは、特定のテーマについて議論して意見を出すというよりも、これからの活動のきっかけになってほしいという想いでやりました。

##### 2. なぜやったのか

ブロックでの事業をやろうという声は以前から挙がっていたみたいで、やっと実現できました。個人としては、中部ブロックのローバーを盛り上げたいという気持ちと、石川県内のローバーの仲間づくりをしたいという気持ちが両方ありました。中部ブロックは面積がかなり広く、地理的にどうしても「太平洋側」「日本海側」で分かれてしまいがちなんです。だからこそ、この事業を通じてブロックの連帯感を高めたいという気持ちは強かったです。結果、技能大会や交流会で仲良くなり、そして活動報告会で互いの活動について知り、グループ談論を通じて話し合ったことで、この目的は十分達成できたと思います。

プログラム構成にあたっては、RCJクエストやRCJ Re:Quest、関東ローバーのつどいといった事業の報告書を参考にし、ローバーが持っているニーズを把握しようと思いました。その結果、やはり野外活動にニーズがあると分かったのですが、企画段階で一泊二日に決まっており、いわゆる野営大会にすることは難しかったです。そこで、舎営でありながら野外活動の要素も含んだプログラム構成にしました。

### 3. どのようにやったのか

2日間のプログラム構成は工夫しました。いきなり活動報告だとかたい雰囲気になってしまいそうだったので、まずは技能大会を通じて、スカウトらしく体を動かす活動によって交流を深められるようにしました。こうして打ち解けた状態で活動報告会に臨む方が、意見の交換も活発になります。

県連盟をまたいだイベントであったために、成人指導者との折衝には苦勞することもあったのですが、優秀な実行委員に支えられ、そしてブロックイベントをやるんだという自分の責任感もあって、なんとか成功させることができました。アンケートに「これまではスカウト活動を辞めようかと思っていたけど、これに参加して続けようと思えた」という内容が書いてあって、これを読んだときは本当に感動しました。

## ②全国事業・県連盟事業の運営

RCJ Re:Quest2018実行委員

第53回東京連盟ローバー100kmハイク実行委員長

安達 保乃香 さん（山形県連盟 天童第1団 / 東京連盟 新宿第2団）

### 1. 何をやったのか

2018年夏に開催されたRCJ Re:Quest2018では、実行委員として2017年秋から、プログラムの計画を進め、当日の運営を担当しました。

東京連盟の恒例行事であるローバー100kmハイクでは、指導者の実行委員会とローバー世代の実行委員会（ユース実行委員会）が組織されます。2018年度はユース実行委員、2019年度は4つある部門のうちコースに関する部門のチーフ、そして2020年度はユース実行委員長を務めました。実行委員長としては、役割別に4つに分かれている部門のマネジメント、および指導者側の実行委員会との折衝を担当しました。

### 2. なぜやったのか

2017年度はRCJの山形県代表を務めていて、RCJに何かしらコミットしたいという気持ちが強かったです。その中で、Re:Questの実行委員の募集があることを知りました。ローバー1年目ということで、自分にできるのかという不安もありました。

100kmハイクの運営には元々興味があったので、こちらもローバー1年目から実行委員になりました。運よく、自分が所属している大学ローバーから1人実行委員を選出することになったので、立候補しました。先輩に実行委員経験者がいて、経験談を聞ける環境にいたことも心の支えになりました。

実行委員長は、通例として前回の実行委員長が指名することになっています。それで自分に声がかかり、自分としても運営面で改善できる部分があると考えていたので、その改善を実現できる立場である委員長という役割を引き受けました。

### 3. どのようにやったのか

Re:Questでは、目の前のやるべきことから逃げないことを大事にしました。正直、経験豊富な他の実行委員がいる中で、ローバー1年目の自分が意見を言っているのかとためらうこともありました。さらに、当日は思わぬトラブルに柔軟に対応することも求められました。それをつらいからといって逃げてしまえば、今後のローバーリングの可能性が閉ざされてしまうように思ったのが、つらいこともある中で頑張れた理由だと思います。

100kmハイクは、毎年開催しているため過去のノウハウがとても多く、業務のこなし方についてあまり問題はありませんでした。一方で、実行委員の中で参画の度合いにばらつきがあり、一部の委員に業務が集中しすぎるといった組織の課題も抱えていました。これに対しては、各部門の業務を見える化することで、すべての委員にバランスよく業務が振り分けられるように工夫しました。また、部門チーフに個別でこまめにコミュニケーションを取ること

で、自分と部門チーフの認識に誤りが起きないようにしていました。また、対参加者には、事前の説明会をオンラインで受講できるように効率化を図りました。

Re:Questでの経験は、100kmハイクの運営にかなり活かしていると思います。自分の意見をためらってしまった経験からは、分からないことはすぐに聞くというコミュニケーションの基本を再確認できました。また、本番を想定して逆算して計画を立てるという考え方は、Re:Questで事業運営に初めて携わって得られた教訓として、100kmハイクの計画に直結していました。さらに、自分が委員長になった時は、メンバーに自分からオープンな雰囲気を出すことでコミュニケーションを活発にできるよう心がけていましたが、これは、Re:Questと100kmハイクで委員としてチーフや委員長のフォロワーとして運営に携わった経験に基づく姿勢でした。

### ③県連盟ローバー組織の運営

兵庫県ローバース代表 松永 慶太郎 さん（兵庫連盟 神戸第58団）

#### 1. 何をやっているのか

2018年に設立し、兵庫県内のローバースカウトが活発に活動できるよう、定例的に会議を設けて議論を重ねています。さらに、2つの活動の企画・運営をしています。1つ目は交流キャンプで、目的は県内ローバーの新たなネットワークづくりです。2つ目はローバーカフェ（旧称：説明会）で、目的はネットワークづくりに加え、RCJ近畿ブロックについての理解と、ローバーリングについての意見交換です。「意見交換」という要素があるので、説明会からカフェという名前に変えました。

#### 2. なぜやっているのか

兵庫県は面積が広めで、ローバースカウトが県内各地に分散しています。そのため、自団・自地区だけで仲間を集めて充実した活動をすることが難しく、「ローバーって何をすればいいんだろう」と路頭に迷います。すると、ローバースカウトにどんな可能性があるかを知らないまま指導者登録をする同年代が多くなってしまいます。指導者登録自体は全く悪いことではないのですが、ローバースカウトとして活動するという選択肢についてあまり知らないまま指導者になるのは、少しもったいないと思っています。この問題を解決するために、県のローバーのコミュニティをつくることにしました。

#### 3. どのようにやっているのか

イベントには、頼み込んで無理やり連れてくることもあるくらい、自分たちから働きかけてローバースカウトを集めています。リピート率が高いので、一回来てくれさえすれば、集まる楽しさと、集まったことによって自分の活動が充実するというメリットを分かってくれるのだと思います。

イベントの広報には力を入れ、魅力が伝わるように工夫しています。さらに、SNSごとにターゲットを分けることで効果的な広報を心がけています。例えばInstagramにはスカウト向けに上手く撮れた写真を載せ、Facebookには指導者からも共感を得られるような熱い想いを書いています。

組織の運営では、設立から3年目になってきて活動が恒例化していることによる問題も出てきています。初期は、メンバー全員が組織や事業の目的への認識を共有し、足並みを揃えて活動できていました。しかし、活動が恒例になってくると、やる事が既に決まっているため、目的ではなく手段の話ばかり先行してしまうように感じています。メンバーが増えても、事業が例え同じものでも、本来の目的を皆が了解して物事を進められるように意識して組織を運営しようと思っています。

### 3. ローバースカウト部門とは？

---

日本のスカウティングは、日本の社会に対してどのような影響を与えているのでしょうか。その影響度合いを数値化する場合に考えられる指標の一つは、「社会を発展させる役割（意識や能力）を担った成人として、どのぐらいの若者がスカウト運動から卒業していくか」というものが考えられます。

その指標を高めていくためには、日本連盟がローバースカウトたちに対して適切なプログラムができるように環境づくりを行うこと、そして、成人指導者に意義あるトレーニングを提供するという両側面から、ローバースカウトへの効果的な支援ができるようにすることです。

この文章は、ローバースカウト部門におけるローバーのプログラムをどのように組み立てていくか、骨格を指し示した内容となっています。

### ローバースカウト部門とは何でしょう？

---

ローバースカウト部門は、スカウティングにおける最終の部門です。スカウティングにおけるどの青少年プログラムからしても、ローバースカウト部門は、ねらいや目的、スカウト教育法を通じた活動手法、実際の活動のすべてにおいて、「まとめ」となるものでなくてはなりません。

スカウティングにおける青少年プログラムは、加盟員の若者が経験するすべての活動を網羅しています。最も若い世代では大体6歳から8歳くらいからスカウト運動に加わり、最終的にメンバーとしてプログラムを終え、卒業していくのは25歳頃となります。これらは主に野外活動の手段を通じて、教育や自己啓発のための累進的な仕組みであるといえます。

### なぜ（狙いや目的）

---

ローバースカウト部門のプログラムは、以下のスカウティングの原則に基づいて、スカウティングの目的を達成するために存在します。

- 信頼できる社会人として、自分の住む近隣の、全国的、および国際的なコミュニティの一員となる
- 自らが身体的、知的、社会的、精神的な面での成長を促進させる

### どのように（スカウト教育法を通じて）

---

ローバースカウト部門のプログラムがどのように実行されるのかを決定する、1つの基本となるものがあります。それはスカウト教育法です。

スカウト教育法とは、いくつかの異なる教育的なツールから構成されているため、スカウティングで用いる手法を「スカウト教育法」という固有名詞で呼んでいます。いくつかの教育的要素として「ちかいとおきて」「行うことによって学ぶ」「チームシステム」「シンボルの活用」「個人の進歩」「自然」「成人の支援」「社会との協同」といった要素から構成されます。これら教育的なツールの多くは、例えばチームでプロジェクトを行うといった形で、他の教育形式に対しても用いられます。しかし、スカウティングにおいてこれらのツールをスカウト教育法の要素としているのは、それぞれのツールはスカウト教育法全体の一部を構成するものに過ぎないからです。これらの要素が全体を形作り、システムとして用いられるという事実が、スカウティングの特徴となるのです。



## なにを（活動内容）

ローバースカウト部門のプログラムは、キャンプ・野外活動、地域奉仕活動や、発展途上国などの意識向上プロジェクト、ゲーム、セレモニー、英国エディンバラ公国際アワードといった、ローバー活動を行う青年が参加するすべての活動を含みます。これらの活動は、青年にとって興味を持てる、やりがいのあるもの、という共通点を持っていないければなりません。





## 4. なぜ、ローバースカウト活動をするのでしょうか

「ローバーリングとは 目的なしのさまよいだとは考えない。はっきりした目標をみつめ、愉快な道を進んで行くことだと私は意味づけている。そして、その道中には苦難もあれば危険もあり、君たちはそれに出会うものと考えてのことである。君たちはこのような暗礁の多くを予期しているべきである。」 Baden-Powell  
(日本語訳: *Revering to Success*日本語版 ボーイスカウト日本連盟 平成8年版)

この文は何十年も前に書かれたものですが、もし象徴性を理解できるならば、ローバーリングとは何であるかについて、理解するのに役立つでしょう。

スカウティングの主な目標は、各々の若者を支援することであり、刺激することです。若者が活発で幸せな社会人となり、より良い世界を創り上げることに貢献できるようにするのが成人指導者の使命です。成人指導者の使命は、幼児期から成人期へと向かう青年の「道」を支援することなのです。

スカウティングがしなければならないのは、成長するその人の過ごす過程に沿って、各々のスカウトとともに、彼らがスカウティングの支援がなくなっても、成長するために必要なものを自分の内側から見出すことができるよう、各々の人を応援することです。

このことは、青年がうまく成人期に入っていく場合、様々な局面で直面することになる難問です。自分の居場所を社会の中に見つけ、職業を選び、価値感を掴みとり、人間関係を育み、長続きする協力関係を築いていくことが課題となります。青年を迎え入れて、支援する準備ができていくスカウティングの各部門では、成長する青年にとって重要な時期に、大きな役割を果たすことができます。このことが、ローバースカウト部門を持つことが重要である理由です。なぜなら、各々の青年が自分たちの仲間や経験豊かな人々からの支援を受けて、自分自身の分析や、職業や生活手段の決定を行うための環境を提供することができるからです。

ローバーリングは、成人期に通じている「道」の最後の段階にいる人々に対し、スカウティングが提供する学習環境です。スカウティングが「教育として提供するもの」としては最後の段階のものです。

今まで述べてきたすべてのことは、明らかに、なぜローバースカウト部門に年齢上限がなければならないかの理由となります。スカウティングの役割は、スカウトが成人期に達するまで、青年が自分自身を成長させるよう支援することなのです。そのため、私たちが提供するプログラムはこの段階に達する前に終わらせるべきではありません。もしそうすると「不完全」な社会人を世に出してしまうことになってしまいます。

同時に、私たちは教育プログラムを、すでに自分の居場所をコミュニティの中に見つけた「完全に成長した」人々に提供し続けることは、不適當であると考えなければなりません。もちろん私たちは、自分を成長させるということは、ずっと続いていくものであるということを知っています。しかし、スカウティングにおいては、世界アダルトリソース方針で確認されたように、青年とそのトレーニングに対して提供される教育プログラムと、「スカウティングにおける成人」に提供される支援とは、異なるものであるということを知らなければなりません。このことは、ローバースカウト・プログラムに上限年齢を定めることが重要である理由のうちの1つです。

上限年齢は国ごとに異なります。それは、文化的な理由、経済的理由、社会的理由など、いくつかの要因によって、20歳、22歳、25歳となるようで、日本では、ローバーを18歳から25歳の間の若い男女と定義しています。重要な点は、ある社会において、若い男性や女性が活動的で普通の役割を果たすための正しい「手段」を身につけているようにすることです。

## ローバースカウト教育（目的）

ボーイスカウト運動では、ローバースカウトが「よりよき社会人」として社会に貢献するため、ローバースカウトに対して教育をおこなう。その教育は「より良き社会人」となるためのものであり、ローバースカウト自身にとっても「幸福」になるためのものであることは言うまでもありません。

また、ビーバースカウトから始まったスカウトの一貫教育の最終の仕上げの場としてこの部門をとらえるならば、ローバースカウトは、ボーイスカウト運動の4つの柱といわれる「人格」「健康」「技能」「奉仕」のそれぞれが自らの努力と体験により、スカウト運動の理念にふさわしいように身につけていることが望まれます。

これらの詳細については日本連盟発行「スカウト教育法」で、またローバースカウトの教育、ローバースカウト活動の目標については「日本連盟 教育規程」の第7章に記載されています。

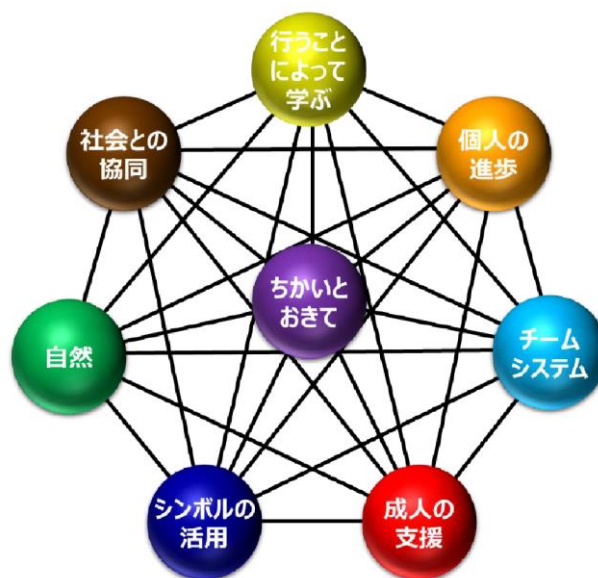
## ローバースカウト活動における「スカウト教育法」の適用

2017年8月、アゼルバイジャンで行われた第41回世界スカウト会議にて決議された「スカウト教育法の見直し」により要素の定義が7つから8つに変更されました（社会との協同が追加）。

スカウト運動の方法は、目標を達成する際に用いられる手段であり、この方法はスカウト運動の原理に基づいているものです。

ボーイスカウト運動は「スカウト教育法」によって教育が行われています。そのスカウト教育法に示された8つの要素をベースにして各部門の目標が設定されており、一貫教育の最終の仕上げ段階であるローバースカウトも、この要素に準じて設定しています。これにより、目標達成度を効果的に示すことが可能となります。

ここで示すローバースカウト活動の目標は「活動の目標」であり、「指導上の目標」ではありません。ローバースカウト自らが、活動を実施するための目標となるものです。



### ちかいとおきて

ローバースカウトとは、真の責任とは何かを理解することができ、生涯に影響を及ぼす重大な責任をどのように意識するかを理解することができる青年のことです。したがって、ローバースカウト部門のちかいは、ボーイやベンチャーなどの各部門のちかいに比べて、より理解しなければならない要素を含んでいます。ローバースカウトにとって、スカウティングの価値に対する責任は、二倍の重さを持つものとなります。

ローバースカウトは若者であり、ちかいとおきてに対して自分の中でより意識していくことができるということを認識することで、自らを発見していく段階において、ローバースカウトはちかいとおきてを自分の言葉で、理解に近づく形で位置付けることができます。ローバースカウトは、スカウティングの基礎となる普遍的な価値、例えば個人の責任、人間の尊厳や自然と一体になることに対する敬意、チームやコミュニティに対する意識、国際的な連帯、暴力に対する拒絶、崇高な精神の信条の探求、意思表示の意味を探究する、といった価値に対する個々の思いや責任を求めていくべきなのです。

## 小グループでの活動

ローバースカウトは、ボーイ隊までの固定的な班とは異なり、それぞれのプロジェクトにあわせてチームを編成し、そのチームの目的・目標を持って活動を行います。そして、そのチームの仲間と共に活動していく中で、協調性やチームワーク、コミュニケーションを培います。また、プロジェクトに関与するローバースカウト以外の指導者、地域の皆さんと協力していく中で「共感する力」「感情を効果的にコントロールする力」など、人間関係を円滑に構築する能力を学び、多様な集団における人間関係形成能力を養っていきます。これはこれまでも見てきたとおり、社会人としても求められていることなのです。

また、利害の対立などを建設的に解決していくためには、様々なチームでの経験も重要となります。ビーバー隊・カブ隊から同じメンバーで過ごす既存の隊・地域ベースの活動単位だけではなく、全国的・国際的な活動単位や趣味・関心ベースの活動単位で様々な経験をすることが、ローバースカウトには重要となります。特に趣味・関心ベースの活動の仲間としてローバー・コミュニティを設置することが、平成25年度ユースフォーラムの提言などでも求められているのです。

## 行うことによって学ぶ

スカウティングは「体験学習」です。体験学習は「体験する」→「何かに気づく」→「評価・分析をする」→「行動を試みる」というプロセスを経て学習が進み、次の体験プロセスへと移行していくスパイラル構造となっています。つまり、体験学習のプロセスに従い、まず「体験」することからすべてが始まるのです。

この「体験」することは、世代にかかわらず自ら動き出す必要があることはいまでもありません。実際に社会においても「前に踏み出す力」「主体性」「実践力」といったことが求められているのです。

## シンボルの活用

シンボルを活用する目的は「青少年の発想を促すという方法で彼らの想像力や冒険心や創造力、工夫する能力を高め、発達の方向性やスカウト運動の基礎にある価値観を確認する手助けをし、ボーイスカウトへの結集や団結を促すこと」です。帽章・年功章・ローバースカウト所属章以外にローバースカウトのみが着用できる記章等が定められていない現状では、シンボルはあまり活用されていないとしかいえない。例えば「活動用のTシャツをそろえる」など、物質的なシンボルを活用して一体感を高めるための工夫はいくらでもある。また、それらに加え、シンボルの活用の精神的な面、すなわち国際的な組織であることの意識、地域社会での存在感を高める行事・活動の実施などは、調査でわかった「自尊感情が強い」「海外への関心が強い」「地域活動に積極的に参加している」など、ローバースカウトの特性を生かすことが可能です。

## 個人の進歩

キー・コンピテンシーで語られているとおり、これからの世界は「変化」「複雑性」「相互依存」に特徴づけられるものとなってくることが予測されており、それに対応することが求められています。テクノロジーの継続的な変化や複雑化する人間関係、国境を越えた新たなグローバリズムなどに対応するには、そのような特徴をふまえた個人の進歩が必要となります。ローバースカウトにおいては、進歩のための課題は自ら設定することが可能となります。英国エディンバラ公国際アワードにより「社会的な承認」を考慮に入れるとともに、「行うことによって学ぶ」要素を取り入れることも必要となるでしょう。

## 成人の支援

---

教育である以上、無謀な活動、危機管理が行われていない状況を認めるわけにはいきません。その判断には難しい面もあるが、成人指導者は「アドバイザー」として、また「人生の先輩」として、それぞれの経験をローバースカウトへの示唆として役立てることはできます。指導者の助言や支援のもと、自分たちで自分たちの自立性を尊重できるような環境を整えることも、ローバースカウトが自立するためには重要な要素となるのです。

また、自らも成人指導者として後輩の指導を行うことは「行うことによって学ぶ」ことを実践することになるので、積極的に訓練・指導に参加することが強く推奨されます。

## 自然の中での活動

---

自然の中での活動は、身体的（運動）、知的（快適に過ごすための工夫）、社会的（譲り合い、助け合いの実践）、精神的（人知を越えた自然の驚異の体験）な発達を促すものである。

様々な場面での「自然」を体験し、自らの能力を向上することが求められます。

B-Pは自然の教育的役割について、森林を例に次のように言っています。「君たちに目と耳さえあれば、森というものはたちまち実験室にも部活の場にも祈りを捧げる寺院にもなるのです。」（ローバーリング・ツウ・サクセス）

世の中はどんどん狭くなり、人と人距離もますます近くなっていますが、私たちが暮らしているそんな環境でも「自然」は存在します。都会に緑は少ないものですが、例えばバスケットボールコートでパイオニアリングをやってみるなどの野外活動をとおして「自然」は表現できるのです。

隊活動やプロジェクトでは様々なことをテーマにするでしょう。例えばハイキングやキャンプといった従来からの野外活動、あるいは環境維持や教育に関するプロジェクトなどといったことです。地球の資源は限られていますが、そんな中であってスカウティングは青少年と社会が環境維持活動などの推進を働きかける役割を担っています。スカウティングをとおして青少年は今の環境を守ろうとするでしょうし、より広い世界で活躍しようとするでしょう。

## 社会との協同

---

社会、すなわちより広い世界に積極的に目を向け関わります。また人と人とが理解を深め、互いに感謝の気持ちを持つよう導きます。

「コミュニティ＝社会」という言葉には、何かを共有する人々の集まりという意味合いがあります。スカウティングで「コミュニティ」といえば、団・地区・都道府県連盟などスカウティングに関連するもの、そして家族・学校・国といったスカウティングとは関係しないものの双方を意味し、当然に地域限定的なものであったり広く国際的であったりするものです。

それでは「社会との協同」に重点を置くことがなぜ重要なのでしょうか？それはスカウティングの基本原則と価値観の共有につながるからです。スカウト教育法は、地域に限定して行われることが多いと思いますが、それをとおして地球規模の課題や重要事項に対する一人ひとりの意識の高まり、さらに地球規模の行動につながるとともに、より深い価値観の共有を推し進めることとなります。

スカウトそれぞれが生まれ育った地域社会がスカウト一人ひとりの成長に影響を及ぼすわけですが、実はスカウトたちは一連のスカウト活動をとおしてより深く自分を知ることになることはもとより、そのことをとおしてその地域社会が目指す目標達成の一端を担うことになるのです。



## 5. ローバースカウト活動を仲間と共に行うことの重要性

ローバースカウト部門では、スカウトが自分自身の個性（アイデンティティ）を見つけるための手助けをする必要があるため、個に対する手法（アプローチ）が他の部門よりも強くなります。スカウトに接する指導者は、スカウトの具体的な課題、選択、夢、才能、困難といったことを扱うこととなります。ローバースカウトの活動は、個を定め行動する、ということに対する非常に重要な時間となります。

これはスカウト自身の孤独な時間を増やしたり、個人主義的な活動を増やすもの、という意味ではありません。実際、そうであってはならず、本来は、自主性を強化するための決心や個人の活動と、他の人と自分の状況を仲間とお互いに共有し、共通の興味・趣味を見つけて楽しむことができる機会とのバランスをとるようにしないとなりません。そうして、グループ内における役割を実践し続けることができるようにします。

しかし、グループでの活動（チーム・システム）はしばしば誤解されてきました。場合によっては、成人が指導者の役割を果たし班長に指示を与えるという、軍隊で用いている方法に近い「ピラミッド状のシステム」と見なされました。またある場合には、その本当の性質を「青年の意思決定における参画」のシステムと見なしていても、「小グループの時に機能するシステム」とだけ認識されていました。

実際には、チーム・システムは青年の意思決定への参画を促すツールとなります。通常、各スカウトが生活する様々な環境（家族、学校、クラブ活動、一般的な社会）における、意味のある個人の活動のために、しっかりしたスタート地点を設定することで、これを完全に実施できるようになります。

若者が意思決定に参画する対象として、いくつかの組織の枠組みが存在します。どのような地域においても、以下のように、少なくとも3種類の組織があるのです。

<b>地域のコミュニティ</b> (住民が狭い範囲で一緒に生活している場合)	住民同士の良好な関係と連帯を育むことで、このコミュニティにおける意思決定を行い、これより上の意思決定機関に代表を送り込むことです。スカウトにおける「地域のコミュニティ」とは、班や組を意味します。友人たちと一緒に小グループを作り、その中から代表としてリーダーを選出します。
<b>議会</b> (立法府)	議会にいるすべての構成員は選ばれた人たちで、協力して大きな決定を行い、規則に従って投票します。スカウトにおいては、議会は隊集会に相当します。スカウトが全員集まる活動やプロジェクトを選択し、グループ活動を評価し、スカウトのおきてに基づいたルールを決めます。
<b>政府</b> (行政府)	議会の決定事項を大臣が実行します。スカウトにおける政府は、隊会議に相当します。チームのリーダーと成人指導者が一緒になって、隊の集まりで決めたことを実行します。隊会議は、カレンダーに従って活動を調整し、計画を定めます。

教育において、このようなシステムは「組織の教育学」（若者が民主的な機関の範囲で意思決定に参画している）と言われます。このようなシステムは、非常に現代的で「革命的なもの」と考えられています。スカウティングにおいては、この運動が始まったところから実践してきたことです。

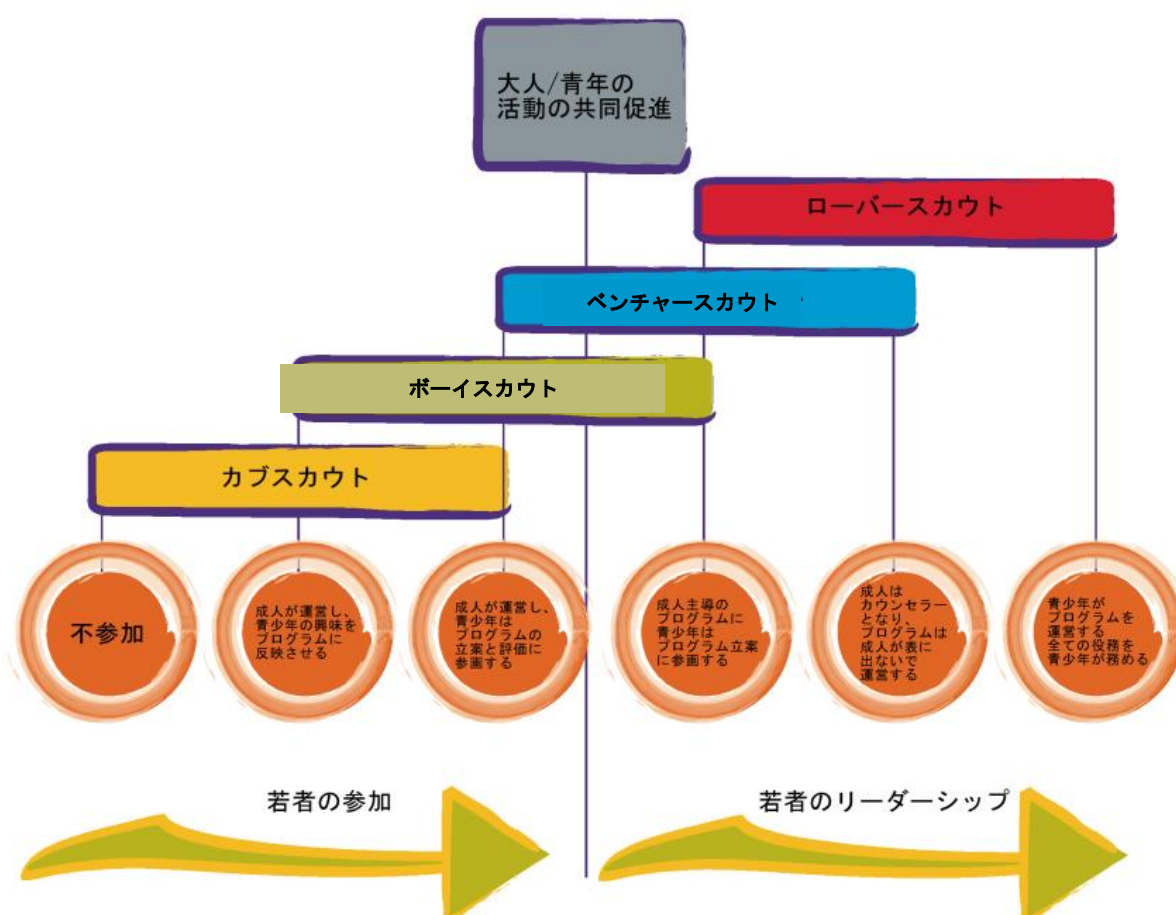
## ローバースカウト部門のチーム・システムの特徴

スカウティングでは、すべての年齢部門において、各年齢の特質に合わせた3つの基本的な機関（チーム、協議会、集会）があります。

子どもたちは長時間会議に出席し、活動のすべてを詳細に計画する、といったことができません。そのため、カブスカウト部門では協議会と集会は非常に短くして、成人指導者により組の活動がうまくいくよう主導していく必要があります。

ボーイスカウト部門やベンチャースカウト部門においては、若者の参画のレベルはより高いものとなります。ローバースカウト部門では、若者の参画をより押し進めて、若者が評価や意思決定の最も重要な部分を担うことができるようにします（図1参照）。

図1：若者の参画からリーダーシップまで



若者のリーダーシップの成長は、カブスカウト部門では小さいながらも意味のある方法で始め、ボーイスカウト部門を通して成長を続けます。ローバースカウト部門では、若者がリーダーシップを発揮してすべての役割を果たすことができるようになり、成人指導者は単にアドバイザーとして見守ります。もしローバースカウトを活動的で責任ある市民にしたいのであれば、これは必要な原則と言うことになります。チーム・システムにおける様々な「機関」によるこの原則の結果を理解するようにしましょう。



## ローバースカウト部門のチーム・システムの要素

各々のローバースカウトはローバースカウトのチームに属しています。そこでは、自分自身の進歩や、活動やプロジェクトを実施したことのふりかえりと評価についてのサポートを得ることができます。ローバースカウトのチームは、活動とそのふりかえりを共に分かち合おうと決めた若者たちによって構成されます。

一般的に、ローバースカウトのコミュニティには3種類の小グループが見うけられます。

<b>パーマネント・チーム</b>	活動やプロジェクトを一緒に行い、経験を共有し、一緒にふりかえり、個人のプランを評価するローバースカウトのグループです。
<b>サービス・チーム</b>	ローバースカウトのコミュニティの外部で行われている活動に従事するローバースカウトのグループです。このグループは主に奉仕プロジェクトに従事します。ここでもまた、経験を共有し、一緒にふりかえり、個人のプランを評価します。しかし、パーマネント・チームのメンバーと一緒にローバースカウトのコミュニティの活動に参加します。
<b>タスクグループ</b>	ローバースカウトのコミュニティは、ある種の活動やプロジェクトのための特別なタスクを実行するグループを設立することがあります。このタスクグループは主に特別な活動のために編成されます。通常は短期間の設置です。非常に運営しやすい活動単位であるといえます。

## ローバースカウトのコミュニティ

「ローバースカウトのコミュニティ」とは、いわゆる「ローバースカウト隊」のことです。このコミュニティはいくつかのローバースカウトのチームにより構成されます。ローバースカウトのコミュニティは地元の団に所属して、18歳～25歳の若者にローバースカウトのプログラムを提供し、団内の各隊や地域の地域から参加した若者の要望に応えること、またローバーより年少のスカウト部門にとって憧れの存在となることが推奨されます。

しかしながら、ローバースカウト部門の加盟員数が少ないことを考慮すると、少なくとも第一段階において、すべての団がローバースカウトのコミュニティを作るということではできそうもありません。効果的なローバースカウトのコミュニティとするためには、少なくとも15人～20人のローバースカウトによって構成されなければなりません。

そのため、ローバースカウトのコミュニティは、ローバーのチームが1～2個あるスカウト団のいくつかが集まり、形成する場合も出てきます。ある県連盟では、ローバースカウトのコミュニティは地区に作られることがあります（主に、団にローバー年代のメンバーが非常に少ない場合）。

また、ローバーコミュニティは、複数の組織でコミュニティを形成することが多く、活動に責任をもつ者が不明確になりやすいため、成人指導者によるアドバイザーの支援を得ることを前提に、以下のようにすることが望まれます。

- 2以上の団にわたる活動は、主たる団が活動に対して責任を持つ。
- 2以上の地区にわたる活動は、主たる地区が活動に対して責任を持つ。
- 2以上の県連盟にわたる活動は、主たる県連盟が活動に対して責任を持つ。

※海外派遣においても同様に「参加者が2以上の県連盟にわたる場合は、主たる事業組織のある県の県連盟を通して手続きを行う」という基準が設けられています。

また、大学にローバーの集まりが作られることもあります。大学のローバーの集まりでは、様々な町からのローバースカウトが参加し、在学中もスカウティングとの関わりを持ち続けることとなります。逆に、大学ではなく、上京した下宿の存在する地域で活動している団に所属することもニーズとして出てくることも考えられます。こういった状況を補完するための仕組みとして、重複登録の制度を日本では設けています。

## 教育規程 2-6 重複登録

指導者が役職(※)に重複して就任する場合は、それぞれの役職に応じ、重複して加盟登録する。

②スカウトは、2つ以上の団に重複して登録することはできない。ただし、次の場合は2つの団の団委員長の承認を得て、重複して加盟登録することができる。

- (1) ベンチャースカウトが、暫定的ベンチャースカウト隊に所属しようとする場合
- (2) ローバースカウトが、暫定的ローバースカウト隊、大学ローバースカウト隊又は進学や就職等による住居の移転先地域にある団のローバースカウト隊に所属しようとする場合

※役職・・・県連盟・地区の役職員のことを指す。団の役務は含まない。

ローバースカウトのチームが孤立してしまわないよう、成人はあらゆる努力をするべきです。ローバースカウトのチーム同士の交流はチーム・システムを中心であり、他の人々と一緒に活動し、共に決定し実施することで、非常によい学習の機会を得ることができます。また、色々なことに焦点をあてて前述の様々なチームと交流することは、ローバースカウトの考え方や経験を広げる豊かな素地をもたらすこととなります。

ローバースカウトのプログラムをしっかりと発達させたいのであれば、ローバースカウトのコミュニティは重要です。次の表は、ローバースカウト6～8人程度の小グループでは、若者からのニーズのすべてに答えることはできないということを示しています。もし活動の多様性を求めて若者のニーズにしっかりと応えていこうとするのなら、例えばローバーコミュニティのような、より大きな構成要素が必要ということになります。このことが意味するのは、他の部門と同じように、ローバースカウト隊においても（小さなチームから大きなグループまで）グループ作りが重要であるということです。なぜなら、これらのグループには様々な役割があり、様々な教育のニーズを満たすことになるからです。

さらに、ローバースカウトのコミュニティを通じて、若者に対してより広い範囲での役割やリーダーシップを与えることが可能になります。（より大きなグループ形成から小さなものへ向かって）自治を促すことで、ローバースカウトは主要な責任を引き受けて、リーダーシップのスキルを高めることができます。それは成熟した社会人となることを見据えた時、基礎のスキルとなるものです。

	若者のニーズ	グループ構造	活動
基本	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 愛情を持ったり、共有したり、協力し合うことによって満たされる「帰属意識」</li> <li>● 選択することによって満たされる「自由」</li> <li>● 達成し認められ、尊敬されることで成し遂げられる「熟練度」</li> <li>● 笑いや遊び、様々な興味あることを行い、活動に取り組むことで成し遂げられる「刺激や楽しみ」</li> </ul>	チーム	チーム活動 発見 ふりかえり 気分転換 （野外活動、ハイキングなど） プロジェクト
応用	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分自身のニーズや可能性と能力を自己評価したい</li> <li>● より多くの知識と技能を得て、その人の潜在能力を最大限に高めることで自己を充足したい</li> <li>● 仕事や結婚などの個人の生涯プランを作成し、積極的に社会に参与し認められたい</li> </ul>	ローバース会議 (RCJ)	コミュニティ活動 議会と委員会の会議 ディベートとフォーラム 交流 訓練のためのワークショップ 個人計画の支援 奉仕

## ローバースカウトのコミュニティにおける集会

ローバースカウトのコミュニティにおける集会は、ローバースカウトのコミュニティのメンバー全員が集まって重要な決定を下す場となります。ローバースカウトのコミュニティにおける集会は以下の目的を達成するために、定期的（少なくとも四半期に1回）に開催されなければなりません。

- ローバースカウトのコミュニティ全体の状況を評価して、ニーズに合わせた活動を行うようにする。
- ローバースカウトのコミュニティの活動やプロジェクトについて決定する。
- 総体的な規則を決める。
- 各メンバーの成長を確認する。
- ローバースカウトのアドバイザーを選出する。

## ローバースカウト会議（ローバース会議）

ローバースカウト会議（ローバース会議）とは、ローバースカウトのコミュニティにおける意思決定機関となります。この会議体は、ローバースカウト・チームのリーダー全員により構成されます。ローバースカウト会議は定期的に行われます（少なくとも1ヶ月に1回）。会議では、ローバースカウトのコミュニティにおける活動の流れをまとめ、チームやタスクグループの作業を引き継ぎ、すべての運営や計画に関する決定を行います。

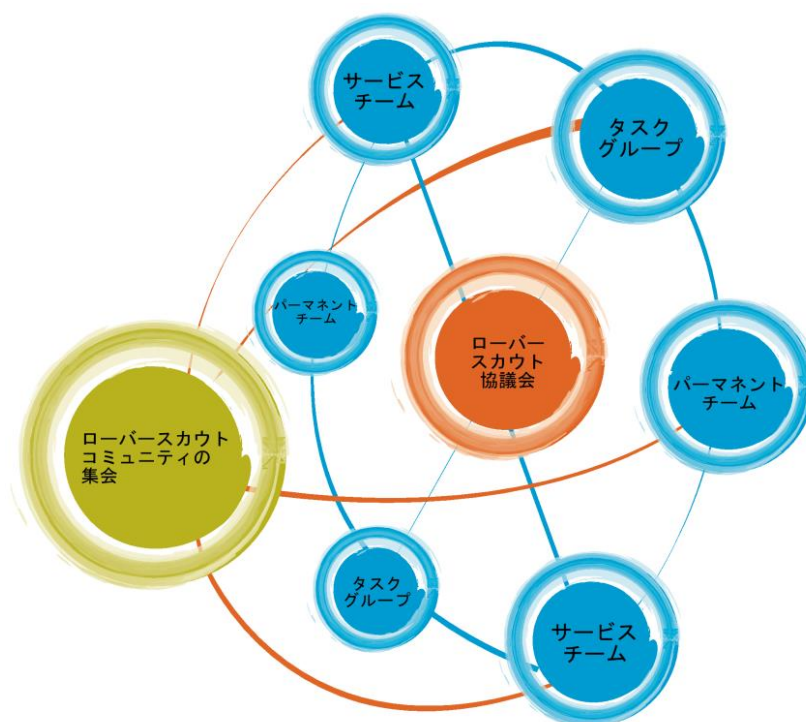
ローバースカウト会議の役割は非常に重要です。なぜなら、この年齢層のニーズや特徴を考える際、コミュニティにはその運営に影響を及ぼすような、以下のいくつかの特徴があるからです。

- いつでも、また状況によっては同時に、ローバースカウトのコミュニティ・ローバースカウトのチーム・タスクグループ・または個人によって行われる多様なプロジェクトや活動が存在する。
- ローバースカウトの中には、普段のほとんどの時間を個人の活動に費やし、ローバースカウトのチームからの支援を得たい時やローバースカウトのアドバイザーに相談したいことがある時だけ、ローバースカウトのコミュニティに戻ってくる者もいる。
- ローバースカウトの活動の中には、定例会議における通常のパターンにあてはまらないものもある。



全国ローバースカウト会議設立総会（2012年）

図2 ローバースカウト部門のチーム・システム



### ローバースカウト・チームのリーダー

ローバースカウトのコミュニティはローバースカウトにリーダーシップを発揮する機会を提供します。その任務としては、以下のものが挙げられます。

- チームのリーダーとして、チームを導いていく。
- タスクグループの調整役（コーディネーター）として、タスクグループを指揮する。
- 議長として会議の準備と運営を行う。ローバースカウト会議にも参画する。
- その他、コミュニティが実施することに関する役割

これらの役割は、チームのメンバーによって選ばれ、コミュニティの会議で承認されます。会議では、チームのリーダーを選挙にて直接選ぶことになります。

一部の県連盟・地区・団では、ローバースカウト部門の若者に責任あるポジションを任せない場合もあります。そのような場合、ローバースカウトはローバーより年下の部門に目を向け、そこで責任ある役割を見つけて、自身の価値とアイデンティティを証明しようとしません。

ローバースカウト部門におけるリーダーの責任は、ローバーより年下の部門における副長補等の補助指導者と同じくらいのレベルの、大きな責任を担うものでなくてはなりません。

### ローバースカウト・コミュニティのアドバイザー

ローバースカウトのコミュニティのアドバイザーには、すべてのローバースカウトに助言し、支援し、彼ら自身の遂行のための力を与えるという、具体的な義務があります。また、ローバー部門におけるスカウティングの使命を守る、という役割もあります。ローバースカウトのコミュニティのアドバイザーの役割とその姿については、後述します。

## 6. ローバースカウト部門におけるシンボルの活用

元々、B-Pがスカウティングにおいて若者に提案したシンボルの活用とは、「ローバーリング」のことでした。スカウティングの最終年齢部門をどのような名前にするとしても、シンボルの活用はB-Pの元々の「目的を持った旅」という考えを反映したものでなくてはなりません。

「ローバーリングとは 目的なしのさまよいだとは考えない。はっきりした目標をみつめ、愉快な道を進んで行くことだと私は意味づけている。そして、その道中には苦難もあれば危険もあり、君たちはそれに出会うものと考えてのことである。」

(日本語訳: *Revering to Success*日本語版 ボーイスカウト日本連盟 平成8年版)

ローバースカウト部門の目的は、スカウトが自分の可能性を自ら認識して、成人期に移行できるようにすることです。シンボルの活用としてのローバーリングは、スカウトが自身に課題を課し、自主性を備え、自分を高めるよう勧めている点で、今日の世界においても意味のあるものです。これによってスカウトは、他の文化やライフスタイル、視野といったものを発見し、広い世界において自身の経験を広げていく機会を得ることができます。

### シンボルとしてのローバーリングは青年の期待とニーズを満たす

スカウトが成人の役割に挑戦してみることができるようになったなら、ローバーリングはもはやシンボルとしての想像上の冒険ではありません。それは社会、文化、国家、民族の垣根といったものを結びつけて、社会的・専門的に活動を進めていくことを促進させます。そして、それは実生活における本当の冒険となっていくのです。

シンボルの活用とは、スカウト教育法にとって、取るに足らないものでも、非実在的な要素でもありません。それを意味あるものとするために、言い換えるとスカウト運動の教育の目的として伝えていくために、各年齢層におけるスカウトのニーズに深く適合させ、スカウトが関心を持ち、熱意を注ぐようにしなくてはなりません。さもなければ、ローバーリングを用いる効果はありません。

### 自分のアイデンティティを見つけ出し、自立していく

青春において、人生における自分の道を見つけることができるよう、スカウトは旅に出て独立する準備をしなければなりません。ローバースカウト活動は、このことの助けとなります。

旅に出るということは、スカウトが望む新しい自立のシンボルとなるものです。スカウトは自分の能力を試して、自身のアイデンティティを確立したいと望むものです。ローバースカウト活動は、このアイデンティティの探求を象徴するものです。スカウトは自ら進んでプロジェクトに乗り出していきます。それはスカウトにとって、自身のアイデンティティを見つけるための道となるのです。

### 世界を知る

様々な場所へと動き回るような時、ローバースカウト活動では、そのフットワークの軽さや、移動先で得たり見つけたりするすべての新しいものに注目します。また、ローバースカウト活動は、旅をして新しい事実や考え方を見つけないというスカウトの自然な欲求に沿うようにします。

実際、スカウトは旅をして、新しい場所を見つけ、異なる文化の人々に出会い、その人たちの生活、問題、望み、価値観といったことを知りたいものなのです。スカウトは、国際的な関係を知り、他の文化と交流して、世界の市民となるべく備えたいものなのです。多くの



伝統文化においてそうであるように、現代の社会において、スカウトは、自身の属する社会において成人としての役割を担い、一生を通じて進んでいく「航路」を見つける前に、知識と知恵を高めるため、旅に出ることを望みます。今日では、グローバリゼーションによって、それは新しい価値を帯びることになります。

## 役に立つと認められ、社会に貢献する

スカウトは社会における自分の居場所を見つけなければなりません。スカウトは、成人の役割を見つけて、演じたいものなのです。スカウトは、自分の能力を、友人たちからだけでなく、広く社会から認められたいものなのです。

ローバースカウト活動を通じて、ローバースカウトは新しい経験をし、「ツール」を得ます。これによってスカウトは、将来やって来るであろう難題に対して、備えることとなります。これらの経験とツールのお陰で、スカウトはより成熟し、能力を高め、社会においてより積極的な役割を担うことができるようになります。そういうわけで、ローバーリングは自身の能力開発と奉仕の象徴であると言えます。

スカウティングの目的は、人が積極的で責任のある、「よりよき市民」となるよう備えることです。スカウティングの最終段階として、ローバースカウト活動は、社会における積極的な役割を担い、その発展に貢献できるようにするにはどうすれば良いかを、スカウトに伝えるものでなければなりません。そして、これはまさに、スカウトが無意識のうちに捜し求めているものなのです。

## 人生の旅路における良い航路を選択する

青年は人生において、将来に向けての選択を行うステージにいます。選択とは、学業における選択、職業の選択、感情の選択（恋や結婚）のことです。ローバーリングは、人生において進む道を見つけるためのシンボルとなるもので、これによって自分にもたらされた様々な未来を認識し、その中から人生における最高の「航路」、最高の旅を選ぶことができるようにするものです。そういうわけでB-Pは、ローバースカウトとは先端が二股に分かれた杖を持っていて、それは様々な未来と、そこから「良い道」を選ぶ必要性を象徴している、と言ったのです。

## ローバースカウトのシンボルの活用は健全で、真実で、未来を指向するものです

スカウトは容易にシンボルの活用に引きつけられますが、そのことが危険である場合もあります。

ローバースカウトである「若者」の年代であることは、簡単ではありません。スカウトの中には将来に不安を抱き、どの道を選んだらよいか分からない者がいます。スカウトの中には非現実的で退行する世界に逃げ込み、その閉鎖的なグループの中で、一般社会では分かりづらい言語や儀式による価値観に基づく生活に逃げ込んでしまうことがあるかもしれません。それは、私たちが若者にそうなることを欲しくない価値観です（例えば、民主主義に反する権威や階級社会への服従、「論理的かつ構造的に考えること」ではなく魔術や不合理な思考に魅了される、といったことです）。このことは、中世のフィクションに基づくロールプレイ（「ダンジョンズ&ドラゴンズ」）の成功により説明できます。

『スカウティング・フォア・ボーイズ』の第7章で示されているような、中世のシンボルの活用（騎士のおきてや聖ジョージといった騎士道に基づく姿勢）を使用しないのには、いくつかの理由があります。まず第1に、これはB-Pがもっと若い年齢層、即ちボーイ部門に向けてのスカウトのおきての導入としたものであったから、ということ。第2に、これは西欧世界の価値観に基づいたものであって、日本の大多数の若者の期待やニーズには一致しないであろう、ということ。もし私たちがB-Pが示したローバースカウト部門のシンボルの活用を参照するのなら、単に「自分のカヌーは自分で漕げ」というイメージを用いるべき



です。このイメージは『ローバーリング・ツウ・サクセス』にて口絵として用いられ、B-P自身が次のように述べているからです。

「この絵はあなたの航海の成功をあらわすもので、そこには、当然出会うであろういくつかの大きな岩（暗礁）が描かれている。その岩や暗礁は、一見暗く見えるが、よく見ると明るい一面もあって、あなたがえらんでよいものがその暗さをこえて存在していることを忘れてはならない。だから、あなたが暗い岩角をぐるっとまわって漕ぐことができれば、暗礁はその明るい面をもあらわすのである。あなたは、その暗礁のとりこにさえならなければ、それだけでその明るい面を発見することになるだろうが、そうなるについては、漕ぎ方がじょうずでたくみにそこを通りすぎなければならぬ。私のこのことばはふたつのたのしさを意味している。いちばん暗い岩にこそ明るい面があるということ。消極的になって身を亡ぼすことなく積極的に成功に向かって進むならば、その報いがあるということである。次々と暗礁をよけて漕ぐならば、そのたびごとに「性格」がつくられる。そして、最後に幸福というゴールに到達することになるのだ。

（注意）大空の星を高くあおぎなさい！

君の車を空にひきあげよ

星を君の道案内にしなさい」

（*Revering to Success*日本語版 ボーイスカウト日本連盟 平成8年版）

したがって、B-Pによれば、ローバー部門のシンボルの活用とは『ローバーリング・ツウ・サクセス』である、ということになります。これによって、人生の旅を幸福に導くための道を見つけることができるのです。

ローバースカウトのシンボルの活用とは過去を向くものではなく、未来を指向するものです。それは若者にとって、今日の世界における現実がどのようなものであるかを知るための助けとなるものです。そしてそれは若者を、一般社会では理解しづらく、視野の狭いような言葉に閉じ込めることはないので、健全なものであるといえます。

## 自分のカヌーは自分で漕げ

シンボルの活用は、スカウト教育法において本当に重要な要素であるといえます。心に確かな目的を持って旅に出るというローバースカウトの元々の概念は、今でもスカウトに作用するものであるし、スカウトが自分自身で課題を設けるよう動機づけ、励ますものでもあるからです。

教育的なツールとして、シンボルの活用はスカウトが明らかになっているものにすぐに目を向けるようにすると共に、多くの新しい可能性を受け入れるように指し示します。また、それによってスカウトに課した課題や仕事を、冒険という雰囲気ですべて覆ってしまうこともあります。というのは、そうでないと、スカウトは退屈で面倒だと感じてしまうかもしれないからです。

例えシンボルの活用が理解されなかつたり過小評価されることがあったとしても、これは実際にスカウティングにおいて私たちが行っていることに価値を付加したり、教育的な質をもたらしたりするものなのです。

もし将来の選択肢を認識し、最も良い「航路」・最も良い人生の道を見つけるためのシンボルと見なされるのなら、ローバー活動に対して提案された元々のシンボルはその意味を持ち続けることでしょう。「航路」はまた、若者が旅をし、新しいものを発見し、新しい人に出会うことのシンボルと見なすこともできます。

こうしたことから、今でもローバースカウトに対して「自分のカヌーは自分で漕げ」と言いつづけられるのです。

## 7. ローバースカウトと高度な野外活動

自然における生活とは、自然と接触し、主に野外活動で展開する活動を指しています。

B-Pは「自然には、クラブ、研究所、神社仏閣の要素がある」と述べています。これはローバースカウト活動にとってふさわしい場所であるともいえます。

自然における生活はいつでも、主に体験を通じて豊かなものになります。自然によって人は自分の限界を探り、それを超えようとすることができ、また同じような体験を通じて、自分自身を守ることもできます。自然と共に生きるには、決断することが重要であり、実際の行動がどのような効果をもたらすかを理解している必要があります。自然において自身の能力を発揮して生き残ろうとすることは、大いにその人に力を与えます。自分の能力を頼りとすることができるようになると、そのローバースカウトに自信と自尊心が備わることになります。

キャンプにおいて、スカウトは生きるために不可欠なすべてのことを行わなければなりません。自分の進むべき道を決め、キャンプ場を選び準備し、食事を準備し、悪天候から自分を守らなければなりません。野外活動やキャンプ活動は、スカウトが共に作り、自身のスケールで小社会のすべての面を経験することができるので、スカウトはこうした活動を好みます。自然における活動は、スカウトをよりよき社会の一員として成長させる手法としては、非常に優れたものであると言えます。

より深いレベルにおいては、自然における生活は自然と天地創造の不思議を発見する方法となります。これによって、若者は「森羅万象における人の位置」を知り、精神的な面に近づくことができるでしょう。

自然の中でローバーがプログラムを展開するうえで直面している課題は多くあります。例えば、都会では自然が少ないのにもかかわらず、「自然での生活」を提供せねばならなかったり、屋内でITを用いて過ごすことが、非常に好まれる、という自然に対する無気力感があったり、という状況です。

とりわけこれらの課題に応じて、この項ではプログラムを検討するコミュニティのリーダーを対象に、スカウティングにおける環境教育の原則とねらいを理解することや、ローバースカウトのプログラムにおける自然と環境の重要性を理解できるよう、情報やアドバイスを与えることを目的としています。

ローバースカウトのプログラムを考えるにあたり、次のことに留意しなければなりません。

- 自然での生活機会を与える（自然に立ち向かう荒れ果てた地での冒険）
- 自然のすべての面から最善の要素を得られるよう、自然の概念を研究する
- 「スカウティングにおける環境教育の原則とねらい」に従う
- 環境教育と教育の目的を関連づける



(B-Pの文章より抜粋)

私はいま森に覆われた丘と急流でキャンプをしています。

天国は空の上のどこかにある漠然としたものではなく、あなた自身の心の中、そして取り巻くものの中にあります。

キャンプファイアによって、心は開き、大いなる考えと強い感情を得ることができます。

自然を学ぶことで、創造主が創った世界の一部としての、無限に対する問い、歴史に対する問い、微細なものに対する問いといったものの調和を図ることができます。

そこにあるものに満足せず、「なぜ」「どのように」を知ろうとしなさい。

まだ最初に過ぎないのに、人生において成功を収めることに望みを持つことができないなら、巨大なオークの木でさえ最初は地面に落ちた小さなドングリから始まったことを思い出しなさい。

成功するためには、忍耐は他のどの性質よりも重要なものとなります。

気むずかしい老人になると、私たちはかつては若者であったことを忘れやすいものです。

私たちが生きるべく神が下さったこの世界は、美と驚きに満ちています。そして光があり、見ようという気があるなら、私たちにはそれらを見ることのできる目だけではなく、それらを感じることでできる心までも授かっているのです。

## 自然と環境、スカウト教育法

「スカウト教育法の要素として考えると、自然はスカウトの成長に計り知れない可能性もたらすものであると言えます。」野外で生活し自然と接触することと、ローバースカウト活動の目的の間には、直接的な関係があります。

自然と野外での生活は、ローバースカウトの活動にとって理想的な枠組みとなります。これは、スカウティングにおける環境教育のための世界的な枠組みによって支持されています。

ローバースカウトは世界を旅して探検することで、自然がもたらす鮮やかなタペストリー（壁掛け）を見つけることができます。自然の様々な要素から最も多くのタペストリーを得る最善の方法は、他のローバースカウトと協力して体験を行うことです。

ローバースカウトにとって、自然の中での生活は刺激的で、価値のあるものです。冒険的な活動の範囲は、クリエイティブ力と資材次第でいくらでも広げていくことができるでしょう。確かに、ローバースカウトは、ローバースカウトのコミュニティの仲間たちや外部の人たちと一緒にあって、より高いレベルの冒険的なスポーツに挑戦しようとすることもあります。また、より高みを目指して、お互いに影響し合いながら、より挑戦的な活動に参加しようとすることもあります。こうすることで、自分が通る世界を見て感じることに時間を費やすことができる、という別の側面もあります。自然の環境に感謝し享受することを学び、大自然に対する愛情を育み、自然の理についてより深く学び、こうしたことに心を傾けることに時間を費やします。

スカウトにおける持続可能な成長とは、「将来の世代が求めるであろうニーズを満たす能力を損なうことなく、現在のニーズを満たす」ということです。

環境に対して積極的な行動をとることが必要になったことから、これまでの歴史で初めて、持続可能な環境開発に関与するという姿勢を高めることが、より重要になってきています。

最近ではますます若者が自然環境から遠ざかってしまっているため、ローバースカウト活動から得られる自然と人を繋ぐという活動の役割は、とても重要なものとなってきています。都市部の環境に生活している人の50%近くにおいて、環境の「より大きな絵」を取り入れることが重要になってきています。それは単に植物や動物と触れ合ったり、環境保護活動に取り組んだり、といったこと以上のことを意味しています。ローバースカウトは環境プログラムに活発に関わり、環境、人、そして社会について、情報に基づいた選択、それもスカウトの「ちかいとおきて」を反映させた選択をしなければなりません。



## 環境教育と教育的目的

自然における生活は、スカウトの成長におけるすべての分野において、教育の目的を高め達成するための理想的な環境をもたらします。

スカウトの身体的な成長のために野外での生活から得られる恩恵は分かりやすいものです。こうした活動によって、スカウトは座りつきになっているライフスタイルから解き放たれることとなります。ローバースカウトが自然に向き合って自己の限界を広げるよう挑戦することは、教育の目的を達成する助けとなります。野外での活動に時間を費やすこと、特に探検に出掛けることは、体力増強と健康増進に役立ちます。自然における生活は、特に最近ますます増えている都市部に住む人たちにとっては、自然界と関連するために不可欠なものです。というのは、こうした都市部に住む人たちにとっては、一人でハイキングに行ったり、カヌーで探検したり、高い山でキャンプをする、といった機会がほとんど無いからです。

おそらく、自然における生活が子どもや若者の知的な発達をもたらす可能性があるという事は、はっきりと分かってもらうことは難しいかもしれませんが、重要なことです。自然は子供や若者の限界を広げ、森羅万象における深い意味を見つけることができるようになります。特に動植物は、どんな子どもにとっても、観察し、発見し、探求する課題となるものです。この観察する、ということにより、スカウトは疑問を持ち、調べ、さらには自然界とその相互依存の面について本物の探求を行うようになります。最終的には、自然における生活の最高の段階として、五感を用いることによって目に見えないものに対する心の感受性と柔軟性を養うことができ、それによって創造性や独創力を培うことができます。

スカウトの心の成長において自然が教育的に重要であることは、見落とすことのできないものです。自然の美しさを経験することは、感情と感覚の発達を促します。自然の中でローバースカウトのプログラムを行うことは、静かで平和な状態からアドレナリンが分泌されるような意気揚々とした状態に及ぶこととなります。自然における生活を経験することを通して、ローバースカウトは感謝の心を持ち、環境への結びつきを高め、環境を維持し保護する気持ちを強くします。

自然における生活はスカウトの社会的な成長にとっても役立つものです。町にいれば、グループの問題は単にその場から離れて、家に帰ることで避けることができます。しかし、一旦自然の中に出たなら、問いかけをする必要も出てくるし、小グループはより強くはっきりした形のものになります。そして、そこにいる個人はより強い関係を結ぶこととなります。自然においては、商業的なものや「よそ行きの」飾りは忘れられ、技術や能力を示すことで尊敬を集めることができます。協力して現実の状況に向き合うことや、生きるためのニーズを満たすために協力して頑張ることは、グループのメンバーの間にまるで兄弟のような非常に強い「一体感」を創りあげることとなります。

自然はスカウトに対し、精神的な成長のための理想的な基礎をもたらします。自然における生活は、命がどれほど貴重ではかないものかを示し、世界のライフサイクルがどれ程もろいものであるかを私たちに教えてくれます。壊すことがどれほど簡単で、直すことがどれほど難しいかを理解することで、その価値を理解し、自然や他者に対する尊敬の念を高めることができます。自然や野外活動は、創造物やその中における人の立ち位置に対し感謝するという、大きな可能性をもたらします。人の信念や心情といったものは、自然の要素により高められた時、特別な意味を帯びるようになるものです。

B-Pは自身の概念を次のような言葉で要約しています。

**「自然を知ることは、神を知ることに第一歩となります。海や森、山といった自然と共生することで、謙虚さと畏敬の念を高めることができます。」**

道徳的な性格の成長は、時には我々の手で自分たちの生活を維持する自然の中での屋外の設定で、実用的で、かつ実際に影響しています。組織の大きさやどれだけ準備しているかに関係なく、常に何が起こるかを予測できるわけではないのに、それにもかかわらず対応する用意をしなければなりません。自然における生活において、スカウトは自然に立ち向かうこ

とになります。そうすることで、自分を理解し、自分と他の人々を尊重することになるでしょう。野外での生活では、スカウトは自然独特の状況に立ち向かうことになります。そこではお互いに信頼し、どのような行動が必要かを認識していることが必要になります。

「ローバースカウトは、若さという鉄を焼き直すために、野外という鍛冶屋を使います。しかし、野外活動はどのように性格を形作るのでしょうか？そうするためには、私たちの本当の姿をもって立ち向かうような状況を創らなければなりません。自然という鏡は、その人の本当の姿を映し出すものです。このように、私たちは自分の強さと弱さを知り、自分の強さを活用し、自分の弱さと向き合うことを知ります。」

したがって、自然と野外活動は、スカウト教育法において常に主要な役割を担うことになります。スカウティングにおける教育的なツールとして自然や環境を最大限利用することにより、私たちの方法論を現在のスカウトのニーズや希望に合わせて見直し続けることが必要になってくるのです。

スカウティングは地域社会に常に深く根ざしていなければなりません。スカウティングの役割は社会の質を高めることであるという考えは、B-Pの書き記したもののすべてに浸透しています。このことは、B-Pの「ラストメッセージ」に要約されています。

「この世の中を、君が受け継いだ時より、少しでもよくするように努力し、あとの人に残しなさい。」





## 8. ローバースカウト教育の目的と、個人の成長

---

あらゆるスカウトが自分の能力がどのぐらいなのかを知り、生産的に働き、自分の社会に貢献できるということは、一般社会でも共通する理想像であると言えます。

スカウティングにおける最終部門の若者と共に活動する際、ローバースカウト部門における教育の目的と個人の進歩に関して、プログラムを考えるコミュニティのリーダーが直面している課題がいくつかあります。例えば、明確な教育目的が定義されていないので、ローバー部門のプログラムと活動にインパクトがなかったり、ローバースカウトの教育目的がローバー以下の部門の教育目的とあまりにもかけ離れてしまっていて、ローバー以下の部門から見たローバースカウトに魅力を感じられなかったり、教育目的に基づいた個人の進歩は「体系化された」「アカデミックな」ものかもしれないが、それはローバースカウトにとっては魅力的に映らないかもしれない、今日の社会に生きる若者にとって、教育目的自体が意味のないものである場合などである。

### 個人の成長

---

ローバースカウトのプログラムは、ローバー以下の部門のプログラムのように構築してはなりません。というのは、ローバー年代の若者は規則というものに対して異なる反応をしますし、より「ゆるい」流動的な構造を好むものだからです。

しかし、個人の成長のためには、フレームワークをはっきりと定める必要があります。ローバースカウトは、スカウティングにおける累進的な道筋に沿って進歩するためにはどのような選択をしたらよいのかを、自分でコントロールできるでしょう。しかし、同時にローバースカウトを導き、成長させるために励ますための仕組みも必要です。

ローバースカウト活動における進歩は、成人期へと成長することに密接に関連していなければなりません。このことは、ローバースカウトは自分の人生のプランを立て始めていて、そしてそれがスカウティングにおける生活以上のものを含んでいる、ということの意味しています。

ローバースカウトが自分自身で立てる「個人の活動プラン」は、自分に合った方法で、ローバースカウト部門の教育目的を考慮するものになるでしょう。ローバースカウトの個人の活動プランは成長の6つの分野（身体的・知的・性格・情緒的・社会的・精神的）を考慮に入れてながら、定期的に見直しをしていくものです。

### 個人の成長における3つのステージ

---

ローバースカウトがより良く成長していくことができるように、「準ローバースカウト」、「正ローバースカウト」、「旅立ち」の3つのステージを設定します。準ローバースカウトではローバースカウトの制服を着用し、正ローバースカウトになったときには、ローバーを認識する記事を着用し、活動することになります。

#### (1) 準ローバースカウト ～ ローバーの責務と、その責務の理解 ～

---

若者がローバースカウトのコミュニティに参加する時、その若者はローバースカウトのメンター（後述）からの支援を受けて、自分自身の状況を評価し、自分の課題が様々な最終目的と一致しているかどうかを明確にするよう促されます。

準ローバースカウトとは、若者がローバースカウトであることの意味を考え、ローバースカウトとしてのちかいを立て、その責務に従うかどうかを考える時間であると言えます。同時に、若者は「個人の活動プラン」への準備を始めることになります。

「準ローバースカウト」から「正ローバースカウト」になるためには、各隊で定めた基準を満たすことでローバースカウト隊の仲間の一員として認められることが必要です。その過程において、先輩のローバースカウトから後輩のローバースカウトに対し、歴史やローバー

スカウトの活動内容などを学べる「セミナー」といった教育を行うことは、関係するすべてのローバースカウトが成長するための、大いに効果的な機会となります。特に、先輩スカウトが自分たちの活動の利点を後輩スカウトに伝えるために検討をすることは、自らの活動の評価反省にもつながり、さらにより良い活動を見いだすきっかけとなることが多いです。

## (2) 正ローバースカウト ～ローバースカウト部門における生活～

---

ローバースカウトが自分自身で立てる個人の活動プランは、成長の6つの分野（身体的・知的・性格・情緒的・社会的・精神的）を網羅した教育目的を取り入れたものとなります。

すべてのローバースカウトは、少なくとも一年に一度は自分の個人の活動プランを再評価し、見直して更新します。このことは、ローバースカウトがローバースカウト・コミュニティでの生活を送る間、何度も自分の個人の活動プランとすべての目的を「見直す」ことを意味します。これを行う時期については、人それぞれ異なるので、各々のローバースカウト次第、となります。

ローバースカウトが自分の個人の活動プランを通じてこの部門のすべての最終目的を達成したなら、それは「旅立ち」のステージに移行する時期であり、自分の生涯プランを示す時となります。

## (3) 旅立ち ～人生のプランとローバースカウトからの旅立ち～

---

ローバースカウトが自分自身の活動プランの大部分を成し遂げたとの評価を得られたら、それはローバースカウト部門から旅立つ準備をするときが来たということです。このことは、スカウティングでの活動を通じて学んだすべてのこと、そしてこれから将来に向けて自分が達成したいすべてのことを知るのに役立つ「自分の生涯プラン」を含むことでしょう。

ローバースカウトからの旅成ちは、ローバースカウトとしての経験が終わったということを示すセレモニーとなります。ローバースカウトのコミュニティにとっては、ローバースカウトに対する信頼と支援を示す場となります。ローバースカウトはスカウティングの活動から、常に大切に何かを「記念品」として受け取ります。

ローバースカウトから旅立つということは、スカウト運動のプログラムの質を評価する具体的な方法となります。この質は、スカウト運動に参画した若者の数ではなく、社会の発展に寄与する意思と技術を持った若者がローバースカウト部門から毎年何人旅立つか、によって測られることとなります。

## 個人の持つ課題、個人の活動計画、個人のタイムライン

---

ローバーのスカウティングは個人が選択して行うものです。ここでは、個人の成長を可能にするいくつかの方法を提示します。

### 個人の持つ課題

---

ローバースカウト部門の性格上、他の部門に比べてその最終目的が広範囲にわたるので、各々のローバースカウトがそれぞれの目的に応じた個人の課題を定めることができるよう支援しなければなりません。

その名の通り、個人のもつ課題は何か個人的な事項を含んでいなければなりません。そして、メンターの支援を受けたそれぞれのローバースカウトによって定められ、作成されなければなりません。個人のもつ課題は、ローバースカウトがより良く理解し、目標に向かうための具体的な方法を作り出すことができるような任務または活動の形を取ります。学ぶということは、活動そのものよりも、各人が参加するという経験から得られます。そのため、個人のもつ課題がいつでも予想した結果になるわけではないということは、心に留めておく価値があります。

メンターの役割は「コーチ」に似ています。これは、ローバースカウトが自分で定めた目標についてよく考え、課題が何であるかを明らかにし、課題に対処するための活動は何であるかを明らかにし、その進捗状況を把握するのをメンターは支援するからです。各々のローバースカウトは自分の成長のためにメンターを選ばなければなりません。メンターは、ローバーのグループにいるローバーアドバイザーやローバーのコミュニティにいる誰かによって担われます。

### <個人の持つ課題の例>

	教育目的	個人の課題
身体的	自分自身の身体を維持するために、自然と触れ合うことの恩恵が何であるかを知り、運動を行う習慣を身につけ、良い衛生状態、良い栄養状態を保つようにする。	定期的にスポーツを行う。
知的	自分自身の適性（可能性と興味）を考慮に入れて職業を選ぶ。その他についても偏見なく尊重する。	自分の可能性、適性、興味を分析して、自分の将来の職業について、より正確な計画を作成する。
性格	公明正大で、誰もが参加でき、協力し合えるような社会を作ることができるよう、自分の地域のコミュニティに奉仕する。	自分のコミュニティにおいて人種差別の撤廃に向けて活動しているグループの活動に積極的に参画する。
感情的	性に関する関心と愛情表現を知り、尊重し、受け入れる。	愛と性の関係について更に学ぶ
社会的	自分の自由および他の人々の自由について関心を持つ。権利を行使し、義務を果たし、他の人々の権利を守るとはどういうことかを理解する。	自分の権利と他人の権利を擁護するための主張ができる。
精神的	信念を厳しく守り、信仰を明確にし、信仰により生じる義務を受け入れることにより、信仰に忠実であること。	信仰に関してより深く自分自身の信条と責務を理解できるよう、自身の経験をふりかえり反省する

### 個人の活動計画

個人の活動計画とは、ローバースカウトにとっては体系的で個人的な方法により自分自身の目標を定める機会となります。個人の活動計画は様々な形を取りますが、どれをとっても成長の分野で達成すべき個人の課題を含むものでなければなりません。そのため、個人の活動計画とは、自己の成長を高めるツールでもあるのです。

変化から学び、将来を変化させるのです。

ローバースカウトにとって、個人の成長は将来を形作るための方法となります。この過程におけるローバースカウトのメンターの役割は、次のようになるでしょう。

1. ローバースカウトが自分自身で明確な個人の課題を設定することができるよう、ローバースカウトのプログラムにおける教育の目的を調整する。
2. 過去、現在、未来は連続したものであることをローバースカウトが理解できるようにし、自分の能力を信じることで将来に影響を及ぼすことができるようにする。
3. ローバースカウトが自分の「個人の活動計画」を作成しふりかえるのを支援する。
4. ローバースカウトが自分の生涯計画について考え始めるよう支援する。

タイムラインに従って、成すべきであると分かった課題を達成することができるよう、ローバースカウトが達成すべき必要なステップ、活動、プロジェクトを計画するようにしなければなりません。

## 個人のタイムライン

個人の活動計画をまとめることができるようにするために、ローバースカウトが自分の将来にどのような可能性があるかを理解していることは重要です。

過去の経験が現在を形作っていることに気付くことなく、更に重要なことにこれからの未来をコントロールすることができるということに気付くことなく、若者が現在ある時のみに生きている、ということは良くあることです。

変化を引き起こすことで自分にとっても自分が住むコミュニティにとっても良い結果が得られるようにするために、ローバースカウトは自分がどのようになりたいか、そのためにはどのような行動が必要か、というビジョンを持っている必要があります。あらゆる行動は、望む目標に向かって小さなステップを積み重ねていくことで達成されるものです。

時には全く手に負えない状況になってしまうので、自分が望む未来をつくるということは、いつでもできることではありません。しかし、実現に向かって必要なステップを踏んでいくことで、望む未来に近づいていくことはできるのです。

ローバースカウトは自分の未来に向かって、受け身ではなく、率先して行動しなければなりません。ローバースカウトには、自分の人生をどのような方向に向け、それを実現するためにどのようなステップを踏めばよいかを教えてくれるメンターが必要です。ローバースカウトにとって、自分自身の強さと弱さを知り、何を達成すべきかを決め、そのための短期および長期の目標を設定することは、本当に助けになります。同時に、自分の人生は常に完全にコントロールできるものではないことを知ること、そして、それゆえ「可能性がある」未来を思い描くことが重要となります。

ここに、考えられる3つの未来を示します。

1. いまある状況が私たちの未来を形作っていくにつれ、「起こりそうなこと」はおそらく起こることになるでしょう。
2. 自分自身で決められることは実現できる可能性があり、その実現に向かって進んでいくことができます。
3. 夢に向かって進むことは好ましく、私たちはそれを目指して努力することができます。しかしそうするためには現実を見なければならぬ必要があるし、また実現できないものであるかもしれません。

## ローバースカウトの成長を記録するためのツール

ローバースカウトは、個人の成長を評価するために何かしら記録することは非常に有用です。ノートに記録することもありますし、WEB上で記録するツールの場合もあります。ローバースカウトの成長記録の目的は、ローバーの選択と行動の記録をまとめることにあります。

ローバースカウトの成長記録は、以下の内容を含むことが望ましいです。

- ローバースカウトのプログラムの最終的な教育の目的
- ローバースカウトが選んだ、個人のもつ課題に対する各々の最終目標
- ローバースカウトの個人の活動計画
- 課題に対処できる活動；個人の活動やプロジェクト（ローバースカウトのコミュニティの外で計画された、チームやコミュニティの活動やプロジェクト）
- 個人の計画のために必要なリソースや技術、そしてどこに行けばそれを得られるかというアイデア。
- 個人の計画を導くための活動計画を示したカレンダー（タイムライン）
- ふりかえりと評価についてのメモ

個人の成長は、自分自身の成長に意識的に・活動的に関わるよう、それぞれの若者を支援することに特に焦点をあてています。成長のための計画は、スカウト教育法においてこの要素を支援するための主要なツールとなっています。知識、技術、姿勢に基づき確立されたロ



ローバースカウト部門の一連の教育目的に基づき、ローバースカウト部門が終わる頃には、若者が様々な分野において合理的に成長しているようにしようとしています。

個人の成長は、スカウトを支援して、自分自身が成長するよう気持ちを高めたり、ローバースカウト部門の教育目的が示す方向に向かって自分のペースで進んでいけるようにしたり、自分がどのような進歩を成し遂げたのかが分かるようにします。

ローバースカウト部門における個人の成長は、次のことに基づいています。

- ローバースカウトのメンターの支援を受けて、それぞれのスカウトが最終目標を達成できるよう、個人の課題を明確にする。
- これらの課題に合わせて考えられた様々なプロジェクト、活動、役割を通じて、個人の記録（タイムライン）の支援により、個人の進歩の道筋—個人の計画—を設定する。
- ローバースカウトのメンターだけではなく仲間やローバースカウトのコミュニティの外にいる人からも含めて、どのくらい成長したかを評価してもらう。
- 生涯計画を作成することに向け、様々な個人の活動計画を通じて個人の目標や課題の達成を見える化できるようなシステムを用いる。
- 段階的にライフプランを作成する。それは個人のアイデンティティの鍵となる要素であり、ローバースカウトの「旅立ち」のセレモニーにてコミュニティにおいて完成され、共有される。





## 9. ローバースカウトを支援する成人

ローバースカウト部門における成人の役割とは、ローバースカウトを指導するのではなく、支援することです。スカウトがもつ人格のすべての分野における可能性を完全に引き出し、自主的で、頼りになり、責任感があり、献身的な人間になるように支援します。B-Pが述べているように、それぞれの若者は自己の成長という舞台において主演俳優となるべきなのです。B-P卿は「自己学習」という概念を強調しています。これについては、スカウティング・フォア・ボーイズで次のように述べています

「自己学習 つまり、先生から強要され指導を受けるよりもはるかに、独学や自分自身で学んだことのほうが 過ぎてから身になっていたことが分かる。」

ローバースカウト個人の成長を考える際、ローバースカウト部門を支援する成人には2つの目標があります。1つは、各々のローバースカウトが、適切な時期に、適切なレベルの自己学習ができるようにする、ということです。そのためには、ローバースカウトが各々の成長のために必要なものは何かを理解できるようにします。また、これらのニーズはローバースカウトのプログラムを通じて満たされるようにします。2つ目は、ローバースカウトのグループが共同で作業を行う際、前向きで魅力的な環境にて行うことができるように支援することです。

成人がローバースカウト部門を支援する際に鍵となるのは、対等なパートナーとして自発的なパートナーシップを築くことにあります。スカウティングは若者のための運動として知られていますが、実際には「成人の支援を受けた」若者のための運動なのです。

日本におけるローバースカウト部門に対する成人の支援においては、いくつかの課題に直面しています。それは次のようなことです。

- ローバースカウト部門よりもローバー以下の若い部門に焦点をあてるようになった。その結果、成人の人材がローバーより若い部門に優先して割り当てられるようになった
- ローバー以下の部門で指導者が不足しているため、ローバースカウトに隊長や副長といったリーダーの役割を担ってもらう必要がある
- どのようにローバースカウトを支援するかを再定義、あるいはローバースカウトを支援するための成人をどのように訓練するかを再定義しなければならない
- 若い加盟員の（部門間の）連携に適切なバランスが取れていない。それによって、例えばプログラム作成といった意思決定、さらにはスカウティングのすべての面に、ローバースカウトが十分に参画できていない
- 目まぐるしく世界が変わるので、青春期から成人期への移行のあり方も変わってしまった。そのため、成人の支援のあり方も現在のニーズに合わせて再定義する必要性が出てきた
- ローバー部門の加盟員数が減少している

このような課題に応じて、ここではローバー部門における成人の役割、どういった成人が支援すべきか、ローバー世代間とのコミュニケーション、ローバー部門における成人のサポート、ローバースカウトがスカウト運動におけるプログラムの最終段階であることの重要性について説明いたします。

## ローバースカウトと成人の支援

---

スカウティングにおける各部門において、それぞれ成人が担う役割は異なります。これは、それぞれの年代の特性や能力が変わってくるからです。ローバー以下の部門では、スカウト教育法によって、意思決定にどんどん参画するよう促されます。ローバースカウト部門では、リーダーシップを発揮するポジションを、ローバースカウト自身が担うことになります。すなわち、成人のアドバイザーやメンターの支援のもと、ローバースカウト自身がすべての責任あるポジションを担う、ということです。

ローバースカウトのコミュニティにおける成人の役割とプロフィールは非常に具体的で、ローバー以下の部門での役割とは異なるものになります。そういうわけで、「成人」を「アドバイザー」と呼ぶのです。

アドバイザーとはローバー隊全体を支援する成人のことで、これから述べるように様々な役割を担っています。そのうえ、それぞれのローバースカウトは、これから述べるように、メンターという自分を支援してくれる人を持つべきです。ここで注意点として、「アドバイザー」と「メンター」という言葉は、成人の役割を示すために用いられている、ということです（ローバー部門においては、リーダーの役割を担うのは若者です）。

アドバイザーとメンターは若者の盟友と見なされるでしょう。というのは、若者を引っ張ったり押し下したりするのではなく、成人期に向かう道において若者の傍らにいる存在だからです。そのため、スカウティングにおいて築かれる世代間の関係は、ローバースカウトにとっては非常に広範囲にわたって有益なものとなります。成人にとっても、ローバーのコミュニティに参加できる非常に幸運な成人、ということになります。

## アドバイザー ～チーム支援とローバースカウトのコミュニティのファシリテート～

---

### アドバイザーの役割

---

アドバイザーの役割とは、ローバースカウトがローバーのコミュニティや活動におけるチームを作ること、そしてそれを維持していくことを支援することです。アドバイザーは、ローバースカウトのコミュニティ、そしてすべての教育的な要素によって示されるフレームワークにおいて、方向性を指し示す存在でなければなりません。

しかし、アドバイザーには、「学習組織」としてのコミュニティが、活発に機能するようにする役割もあります。

アドバイザーの役割は、次のようなものです。

- それぞれのローバースカウトが個人の課題を認識し、個人の計画を立てることができるようにする
- スカウトの視野の拡大、活動、責任感の枠を広げる
- それぞれのローバースカウトが個人の活動、チームの活動、コミュニティの活動に参画できるようにする
- スカウト個人に対してトレーニングの機会を提供する
- ローバースカウトが成長し、自分の限界を超えることができるように促す
- それぞれのローバースカウトが自身の成長を評価し、自分自身の可能性に気付くように支援する
- メンターと連携する

## アドバイザーの責務 ～スカウティングの使命に対する責任を持つ～

---

### スカウティングの使命に対する責任がある

ローバースカウトのアドバイザーは「スカウティングの使命を守る者」であり、スカウティングの使命に対する責任があります。アドバイザーは、ローバースカウトのコミュニティがスカウティングの基礎となるもの（原則、ねらい、教育法）に基づいて機能し、スカウティングの使命（以下に記載）を実行することができるようにします。

「スカウトの「ちかい」と「おきて」に基づいた価値体系を通して、人々が個人としての資質が発揮でき、社会において建設的な役割を果たすことができるような、より良き世界を築く手助けとなるよう、若い人々の教育に貢献することにあります。』

### スカウトの価値の例を設定する

ローバースカウトのアドバイザーは、ローバースカウトに対し、スカウトであることの価値を示し、推進するようにします。つまり、あるスカウト、あるチーム、あるコミュニティがスカウティングの原則と価値を忘れてしまっているような時には、アドバイザーは躊躇することなくローバースカウトに疑問を呈するようにする、ということです。

## メンター ～個々のローバースカウトを支援する～

---

ローバースカウトのメンターには、個々のローバースカウトを支援するという役割があります。メンターとは、ローバースカウトが自分自身で選択することができるようにする人のことです。そのため、「自分自身で選択すること」に含まれる自発的な性質に基づくパートナーシップを強調することになります。また、ローバースカウトのニーズや希望によっては、メンターは必ずしもスカウティングに関連した経歴を持っていない人でも構いません。

ローバースカウト・メンターの役割は次のようなものです。

- それぞれのローバースカウトが個人の課題を認識し、個人の計画を立てることができるようにする
- スカウトの視野の拡大、活動、責任感の枠を広げる
- それぞれのローバースカウトが個人の活動、チームの活動、コミュニティの活動に参加できるようにする。
- スカウト個人に対してトレーニングの機会を提供する。
- ローバースカウトが成長し、自分の限界を超えることができるように促す。
- それぞれのローバースカウトが自身の成長を評価し、自分自身の可能性に気付くように支援する。

場合によっては、同時に複数のローバースカウトに対してメンターの役割を担うこともあります。

## 対等な協力関係

---

ローバースカウトと成人の連携は、それぞれ相手が持ってきた価値を認め合うという基礎のうえに成り立っています。

ローバー以下の部門とは対照的に、ローバースカウトは様々な点で成人と対等の立場にあります。青年発達上の精神医学における権威によると、主にローバースカウトは成人から対

等であると見なされる必要がある、とのことです。本当のパートナーシップを築くためには、メンターになろうとしている成人は、若者全般、特にローバースカウトに対する態度をどのようにするかを考える必要があります。

以下は、ミシガン大学のバリ教授の記事“Adults as Allies”（盟友としての成人）からの引用です：

若者と上手に付き合っていくには、アダルトイズムの存在に全面的に向き合っていくことが必要です。（訳者註：「アダルトイズム」とは、子どもや若者には価値がないので、子どもや若者の力を信じないし、尊重しないという思想のこと）。アダルトイズムでは、成人は若者よりも優れているので、様々なことを若者の合意無しに行ってもよいという仮定から、すべての態度や姿勢が生じることになります。

囚人や施設に収容されているグループのような場合を除いて、社会のどのグループよりもこの思想に影響されるのは若者の生活です。加えて成人は、「しつけ」のためには有益で必要であると考えた時には、若者を罰し、脅し、打ち、追い払う「特権」を持っています。

もしこれが成人のグループに対する扱いの説明であるならば、社会は直ちにそれを抑圧であると認めるでしょう。しかしながら、成人は一般的にアダルトイズムを抑圧とは考えません。なぜなら、自分たちが若い頃にはそのように扱われていたからです。つまり、この過程は成人の思考に内在化してしまっているわけです。

アダルトイズムの本質は、「若者が尊重されない」ということです。若者は重要ではなく、ある意味では成人よりも劣っている、とされます。若者が正しく成長するとは思われていないので、若者は教えられ、しつけられ、引き具をつけられ、罰されることで成人の世界に導かれるべきだ、となるのです。

次に示すような物言いが、どれほど失礼なものかを考えてください。こうした物言いの背後にあるものは何か？こうした物言いを若者はどのように聞いているか？

- 「15歳にしては頭が良いね」
- 「いつからそんなに偉くなったんだ？」
- 「自分の部屋に行け！」
- 「この年になってまだそんなことをしているの？」
- 「何を知っているというのだ？」
- 「まだ何も経験していないだろう！」
- 「そろそろいいだろう。卒業しても良い頃だ。」

その振る舞いが「アダルトイズム」かどうかを見分ける簡単な方法があります。次の問いを考えてみることで。

- 「私は成人をこんな方法で扱うだろうか？」
- 「私は成人に対してこんな口調で話をするだろうか？」

若者を解き放つには、成人の積極的な参画が必要になります。まず初めに、現在の成人が子供の頃や若い頃どのように虐げられ、低く評価されていたかを考え、理解しましょう。そして今日、成人として、どのように行動すればよいのかを考えましょう。

ローバースカウトのアドバイザーは、ローバースカウトの考えや能力を、純粋に尊重しなければなりません。そして、そのことを絶えず明白に示さなくてはなりません。会議においては、アドバイザーの役割として、グループのすべてのメンバーからアイデアを引き出し、真剣に扱い、引き立て、ローバースカウト自身で決定できるようにします。活動においては、アドバイザーの役割として、一歩引き下がり、若者が活動し決定を下すことができるようにします。しかし基礎的な情報は与えて、ローバースカウトが情報に基づいた決定ができるようにしないとなりません。

こうしたことは、大多数の成人にとって、容易なことではありません。大多数の成人は気付くことなく、権威的な役割を果たす状況に陥ってしまうのです。成人は、自分たちの意見や行動様式が、無意識のうちにローバースカウトのそれよりも優れたものであると考えがちです。ローバースカウトのアドバイザーはこうしたパターンにはまってしまわないような存在でなければなりません。

## ローバースカウト・アドバイザーとローバースカウト・メンターに対する責任

ローバースカウトのアドバイザーとメンターは、スカウトのリーダーシップを開発する過程を通じて、スカウトにスキルを与えることができます。ここでいう過程とは、若者の長所を伸ばすものであり、若者の力を得なくしたり、若者への不平等といった状況に対しても立ち向かうことができるような経験を得ることができるようにすることです。

### 青年にスキルを与えるようにするには

(“Adults as Allies” (盟友としての成人) からの引用：)

成人は若者に力を与えることができるでしょうか？一般に、力を与えるということは、ある人やコミュニティが他から力を与えたり、力を得たりする過程のことをいいます。こうした概念に於いて、力とは人やコミュニティの外から生じるものであり、他から受け取ったり取ってきたりするものです。力を与えるということについて別の見方をすると、力とはあらゆる人やコミュニティに於いて現存しているか、潜在的に存在するもの、ということになります。常に、力を与えられる別の人あるいはコミュニティが存在する、ということなのです。

しかし、人にとって、鍵となるのは、その人が既に持っている力あるいは潜在的な力を認識する、あるいは作用させる、ということです。

次の話を考えてみましょう：『オズの魔法使いで、臆病なライオンは魔法使いに勇気が欲しいと頼みました。結局、魔法使いはライオンにリボンを与えます。このリボンが勇気を表しているというのです。ライオンがこのリボンを見ると、ライオンは自分に力があると信じます。ライオンがこのように感じることで、勇気ある行動を取ることができます。しかし、魔法使いは言いました。「人はいつでも私に、自分が既に持っているものを欲しいと尋ねてくる。私には人がなぜそうするのが分からない。」』

青年に力を与えるという概念は、ローバースカウトのコミュニティにおいて成人の支援をどのように展開すればよいかを理解するための、中心的な要素となります。青年に力を与えるということは、必要な技術の習得を始めるスカウティングの最初期から、若者が経験し始めるべき過程となります。

「青年に力を与える」ということを可能にするためには、公平で、民主的で、秩序ある、平和な環境が必要になります。このことは、若者から話を聞き行動する前に、受け身の姿勢で安定するのを待っている、という意味ではありません。安定している状態は、青年に力を与えることを実践することにより作り出すのです。必要なことは、若者の長所と短所を理解し、若者が必要とする技術を高める機会を得られるようにすることです。

各コミュニティ（地区や県連盟）では、実際には見せかけの行為を行っているに過ぎないのに、青年の参画や青年に力を与えることを実践していると信じている場合もあります。

あらゆるローバースカウトは、参画し貢献する力を、潜在的に持っています。ローバースカウト・アドバイザーとローバースカウト・メンターはローバースカウトに対し、自分たちがこうした力を持っている、ということに気付くことができるようにしないとなりません。

しかしながら、例え現代の若者であっても、特に若い女性や少数民族、少数文化の人々の場合、この潜在的な力に気付く機会が全く無い場合があります。それどころか、若者は成人と違って価値がないと言われていたり、自分で決める権利を与えられていなかったり、両親の言いなりになっていたり、罰されたり虐待されていたり、法的な権利が制限されている、といった場合すらあります。したがって、若者には参画する力があり、違いをもたらすことができるのだ、ということを知者に気付かせるための、積極的な努力が必要なのです。



ローバースカウトのアドバイザーとメンターの役割は、若者が活動する過程を通じて、スキルを与えられるように支援することです。

## リーダーシップを高めるために

リーダーシップを高めるための鍵となる要素として、ローバースカウトのアドバイザーやメンターが提供できるものには、次のようなものがあります。

### 関係を育む

他の人々をより良くする前に、まず自分自身をより良くすることが必要です。人は自分を愛してくれる人から、最も良く学ぶことができます。人がより良く成長していくためには、例えばメンターや友人、カウンセラーといった、私たちに励まし支援してくれる人が必要です。

### その人の可能性を見つけ出す

リーダーシップの可能性を示すものが何であるかは、しばしば明らかではありません。時には、とても活動的なリーダーにマイナスの要素があり、そのことがその人を優位な状況に立たせることもあります。遠慮がない、人気がない、断定的でない、といった性質が、より良い可能性を示すこともあるかもしれません。

### 成果を強調する

若者が隊のために行う任務は、重要で見に見える結果を示すものでなければなりません。ローバースカウトのアドバイザーは、隊からはっきりと認めてもらえるような、高い水準の達成項目を提供しなければなりません。

### リーダーシップを高めるのを支援するための仕組みを提供する

ローバースカウトのコミュニティは社会の縮図であり、そこには様々なリーダーシップを発揮する役割があります。ローバースカウトのアドバイザーとメンターは、成人として指導と支援を行います。

### 学習の機会を提供する

ローバースカウトがローバースカウトのコミュニティにおいて経験することは、ローバースカウトのチームリーダーとなるために必要な技術を高めるのに役立ちます。そうした経験には次のようなものがあります。（建設的に考える、計画する、まとめる、運営する、目的を定める、アクションプランを策定する、報告する、等）

### 活動の範囲を広げる

リーダーシップを高めるということを、スカウティングで経験することのみに限定してはなりません。リーダーシップを育むためのトレーニングは、スカウト運動を離れたところ、例えば学校や大学、職場、そして社会に奉仕する場といった、そうした場所でもリーダーシップを発揮できるように提供されなければなりません。

### 真に世界的な問題に関わる

地域社会の問題は、何らかの形で世界的な問題の何かと関連し、影響を及ぼしているものです。同時に、世界的な問題が地域の問題に影響を及ぼしている場合もあります。若者は、この繋がりを見つけなければなりません。そこで、若者の視野が自分のコミュニティに限られてしまうことがないように促すことが必要になります。身近なことから経験を始めたとしても、その視野は周囲の垣根を越えていくものでなければなりません。スカウト運動の国際的なネットワークを用いることで、この目的を達成することができるでしょう（スカウト・オブ・ザ・ワールド・アワードや、国際的な合同プログラムといったものが役に立ちます）。

## ローバースカウトのアドバイザーまたはメンターになる人の要件

ローバースカウトのアドバイザーとメンターの役割は、要求される事項がとても多いです。若者が自分の潜在的な能力に気付き、人生における自分の道を見つけることができるようにすることは、副次的な任務では役に立ちません。そのため、ある種の性質を持った成人の要件が必要となります。

ローバースカウトのアドバイザーやメンターになろうとする人は、男性でも女性でも、ある程度の人生経験を積んでいなければなりません。アドバイザーもメンターも、青春期の課題や問題を解決しなければなりません。アドバイザーもメンターも、夢を失なったり楽観的になることなく、成功も失敗も経験していることが必要です。人間関係についても、有益な経験をしていなければなりません。

またすべての県連盟において、ローバースカウトのアドバイザーやメンターになろうとする人に対する適切なトレーニングと支援を提供する責任があります。

### 精神的にバランスが取れており、成熟している

ローバースカウトは人生においてある種の課題を抱えています。スカウトは感情の問題、落ち込み、薬物乱用、危険な行動といった、難しい状況に直面することもあります。そのような場合、若者は自分に向き合ってくれる成人を必要とします。そうした成人は、パニックに陥ったり攻撃的に振る舞ったりすること無く若者に向き合えるよう、十分にバランスの取れた、成熟した大人であることが必要です。

### 成人のコミュニティにおいてしっかりとした立場を確立している

ローバースカウトのアドバイザーもメンターも、スカウトが個人の計画やチームや隊のプロジェクトを実施する際に必要とするすべての知識や技術を備えているわけではありません。そこでその役割をしっかりと果たすためには、ローバースカウトのアドバイザーもメンターも、成人のコミュニティにおいて広い人脈を持ち、必要なアドバイス、リソース、専門知識を見つけることができるようにします。そうすることで、スカウトは活動を成功させることができるでしょう。

### スカウトとコミュニケーションをとることができる

多くのスカウトは、自分の家族や、学校や大学、職場において、成人との人間関係の難しさを経験するものです。そうした中で、ローバースカウトのアドバイザーとメンターは、若者との間に信頼に基づいた前向きな人間関係を築くことができなければなりません。ローバースカウトのアドバイザーもメンターも、若者からの人気取りに陥ることなく、若者の支えとなり、時には苦言を呈することもしなければなりません。

アドバイザーもメンターも、自分に備わっていないのに、すべての性質や技術があるように見せかけてはなりません。アドバイザーもメンターも、若者に対して誠実であり、自分の欠点を認め、知識や技術がない場合にはそれを認め、問題を解決するための新しい方法を探して若者と協力することができなければなりません。

### 技術を高めるためにより多くのことを学ぼうとしている

最後に、ローバースカウトのアドバイザーとメンターは、生涯を通じて学ぶようにすることが必要です。アドバイザーやメンターは、社会の傾向や若者に影響を与える問題に応じて、知識を高めるようにするべきです。

アドバイザーやメンターは、若者に合わせることができ、スカウト教育法を実施するための教育の技術や能力を高めることができる方法で、若者のニーズや性質について積極的に学ぶようにするべきです。アドバイザーやメンターは、他の同様な役割を持った成人と意見や経験の交換を積極的に行うべきです。そうすることで、自分の専門知識、さらにはスカウト運動全体に関わる能力を高め、若者が人生における道を見いだすことを支援できるようにします。

## 若者を導く立場の人へ

あなたは、親しく、責任があり、愛情深く、熱心ですか？  
あなたは、支援ができますか、スカウトの良き話し相手になれますか？  
あなたは、相手の話を十分に聴くことができますか？  
あなたは、例を示すことによって導くことができますか？  
あなたは、まとめることができ、創造的で、革新的で、忠実ですか？  
あなたは、前もって企画をしますか？  
あなたは、心を開き、頼りになり、臨機応変で、順応性がありますか？  
あなたは、熱心に関わりますか？  
あなたは、16歳以上の青年に接することが出来ますか？  
あなたは、若者を奮起させ、動機づけるために時間を割くことが出来ますか？  
あなたは、若者の生活に革新をもたらしたいですか？

もしこれらのことができるのなら、ローバースカウトのアドバイザーになってみませんか？

このポジションは、ローバースカウトに助言し、ローバーからの問いに答えるために傍らにいて、スカウト精神を促し、その支えとなるものです。あなたはローバースカウト達に成長と発達の機会をもたらすことになるでしょう。あなたはローバースカウトのニーズを理解し、地域や国のレベルに対してローバーが興味をもっていることについて示します。

あなたはスカウト教育法を用いて、ローバースカウティングの目的に沿い、グループの安全に責任を持ちます。

あなたには成人としてスカウティングに関わる時間があるのでしょうか。あなたは、柔軟で役に立ち、活動に参画し、新しいプロジェクトを見つけて、活動資金の造成の機会を知り、ローバースカウトのプログラムに精通し、国レベル／国際レベルの行事の情報を得てする必要があります。最も重要なのは、例を示すことによって導くことができる、ということ です。

他のスカウトの部門に関する経験があるのが望ましいです。実習訓練や構築訓練も受けることができます。

詳細は、あなたの地元のローバースカウト・グループに連絡してください。

(世界スカウト機構ヨーロッパ地域発行資料“RoCoReKi”(Rover Commissioners' Resource Kit)より抜粋)

## プログラムとトレーニング開発者との密接な関係

あなたが所属する団や地区・県連盟の方針を、成人の役割や成人に対するサポートを再定義するよう変えるのは、非常に大変なことです。成人がスカウティングをどのように考えているのか、ということは、技術やトレーニングの問題以上に（トレーニングを通じて変化をもたらすことが可能であるにもかかわらず）、姿勢や価値観の問題（前述した「アダルトイズム」のことを考えてみましょう）が横たわっていることとなります。

プログラムの開発においては、次のような点を考慮することになるでしょう。

- 若者と指導者のために作成したこれらのプログラム・ツールが、若者と成人がパートナーになって力を合わせることを可能にするだろうか？
- これらのプログラム・ツールは、若者が選択し責任を負うことに対して、十分な自由度があるだろうか？
- 若者が成熟していく段階に応じて、どのくらい、そしてどのように、若者に対する責任を含む成人の役割を進化させていけばよいだろうか？

ローバースカウトのプログラムがうまくいくようにするためには、成人のためのトレーニングによって補完されている必要があります。トレーニングの計画を立てる時は、次の点を含み、考慮している必要があります。

- 成人は、スカウティングの教育的な効果を、本当に理解しているだろうか？
- 成人は、若者が多面的な学習経験を実際に積むことができるような方法で、理論を実践に移すことができるだろうか？
- 若者にとって困難な状況が前向きな学習の機会となるようにするために、成人にどのような支援が必要か？
- ありきたりの活動を用いて、若者が提案する活動のアイデアを豊かなものにすることができるようになるには、成人にどのような支援が必要か？
- 若者が責任をもって率先して行う必要がある機会を次第に増やしていけるようにグループが機能する、そのための方法を微調整することができるようにするためには、成人にどのような支援が必要か？
- グループにおける日常的な活動やグループ内における人間関係が豊かな学習機会を提供できるようにするためには、成人指導者にどのような支援が必要か？
- これらは検討できるほんのわずかな項目に過ぎない。もちろん他にもたくさんある。





## ローバースカウト？ それともリーダー？

ローバースカウトのコミュニティの外でリーダーシップを発揮しているローバースカウトに最もありがちな問題は、ローバースカウトがカブスカウトのようなローバーより年下の部門において責任あるリーダーシップを発揮している、ということです。

リーダーシップを発揮することは、ローバースカウト部門において若者に対し定義された教育の目的に沿うための、1つの方法ではあります。ローバースカウトのプログラムでは、若者がリーダーシップを身に付けることができるよう、様々な機会を提供しなければなりません。例えば、ローバースカウトのチームリーダーを務める、ローバースカウトのコミュニティで議長を務める、ローバーより年下の部門を支援する、赤十字のようなスカウト運動以外の団体を支援する、といったことです。しかし、最優先事項の1つは、ローバースカウトがローバースカウトのプログラムを楽しみ、プログラム全体を余すことなく経験できるようにすることです。

ローバースカウトがローバー以下の部門においてリーダーシップを発揮するという点に関して、様々なモデルが見られます。

### モデル1：ローバースカウトは指導者ではない

このモデルを取り入れている団では、ローバースカウト部門と、成人の指導者が担う責任とを、明確に切り分ける必要があります。ある一定期間、カブ隊やボーイ隊で指導者の補助を行うことは、ローバースカウトにとって意味のある奉仕でもあるし、リーダーシップを発揮するための選択肢の1つとなります。別の選択肢として、学校における地域社会でのトレーニングや社会的組織においてリーダーシップを発揮する役割を担う、ということも想定できます。また、若者にとっては、自分のリーダーシップ能力を養う場を自分で決めることができる、という選択肢となるように成人は配慮しなければなりません。「社会における建設的な役割を担うことができるよう、若者を支援する」というスカウティングの使命に留意しましょう。

各団はこのように留意することで、より質の高いプログラムを提供できます。18歳から25歳の若者に対して教育的なプログラムを提供すること、そして26歳以上になって初めて指導者に任命するようにすることで、成人指導者を、成熟した、より立場のしっかりしたものとすることができます。例えばイタリアでは、AGESCIによってローバースカウトと指導者の問題について論じています（下記参照）。

私たちはいつも指導者不足に悩まされています。AGESCIでは、公平を期すため、各隊は男性と女性によって指導されます。そのため、各隊は最低6人（男3人、女3人）が必要になります。2人がBranco（8～12歳の部門）、2人がRepart（11～16歳の部門）、2人がNoviziato Clan（ローバー前の部門）を担当します。指導者はトレーニングの責任者の規則に従って承認されなければなりません。もしローバーやスカウトを指導者に含めることができれば、必ずしも「男性と女性」でなくとも、もっと多くの人を集めることができるでしょうが、そうすると他の問題が出てきます。ローバーやスカウトが責任を担うことができるようになる前に、より多くの責任を課してしまうと、彼らは燃え尽きてしまうでしょう。そのため、ローバーやスカウトは指導者を助けるに留め、また指導者を助けることを通じて、何物も（活動）、常に方法（スカウト教育法とスタイル）による理由（目的）があるのだということを学びます。この方法を取ることでより大きな責任を担わなくても良くなるので、ローバーやスカウトは他の人々にどのように与え、その人達をどのように幸せにするかを学ぶことができます。ローバーやスカウトは、自分自身を理解するために誰かを助けることは、自己実現のための最も優れた方法の1つであるということを学ぶことができます。



## モデル2：スカウティングにおけるローバースカウトとリーダーシップ

一部の団では、ローバースカウトと指導者の両方になれる機会を提供しています。若者はローバースカウトとなり、青少年プログラムを受ける対象として、自己の発達に焦点をあてていきます。その一方で、ある部門の正式な指導者となり、その部門において他の若者に青少年プログラムの内容を与える責任を負うこととなります。

このモデルでは、2つの役割を切り離しておくことが重要です。そして、若者がスカウティングの指導者になる際は、通常の過程を経ることが必要となります。この過程には、指導者を任命する会議の過程でインタビューを受けることが含まれるかもしれません。そうすることで、適切に人柄を見て、最初の導入トレーニングを行い、セーフ・フロム・ハームに関するトレーニングを行い、それからスカウティングにおける具体的な役割を与えます。

このモデルを取り入れている団は、2つの役割を明確に切り離すべきです。そして、スカウトが成人への移行において、これらの役割を区別でき、その活動におけるこれらの複雑さをうまく取り扱うことができるようにします。

## モデル3：ローバースカウト活動の機会が無い

一部の団では、ローバースカウト部門が無く、青少年プログラムは高校卒業に達した時点で提供されなくなります。その団がこのような選択をしている一方で、ローバースカウト・プログラムは、青春から成人期への移行に際し、若者に豊かで価値ある経験をもたらすことができるようにも思えます。というのは、ローバースカウト・プログラムはB-Pがまとめた概念に基づき、今日の若者のニーズに合わせるようにガイドラインを定めているからです。

世界的な運動体としてのスカウティングでは、若者が世界中の他のスカウトと繋がりを持つことができるようにします。そして、スカウティングは若者に、他の人々と分かち合い、異なる文化や習慣から学びを得ることで、異なるものを寛容する力と理解する力を高める機会を提供します。また、ローバースカウト部門では、ローバー以下の部門では得られない個人の成長の機会を提供します。また、この年齢の若者にとって、異なる者との相互関係を育み、ローバー以下の様々な部門においてより高度な奉仕プロジェクトを行う機会をももたらします。

そのため、スカウティングにおけるローバースカウト活動およびリーダーシップについては、次の点をよく考えなければなりません：

- ローバースカウト部門がうまく機能するようにするためには、ある年代の範囲のすべての若者が個人の発達のための教育プログラムに参加するようにしなければならない。ローバースカウトのプログラムはとても充実していて、すべて個人の成長における分野の教育目的に沿ったものでなければならない。ローバースカウトのプログラムは、個人の状況にあわせた挑戦できるレベルのもので、実行するのに価値があり、真にそこにいる青年のニーズと能力に適したものでなければならない。
- すべてのローバースカウトが、ローバー以下の部門の指導者になるという期待を持ってはいけない。成人指導者になるというリーダーシップは、スカウト自らの意思によって発揮されなければならない。
- 大部分の若者は、「ローバースカウトとして青少年プログラムに参加し自分の自己発達に焦点をあてること」と、「指導者となって他の者に対して青少年プログラムをもたらす、その自己発達を支援すること」は違うということを理解している。
- どんな成人であっても、正式に具体的な役割を与えられることなく、スカウトの指導者として受け入れてはならない。明確な基準に従い、評価を受ける限られた期間の間、受け入れるべきである。

ローバースカウト部門は、ローバーが対象とする年齢層のすべての若者に対して提供されなければなりません。そこでは、若者が期待するリーダーシップを発揮するポジションと責任が提供されることとなります。

ローバースカウト部門では、3つのステージによって、進歩的な方法でこのニーズに対処しようとしています。第1のステージは「準ローバースカウト」で、若者はローバー活動を通じて技術や経験を得ます。第2のステージ「正ローバースカウト」に到達すると、若者はローバーのコミュニティにおける役割や（例：ローバースカウトのチームリーダー）、ローバー部門の外での役割（例：ローバー以下の年齢部門や他団体における奉仕）を担うようになります。最後に、スカウティングに対し継続的に関与する（スカウト指導者としての道を選ぶ）か、社会の発展に寄与する他の組織に参加するかを選んで、「旅立ち」に備えることとなります。

## ローバースカウトにもたらす、成人の支援とは

スカウティングにおいて、成人の支援は、個人およびグループ両方における成人と若者の自発的な相互関係（パートナーシップ）を含んでいます。この教育的な相互関係において、成人の役割は、スカウティングの目的、原則、手法に基づいた方法を通じて、自己学習の過程を促進することです。

成人が若者にもたらす支援は、スカウティングの教育の性質に基づいたものです。すなわち、成人は各々の若者が成長するのを支援する、という特定の役割を果たすということです。

スカウティングにおいて提供される教育的な支援は、他の成人による支援、すなわち、通常、若者の人生に対して両親や学校の先生、スポーツのコーチといった成人からもたらされる支援とは、異なる形を取ります。それぞれの場合において、なぜ成人と若者が相互協力するかという理由は異なります。目指している目標も異なります。その役割が持つ性質も異なります。感情の関係も異なります。そして、そこから起こる相互作用も異なります。要するに、教育する・される関係が異なっている、ということです。

スカウト教育法を正しく適用することで、ローバースカウトはその成長を支援され、ローバースカウトのアドバイザーやメンターから成人として生きるためのスキルを与えられることとなります。



## 10. ローバースカウト部門の活動

活動は、スカウティングを大いに楽しくするものです。しかし、「目的のある楽しさ」であることが、ローバースカウト部門では特に重要になります。明らかに活動はローバースカウト・プログラムの一部ですが、それは楽しいからではなく、ローバースカウトが成人へと成長していくための有用なツールとなるために行うのです。

ローバースカウト部門の活動には、若者にとって重要な問題を扱う機会を含めるべきです。すなわち、健康、人間関係、性に対する責任ある姿勢、ライフスタイル、個人の安全、人生の選択、といった問題です。活動によって、若者が環境の問題と自分の地域や世界に対する影響が何であるかを体験することができるようにします。これは野外活動を取り入れることによって可能となるでしょう。

### 活動の4つの分野

活動とは経験の流れであり、活動によって、若者が1つないし複数の教育目的に応じた知識・技術・姿勢を身に付けることができるようにします。若者は活動を通じて経験を積み、学んでいくのです。

ローバースカウトの活動は非常に多彩で、様々な形を取り、様々な方法で編成されます。このように様々な形を取ることは、充実した学習経験をもたらすことに貢献しています。ローバースカウト・プログラムにより学ぶということは、定着した活動や、多彩な活動やプロジェクトを通じて達成されるのです（「行うことによって学ぶ」の項を参照してください）。

若者に多様な活動をもたらす一方で、ローバースカウトのプログラムはまた、若者がこの年代における具体的な課題に向き合うことができるような活動や経験も重視します（「青年の特徴とニーズに基づくローバースカウト・プログラム」の項を参照してください）。

したがって、ローバースカウトのプログラムは、各々のローバースカウトが自分の進歩において活動の4つの分野に取り組むよう求めていくものでなければなりません。4つの分野とは、次の通りです。

1. 活動的な旅行と異文化の体験
2. 大自然での冒険
3. 地域奉仕活動
4. 社会や経済に対する理解を深める

### 活動的な旅行と異文化の体験

若者は、他の社会や他の文化について知ることが必要だと感じています。ローバースカウト部門におけるシンボルの活用は、この必要性を認識しています。ローバーリングとは、旅をし、探検し、発見することを意味しているのです。

「活動的な旅行」とは、ローバースカウト部門においては普通に行われる活動でなければなりません。ローバースカウトは、いわゆる一般的な旅行にのみ興味がある普通の観光客のような旅行はしません。ローバースカウトは活動的な旅行者、すなわち、様々な環境において、人はどのような文化、信念、期待を抱いて生活しているかを熱心に知ろうとしている旅行者なのです。ローバースカウトは好奇心が強く、冒険を好み、発見し、理解したいと望むものです。活動的な旅行者は、冷房の効いた車に乗って一週間に1,000kmも移動するような旅行はしません。活動的な旅行者は歩き、自転車を使い、ヨットを使い、地元の人と交流できるようなやり方で公共交通機関を使い、地元の人と交流し、地元の人を理解するようにするものです。活動的な旅行とは、自然環境を知り、歴史を知り、他の人々の生活や文化を知る方法なのです。

活動的な旅行と異文化の体験は、まず身近なところから始めるべきです。多くの若者は、自国の文化がどれほど文化的に豊かであるかを知りません。自分の国を愛し活動的な市民となる第一歩は、自分の国をよく知ることです。ローバースカウトのプログラムは、若者にこうした経験、すなわち自分の国の様々な面を知る機会を提供しなければなりません。



しかしながら、いわゆるグローバルゼーション（世界規模化）と言われる現代において、若者に他の文化を知り、国際的な／異文化の交流を経験する機会があるということは重要です。スカウティングの世界的なネットワークは、教育のツールとして用いられなければなりません。ローバースカウト部門では、例えば次に示す例により、国際的な経験を積むことができる機会を可能な限り多く提供しましょう。

- 2つまたはいくつかの国のスカウト連盟による若者の交流
- 外国の地域社会やローバースカウトのコミュニティと共同する
- 国際的なイベントに参加する

## 大自然での冒険

野外での活動と自然における生活は、スカウト教育法の重要な要素です。このことはローバースカウト部門でも無視してはなりません。

若者は多くの活動を行うことになりませんが、時間の管理と生活において良いバランスを保つことに関しては、若干の難しさを感じているようです。自然の中での活動、すなわち大自然において自然の要素と向き合うということは、身体の自然なバランスを保ちどんな状況においても対応できるように身体を鍛えるためには、本来欠かせないものです。

ローバースカウトは、山や森でのハイキング、カヌー、登山、ヨットといった活動を通じて、大自然を好む気持ちを高め、保持しなければなりません。また、これらの活動はローバースカウトが自然環境や野生生物を保護し、資源を無駄にすることなく生活することに対する理解と関心を高めるものでなくてはなりません。

ローバースカウトは定期的に大自然における探検を実施しなければなりません。そうすることで、自然の要素と向き合い、適切にリスク管理をすることを通じて自身の限界にチャレンジし、自然環境の重要性を理解し、自然に生きる人々から学び、チームでの活動を通じて自分の能力を高め、臨機応変に物事に対応できるようにします。

## 地域奉仕活動

「奉仕する」ということは、B-Pがローバースカウト部門に対して提案したモットーです。このことは、スカウティングの使命である「よりよい世界を創る」ことにも一致します。

旅行や探検を通じて、ローバースカウトは自分のコミュニティ、国、周りの世界から発見することができます。ローバースカウトは他の人々と連帯する気持ちを高め、問題を認識し原因を理解するために学びます。こうすることで、前向きな変化をもたらすような貢献プロジェクトを展開することができるようになります。

地域社会における奉仕活動に参画する前に、ローバースカウトは、ただ「親切」なだけであることを避けなければなりません。緊急に奉仕することも時には必要でしょう。しかし、ローバースカウトは地域への奉仕を通じて、責任ある市民となるのに必要なスキルを学ばなければなりません。ここで言うスキルとは、批判的な思考法、問題の分析、問題の解決、対立を解消する方法、プロジェクトの管理、といったスキルのことです。

## 社会や経済に対する理解を深める

多くの国において、若者は社会に出て仕事に就き、将来は家庭を築いて生活することに備えるということに対し、困難な状況に直面しています。地域社会における奉仕を実践することは、若者に市民であることの間接的な感覚を身につけさせるのに役立ちます。しかし、仕事に就き家族を持って生活することに備えることもまた、若者を成人の役割に近づけるためには非常に重要なことです。

ローバースカウトのコミュニティは、若者が社会に出て仕事に就くことができるよう支援するための様々な機会を提供しなければなりません。



- 自分の住む地域における労働市場の情報を集めて、労働組合の関係者、企業の役員、地元の利用者からの話を聞く機会を設定することができるよう、ローバースカウトによって職業情報を管理する。
- 例えば英国エディンバラ公 国際アワードのようなシステムを構築して、時間管理、チームワーク、意思決定といった、若者が仕事に就いてから必須とされる技術を学び経験できるようにする。
- インターンシップの仕組みを整備して、若者が様々な専門職のフレームワークを経験し、自分の進路を考えるための良い情報を集めることができるようにする。
- 何らかの収入を得るプロジェクトを展開する機会を提供することで、実際の経済活動がどのようなもので、地域のニーズに基づいたサービスや製品を開発するとはどういうことかを体験できるようにする。この種のプロジェクトでは、ローバースカウトがミニ会社やミニ企業を作って、若者が仕事を見つけるのに苦労しているような状況にある国において仕事を作り出すことができるようにする。ある国のスカウト連盟では、この発案をサポートするため、パートナーの支援を得て、マイクロクレジット（貧困状態にある人々のための金融サービス）の仕組みを構築したり、家庭教師のネットワークを作ったりしている。ローバースカウト部門はこの分野への関与を増やさなければならない。

## 推奨プログラム

### メッセンジャーズ・オブ・ピース (Messengers of Peace : M o P)

ボーイスカウトでは、スカウトや指導者が平和について考え、戦争や環境破壊、差別、いじめ等、平和を阻害する問題への意識を高め、スカウティングの「よりよい世界を創ろう」という目標の達成を目指した活動を改めて実践していく機会として、この活動に取り組んでいます。

実施登録されたプロジェクトはインターネット上に表示され、世界のスカウトたちとプロジェクトの情報交換が可能となり、自分たちのプロジェクトを更に深めることができると共に、新たな国際交流のきっかけともなります。また、プロジェクト実施に際しての財政的支援を受けることも可能です。



世界スカウト財団から資金提供を受け、「ギフト・フォー・ピース」を更に発展させた「平和運動への取り組み活動」として、2011年9月に始まった世界スカウト機構(WOSM)主催事業です。メッセンジャーズ・オブ・ピースはグローバルネットワークとグローバルサポートファンドの2つで構成されます。

#### M o P グローバルネットワーク

ソーシャルメディアを活用しプロジェクトをインターネットを通じて登録できます。登録すると、Googleマップ上に赤い点となって表示され、他のスカウトがその赤点をクリックするとそこで実施されているプロジェクトの内容がわかるようになっています。

世界中のスカウトたちがプロジェクトの情報を交換したり、協力したりすることでネットワークが広がり、最終的にはGoogleマップが赤い点で埋まることを目指しています。ギフト・フォー・ピースは110か国、1,000万人が参加したが、M o Pは2022年までの10年間で2,000万人(以上)の参加を目標としています。グローバルネットワークにはすでに12,000のプロジェクトが登録されています。

## グローバルサポートファンド

グローバルサポートファンドには事業全体への寄付3,700万ドルの内、2,500万ドルが提供されています。この基金は各国連盟の能力を強化し、より貧しい国々のスカウトが地域に変化をもたらす活発な活動の実践を可能にします。この基金は、地域事務局を通じ、プロジェクトマネジメントツールによって管理され、これを用いて世界事務局と世界スカウト財団はプロジェクトの運営をサポートします。

## スカウト・オブ・ザ・ワールド (Scouts of the World)

スカウト・オブ・ザ・ワールドは国際連合との共同プロジェクトです。

プロジェクトを実施する対象年齢は15歳から26歳までで、スカウトだけでなく一般の青少年もプロジェクトに参画、実施参加できます。

プロジェクトの主なテーマ、開発、平和環境です。



## 世界環境プログラム (World Scout Environment Programme : WSEP)

ボーイスカウト日本連盟は、第38回世界スカウト会議の決議 (No. 22/08) に基づき、世界環境保護バッジ (通称パンダバッジ) に代わり、世界スカウト環境バッジを導入することといたしました (※平成24年3月4日スカウト教育推進会議承認。施行日：平成24年4月1日)。

スカウト (カブスカウト以上) を対象とする世界スカウト環境バッジは、WOSM推奨の環境プログラムを5つ履修するか、該当するチャレンジ章や技能章の細目を履修した後、各団・地区・県連盟が計画し実施する環境プロジェクト、あるいは日本連盟が主催する環境に関するプロジェクトに参加することで取得できます。



## 英国エディンバラ公国際アワード

日本では、ローバースカウト部門に進歩制度は不要とされていましたが、大学ローバーのように進歩制度を実的に経験していないローバースカウトや、指導者としての活動が多いためにローバースカウトとしての活動ができない者が多い実情があり、世界スカウト機構からの提案も踏まえ、国際的な体験活動の評価のものさしであること、また、海外留学や海外での就職の際にも活用が可能となるよう、英国エディンバラ公国際アワードを採用しています。

このアワードは、対象年齢を18歳から24歳以下のローバースカウト (同年代の指導者も含む) を対象とし、個々の青少年が累進的な自己開発プログラムにより、有為の人生を送るうえで必要な能力を高めることを目的としています。アワードは「賞」で、これを受賞するための取得要件をプログラムとして提供し、アワードリーダーなどの支援を受け、各個人が挑戦します。アワードは3つのレベル (ブロンズ、シルバー、ゴールド) があり、どのレ



ベルからでも挑戦が可能です。日本ではシルバーおよびゴールドへの挑戦を推奨しています。

### アワードの特徴と、仕組み

アワードは「賞」であり、これを受賞するための取得要件（プロセス）を「プログラム」として提供し、アワードリーダー等の支援を受け、各個人が挑戦します。参加希望者は、ボーイスカウト日本連盟事務局を通して参加申請をすることで、英国エディンバラ公国際アワードジャパン事務局に登録され、プログラムが開始となります。

アワードは、個々が4つの活動分野へ継続的に調整することで授与されます。

### 3つのレベルと、4つの活動分野

アワードの挑戦期間に応じて、3つのレベルが設けられています。ゴールドを受賞された場合、イギリスのエディンバラで伝達が行われます。どのレベルからでも挑戦できますが、シルバーおよびゴールドへの挑戦を推奨しています。

- ブロンズ（銅） 最低6か月の挑戦
- シルバー（銀） 最低12か月の挑戦
- ゴールド（金） 最低18か月の挑戦

また、アワードにはローバースカウトがバランスのとれた成長を促すことを目的とした、4つの活動分野を設けています。

活動分野	概要
A： サービス	長期間の奉仕を通じて、自分たちが他の人々に提供するサービスが与える影響を自分の目で確かめ、経験し、より良い市民になることを意図しています。
B： スキル	長期にわたって特定のスキルを向上させることで達成感と幸福感、そして将来務める仕事へつながるような能力の向上にもつながることを意図しています。
C： フィジカル・レクリエーション	身体的活動は人間が健康であるためには不可欠な要素であり、参加者が楽しめる身体的活動を行うことで、長期的に好ましい健康体を身に付けることを意図しています。
D： アドベンチャラス・ジャーニー	参加者が自然について学び、生活を自ら行うことについての自信や、チームワークを通じての仲間のありがたみ、そして健康を向上する機会を得ることを意図しています。
E： レジデンシャル・プロジェクト	チームワークやリーダーシップなど、アワードのプログラムを実行する際に培った多くのスキルを活用する機会として設けています。参加者は日頃の仲間、もしくは初対面の人々と見知らぬ居住環境内で、目的を持った共通の活動を行い、少なくとも4泊5日の期間で実施します。

## 本プログラム参加方法と、アワードリーダー

本プログラムに参加するためには、ウェブ（日本連盟ホームページ）に掲載されているアワードリーダー情報より、自らアワードリーダーを探す必要があります。アワードリーダーが見つければ、アワードに取り組むための申請書をウェブ（日本連盟ホームページ）からダウンロードし、アワードリーダーと所属団のアドバイザーへメール（又は郵送）します。そして、所属団のアドバイザーが確認した後、申請書データを日本連盟事務局へ送信をすると共に参加費を納入すれば、英国エディンバラ公国際アワードジャパン事務局への申請が開始されます。

アワードリーダーは、ボーイスカウト日本連盟が主催するアワードリーダー研修会に参加することで資格を得ることができます。所属する隊のアドバイザーにも研修会へ参加いただくように依頼をすることで、アワードリーダーへの資格が得られるとともに、アドバイザーのスキルアップにもなることが想定されます。





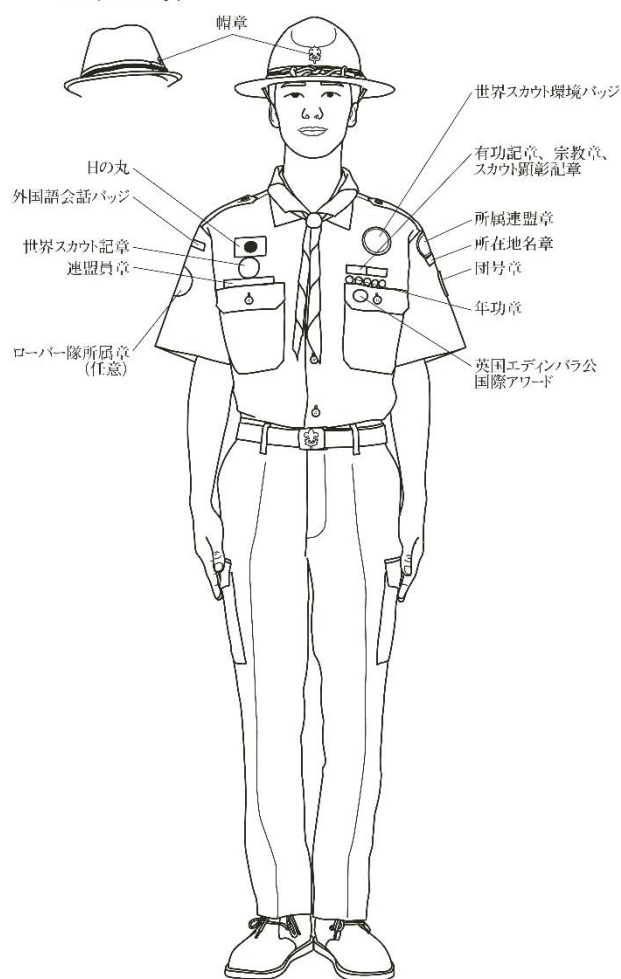
## 11. 制服と記章類

### ローバースカウトの服装

ローバースカウトの正装は次の通りである。

- ①制帽 男子はハット、女子はハット又は中折れ帽を隊で統一して着用する。帯はいずれも紺色と緑色のストライプの布製とする。ハットには正面、中折れ帽には左横に位置するように帽章をつける。
- ②ネッカチーフ ネッカチーフは、隊で統一して定めた色の三角形の布とする。
- ③上着 上着は、カーキ色系統でふたつきポケットが胸の左右にある肩布付カラー襟のシャツ。長袖も着用することができる。
- ④ズボン ズボンは、ブッシュタイプのオリーブ色系統の長ズボンを着用するが、隊で統一して半ズボンおよびキュロットも着用することができる。半ズボンおよびキュロット着用時の靴下は、ズボンと同系色のものとする。
- ⑤ベルト ベルトは、緑色の布製、又は革製で、バックル付きとする。



ローバースカウトの正装



- ・上着、ズボン共に、ボーイスカウトと同じ。
- ・ネッカチーフは、ボーイスカウトと同じ。
- ・ベルトは、ベンチャースカウトと同じ。
- ・制帽は、ボーイスカウトと同じ。

## ローバースカウトの記章

ローバースカウトの記章は次の通りである。

区 分	様式・図柄	寸法	地色	着用部位その他
(1) 帽章	 一重目ロープつきスカウト章	3.3×3 cm	金色	ハットの正面につける。中折れ帽は左横につける。
(2) 年功章	1年章から4年章はボーイスカウトと同じ。5年章、星章の円内の数字は5、円の色はえんじ色。台座一赤色。		ボーイスカウトと同じ。 5年章、金色。	左胸ポケットの上縁に接してつける。在籍年数が5か年を越える場合は、5年章と越える年数分の年功章の2つを着用することができる。
(3) 襟章	ボーイスカウトと同じ			
(4) 世界トスカウト記章	カブスカウトと同じ			
(5) 連盟員章	ボーイスカウトと同じ			
(6) 英国エディンバラ公国際アワード		2×2.5 cm	取得レベルにより、金色、銀色、銅色	左ポケットのフラップの制服中心部側に取得レベルの高いものを1つつける。
(7) 日の丸	カブスカウトと同じ			

以 上

## ローバースカウトハンドブック

---

令和2年9月

改訂初版発行



公益財団法人

**ボーイスカウト日本連盟**

〒167-0022

東京都杉並区下井草4-4-3

電話： 03-6913-6262（代表）

e-mail： [komi@scout.or.jp](mailto:komi@scout.or.jp)

---

